野津原方言集

16

マサハル

野津原方言集　続編№１６号

表紙画……後藤政治
題字……姫野順子

★　ご協力いただいた皆様

小野肇、河野猪熊、後藤熊五郎、河野定、那須量、
佐藤昌史、加藤正人、利光節子、工藤ウエ子、
甲斐英行、井下キヨ、三浦アサエ、安田ハルエ、佐藤吉晴、
岡本政雄、波多野テル子、住田政利、河原文男、工藤町子、
戸次富造、諏訪会、オフイスシステムサービス。
野津原商工会、野ざくら舎メンバー、なつメロ会。

★　使わせて頂いた資料

大田公民館あの日あの時資料、歴史記録会、街道物語、
原村小史、野津原町史、野津原文化財調査こぼればなし、
月の唄資料、矢原郷土誌、読み語り資料、ナツメロ便り。

野津原方言集　続編№１６号《通算２６号》
平成２５年５月吉日　発行
大分市野津原竹矢　　野津原方言調査会
☎　０９７＝５８８＝０５７２

目次

みだし……1
もくじ……2
はじめに……3

★ 往還街道物語
往還街道図……4
馬子と旅人……5
柿野坂……6
神楽ばやし……7
宮脇　矢の原……9
泥つけ……10
方言説明……11
工事進んで……12
こぼればなし……13
母は達者か……14
草が長ぅじ……15
方言説明……16

★ 玉手箱
竜の恩がえし……17
お伊勢松……18
手まり唄……19
故郷の手まり唄……21
方言説明……22

★ 民話、伝承
瀬戸越え難所……23
人の情けは……25
方言説明……28
人生夢とロマン……29
力もらった……30
秋葉の力持ち……31

★ 子どもと方言
七夕まさつり……33
海の水は……35
方言説明……37
正直のみやげ……37
迷子のお姫様……40
方言説明……42

★ 故郷の味
じり火焼き……43
やせうま……45
つけ汁……47
方言説明……49

★ あげなこげな
人生双六……51
戦前一年生……53
八厘、里程木……55
方言説明……56

★ 女性の底力
戦時疎開……57
竜馬も通った……60
方言説明……64

★ 民話、伝承
褒美の衣装……65
横道……69
蚕とパックン……69
得して失う……70
方言説明……73
地主の接待……74
方言説明……76

つづく

★　表紙画　ご協力者のご紹介

後藤政治様

私は　未熟児で生まれ　小児マヒになり
歩きはじめは　５歳頃でした。
絵が好きで　画家さんの絵を真似たり
しながら　いつ頃からか足で　描くように
なりました。鉛筆、水彩、アクリルで
描いています。一つの絵を　描くのには
３ヶ月かかります。未熟な絵ですが
皆様に見ていただければ　この上ない
しあわせに思います。

ご本人のお話から。

題字のご協力者　　姫野順子さん

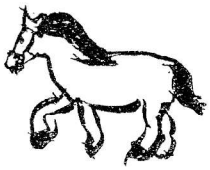
続編第６号《平成１６年》から　支援してくれている　地区の姫野さんは　習字歴１５年余り自営業の　余暇に指導受けながら若いのに　精進して『なかなか上達しなくて』と　謙遜していますが素晴らしい　墨跡鮮やかに若さが感じられます。素直に筆を走らせて　平成２４年１１月１７日『全国善行章受賞』の際も　記念の事務局看板にも　快く書いて頂きました。

そげなこたーとてん無理で　と遠慮しよったけんど　無理ん頼みぅユウマァ聞いち　くれち思いで多い記念品に　なったちますます頑張ろうえち　感謝しちおります。何か書かにゃならん時　つーじ行っち頼むと　『いいで』ち笑顔じ書く　そん横顔にゃ今度ん　ご褒美を喜んじくれたち　嬉しゅうなっちしまいます。オオキニ　ダンダン。

★　ちょつと一服
厄年に帯を買う……７７
地から出た宇曾山……７９
町づくりん人たち……８０
方言説明……８３
五助の人気……８３
出針は禁物……８４
歩けば三里……８５
方言説明……８６

★　方言単語
き⇨キセ……８７

あとがき……９９
伝言板……１００



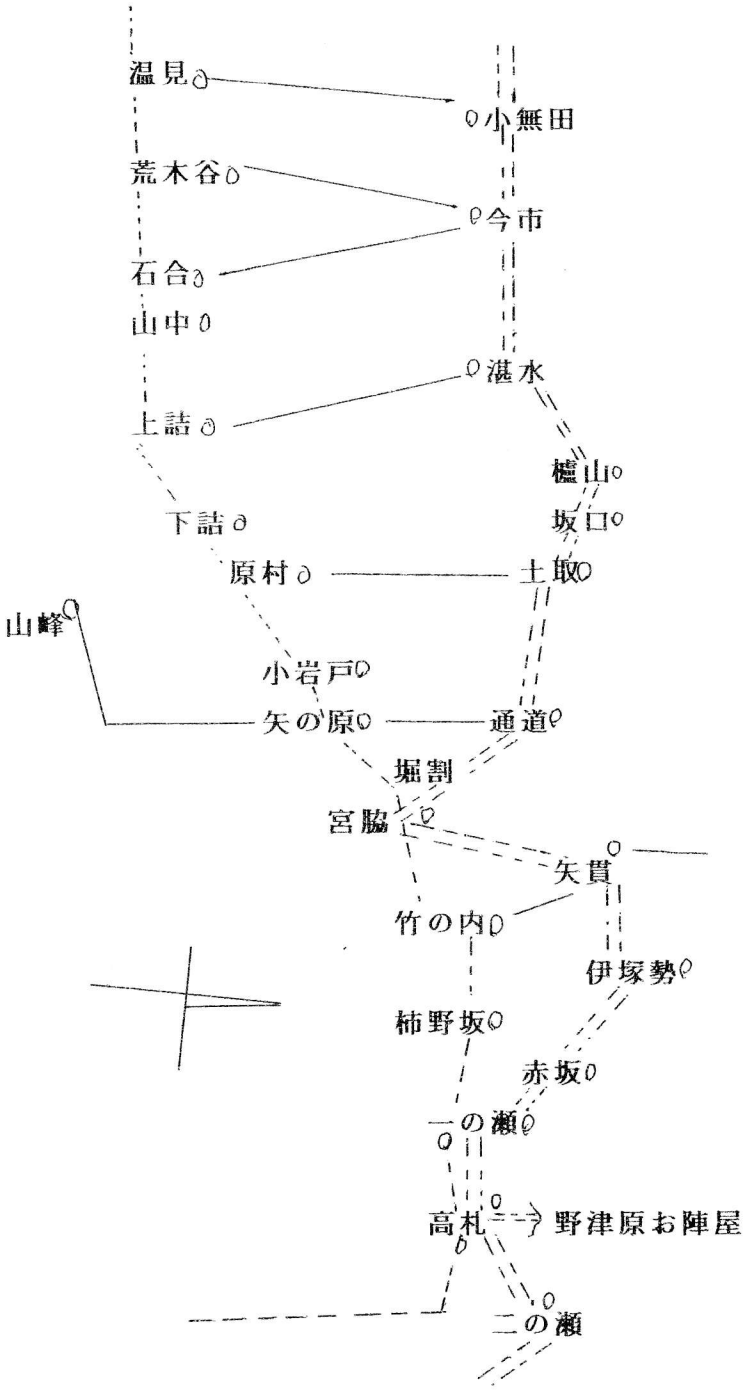
★　はじめに

野津原方言集．続編№１６号《通算２６号》　ご愛読頂きまして　誠にありがとうございます。いつものような　素人集団の冊子ですが　約１８年間に多くの皆様の　ご支援と資料ご提供など　温かい励ましに支えられて　あっと思う間にここまで　辿りつきました。

これも　ご愛読くださる皆様の　影からの心の応援によるエンジンの　動きがよかったからと　感謝感激を申し上げます。

今回は特に編集の後　ワープロ打ち込みになって　機器のトラブルがあり　印字の不鮮明さが　監修で指摘され　慌てましたが　新しいパソコンでは　素人は『ドンナモン』立ち止まってしまいました。この間パソコンも何台か　頂戴しましたが　素人には　重荷で遅々として進まず　躊躇しましたが　幸運にも古い物でも　『大切に資源を有効活用』の　気持ちで修復に傾注している人に　巡り会いました。つぶさに説明をしました。ボランティア活動で　今残さないと　消え　失われる窮地にある事。感動してくださって　手元にある機器を早速　送ってくださったのです。新品ではないが　使い勝手はようのです。

国道４４２《熊本県道…往還街道》　その１



＝＝＝＝＝＝＝旧参勤交代道《肥後街道》

……現在国道４４２号線《今回の往還街道》

今回は№１５号まで続いた　肥後街道《熊本街道》に続く明治に入って開通した　往還街道の熊本県道から　国道になった現在の国道４４２号を　馬子の五助さんが旅の人と　連れの一ちん街道物語。幕末にゃ勝海舟や　坂本竜馬が歩いた道たぁちっと　ちがう新しい往還ぬ歩くこちなった。

じゃが野津原ん宿場ん中にある　高札場かる歩くきチッタ坂道も　ひじいきシャントしち　歩かんと腹帯どま　緩むかん知れんで。一の瀬ん橋もケツクシャ　りっぱナンガ架かり『こりゃいいわい』ち　油断すりゃもうおおごつ　作りタツルデ。ナンサマはじめんうちゃ　辻原ぉ上っち行く予定じゃった。じゃが頭んいいしの話しじ　『そげな大けな道が通りドマすりゃもう　泥棒なんかも来ち　それこす大事』ちまぁ言うもんじゃき　『反対反対』ちなった。

そんあげくんはてにゃ　とうとう柿野ん横べろぅ坂道ぅつけち上る。『こげん坂をぇ』『それでん赤坂よりゃいいき　そりしたがいいど見晴らしもいい』　そげなこげなじ坂がここへらに　なったごたる。上りながら下りながらン眺めぁ誠ちいい。坂へらぅ削り落としち広い道　『けっしゃイイワい』　誰かが言うたら　みんなも『こりゃいい』になった。

赤坂ん石だたみ道は　タシカニひじい坂道でんある。木の影じゃきあんまり解らんが　冬どま凍っち滑るもんじゃき馬もやーり怪我ぅしたり　大事じゃつた。そりぇ坂がナンサマ急じゃきもぅ　やえこちゃねぇごたる。五助さんなそこん所ぁ心得ち　荷物ぁ上手に分けちゃ　二度手間じゃが理屈はよかった。馬子歌ん…♨あん娘としごろ　姉さんかぶり　いつか覚えた馬子歌を　ハ七瀬のせせらぎ　サラ　サラ　サラ　サラ　ホイ　ホイ　ホイ……♨　『ほんな　ぼちぼち柿野ん坂を上っち行くかなぁ』。

往還街道に馬子歌が…№１

参勤交代当時の江戸時代を離れち　こんだ表往還街道を五助ん馬子歌ぉ　旅んしと聞きながらそりゃまぁ　面白ぅおかしく笑う道中にゃ　涙がこぼれたり笑うち　ヘソが茶を沸かしたり　そげなこたぁアルメーガ歴史ん　素朴な味と新しい夢にロマンも　重ねち歩くんも面白いもんで。

柿野坂…明治になっちこん坂ぅ　とうとう道にしち温見まじ行くごつしち便利になった。肥後街道たぁ趣もガラット変わり道幅が広ぅなったき　馬車が時んまに多ぅなった。荷物もガイト一回に運ばるるき　『馬車引き』が多ぅなり　ケックシャ商売が繁盛しち戦後まじそん数も　３０台ぐれまじなった。

ただ坂がヒジイモンジャキ　荷物がテンショムショ多いと　下る時にゃブレーキを絞むるが　それでん効かんごつなっち　飛ぶ始末じ事故が多ぅなった。もんじゃき南側ぇ三和じ　固めた駒掛けち言う防護策ん石垣ぅ作った。こりー馬車を横付けすりゃ　何とか飛ばさんじ済んだが　なれんと馬が反対方向に向き　こんだ北べらん石垣突きかかっち　馬が犠牲になることもあった。

そげな事があっちかるわ　下手ん山に馬頭観音を奉り　無事故を念じた涙ぐましい有様。曲がりカーブも悩みん種にもなった。熊本かる走っち来たハイヤーも　カーブ曲がりそこねち畑に転覆し　そこまじゃよかったが這い出ると　ライターじ確認したら火が　ぽったガソリンにちーたき　火災になっちえーと客を連れ出した。それこすもうオオゴトじゃつた。妙麗美人が傷の手当て中に『顔は大丈夫じゃろうなぁ』　そん気持ちゆう解る。

盆の１７日にゃここじ　馬車引きんしたちが持ち寄りん　接待ん盆踊りがありよった。それからは事故もねぇごたるが。

こんカーブん下は深い淵じゃき　戦争に負けた後に誰が捨てたんか　戦闘機んエンジンが捨てちゃつた。見つかると悪いんか　ソレトン後じ引き上ぐるんか。そげな悲しい物語ん場所も今じゃ直線道路　そげな話も知らんしが多ぅなった。坂を上りつめる手前に清水がでよる　ここにゃ噴火石の中じ冷えたんか『ヤワラシイ石』があっち　ハンゴイシち言いよった。小刀じほるとヤワラケーキ簡単に　自由に掘れたもんじゃ。

すぐ上ん平坦地にゃ火葬場があった。死去した遺体に薪なんかを回りに積み上げた　簡易な火葬方式で『オンボウ』の世話で　火葬してもらっていた。見渡す野津原の平野部を眺めて故人もきっと静かに紫煙に乗り　天国に向かぅたんじゃろう。真下に『伽藍鶴』の地名がある場所が　美じく川の流れに取り巻かれちょる。秋の銀杏の色彩は目にシムゴタッタ。

岩肌を堀とっち道はえーとデーラに　そしち昔ん諏訪村と野津原村とん境ん　法泉橋にたどり着いた。当時ん諏訪村村長が゛威信をかけち作った橋。当時総工費２万円　西大分かる馬車で運んだ真っ白い切り石じ　組み込まれた方式ん橋が　当時名物になっち見物に来るしも多かったそうな。石工は泊まり込み　さすがは『石風呂』に入っち　見事な橋を作りあげちょる。そしち合併しち野津原村に　大きく広がっち行く。

川底は何万年も前ん阿蘇ん噴火ん　溶岩が固まっち川底になったき　周辺のほとんどが一枚岩になっちょる。少し上手にある『橋本橋』も　そげな岩盤の上に架けられた橋でんある。橋ち言ゃこん後に出ちくる　『小岩戸橋』『下詰橋』もおなじ岩盤の上じ見事に組くあげた方式ん橋じ　野津原に残っちょる。

滝壺に流れおつる水の音が　鈴を鳴らすごたる響きじゃきこん滝を『鈴が滝』ち呼ぶとん言う。優しい人ん心ここにも。

★　神楽ばやしに更け行く夜は　濡れて見たいよ鈴が滝
　　ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎が　スイスイ
　　ホイ　ホイ　ホイ　★

そん昔しゃ修研者ん修行ん場所　滝に打たれ唱ゆる般若心経は　滝の水しぶきと轟音に　かき消されてん念ずる心ん極致はやがて　届くもので若さも楽しみも　離れた世界に身をおいてひたすら　行をこなしたんじゃろう。

近時になっち水を利用した　水車が軸を介しち約２０米の上の精米所ん機械を動かす技法を　考案しち便利に供しちょった。側に立っている一字一石塔《大乗妙典》は　天下泰平処繁栄ん願いが込められち　立てられた塔。１７２７年の祈願塔。ここじ県道かる辻原、福宗にも別るる四辻。道しるべに右００左００ち書いた　文字の跡ん優しい心くばり。

宮脇まじ進むと大野かるん道が左かる　諏訪ん道が右かるこき一出ちくる。参勤交代時代ん行列が通過すると　早馬は野野台に知らせに駆け出す。『狼煙』じ鶴崎に　久住に連絡する為ん事前連絡じ　確実にする役職ん動きは　大変じゃつたじゃろう。今なら携帯電話でチョチョ　そん代わり銭はいるが。

戦中戦後にゃ『木炭バス』が走り　馬力がねえもんじゃき坂道は乗客は全部降りて歩く　そん後ぅノロノロとバスは上る姿。今どま考えられん風景じゃが　そぅ言ゃガソリン不足を助くるたみ松から油取っち　代用に使うそげな工場も竹の内にあったなぁ。『松根油取り』ち言いよった。

県道がアイチカルは掘割坂が夏どま　吹き上ぐる風がとてん涼しゅうじ　ひとよこいしたもんじゃつた。滅多ぇ車が通るわけでんねぇし　馬車も時時じゃき商売する　自転車が通ってんそりゃもう珍しかった。おまけに冷てぇイノコも側にあった。

『なんと冷てぇ水じゃなぁ』『ウメードガエ』『……』『ウメーナエ』『おいしい水ん事で』『やっぱ難しいけんど方言にゃ　温かみがあるなぁ』『じゃろうがえ　はじめは怒られよるごたるが　ゆう聞くと心がやっぱ　伝わるんか』『そげー思うわ』『だいぶ慣れたきなぇ　もう卒業してんいいな』『じゃろうかなぁ』

★　秋葉越えれば火伏せん森に　フロー煮えたか諏訪ん灯が
　　七瀬のせせらぎ　もみじが　チラホラ　ホイ　ホイ
　　ホイ　★

左側に上品な小高い山　秋葉山がある。火伏せ神が奉られちこん地域は　火事がねぇち言う。それにゃ火の用心もしよるが子どもも　学校に行きだすと皆んなずり　火番に回っち気をつくるち言う。山ん頂きにゃ日清、日露、シベリヤ戦争じ戦死した人たちん　忠霊塔がある。旧盆２３日にゃ中腹に　山の形ん火を焚いちそん霊を慰めた。水に不便な地区だけに　火災には敏感でんあったが　こげー水に不自由じゃき　行列んお陣屋も宿場町も　野津原に変更になった話でんある。☞江戸期間。

そげんふうじ田植えも遅ぅなる　えーと終わると決まっち村役場に『終わった泥つけ』が　行事になるぐれー水に難儀したき　こん行事が無事すんだ喜び。役職も喜んじ泥をつけちもらう　厄日でんあったごたるが　水が取れた日にゃ休暇取っち加勢に行くもんじゃき　事務するなぁ少なかった。けんど役場じゃ『泥じよごれてん一日も早ぇ　田植ヨコイ』を　ふれたかったごたる。こん行事は戦後まじ　名残りが残っちょつた。

※　投げた苗が宙を舞うて程よい所に落ちました。野津原村では田植えがはじまりました。早く植えた田んぼでは蛙が我が物顔に皆んなで合唱しています……ＮＨＫラジオ放送にあった野津原村　当時の原稿の一部です。

※※※　方言説明　※※※

６Ｐ…のぅち…連れだって。こち…ことに。じゃが…でも。ひじいき…疲れるから。シャント…しっかりと。ケックシャ…けっこう。ナンガ…などが。タツルデ…そのように。ナンサマ…なにぶんにも。ドマ…ようなら。べろぅ…場所を。こげん…こんな。そりしたか…そのように。

７Ｐ…ヘソが茶を…難題な話。アルメーカ…ないだろうか。ガイト…たくさん。テンシュムショ…無理やりに。三和…石灰と粘度土に塩を混ぜて踏みかためた補修材料。セメントのない時代の凝固材。ぼっち…漏れて。妙麗この場合年増。

８Ｐ…オンボウ…火葬作業の係の人。シムゴタル…染みるよう。デーラ…平坦な。石風呂…石をくり抜いて風呂に作った物を使っていた。。

９Ｐ…狼煙…発煙して連絡用に使う信号設備。木炭バス…木炭利用の発生ガスを利用して走らせるバス。ひとよこい…一休み。イノコ…水が自然に湧き出て溜まる場所。

１０Ｐ…ウメードガ…おいしいでしょう。そげんふうじ…そんな理由で。泥付け…田植えの済んだ泥のついたん苗を　役場に持参して職員につけて　田植えの済んだ報告をする。けんど…けれども。ヨコイ…休み。ふれたんか…知らせたのですか。

★　泥付け行事は戦後まで行われ　厳しい水と農家の田植えの苦労する　関わりに官民一体になる　素朴なほほえましい風習でもあった。遅れた農家の加勢に暗黙の　了解もさせたと言う粋な　計らいも年には見られたようだった。

行政の中心地じゃつた矢の原も　水の不便さが難点でんあっち　苦労したもんじゃつた。飲み水はじめ使い水　牛馬の水といのちきには切り離せん　そん水は掘割、中城、小岩戸の３つん場所かる運ぶんが日課じゃつた。参勤交代道と新しい往還道は　将来水を引く必死の作戦かも　知れん先人の知恵でんあったごたる。

行政ん中心ぬここにすりゃ　不便が身に染みるき『水なんとかせにゃ』ち　話題が飛び出しよったそうな。交通ん要衝としてん格好ん場所。明治にはじまった諏訪村も　まずこき一役場を置いた。じゃが村長が交替したりしち　不便の時は自宅利用役場にした。こげな時代も苦肉ん策じゃつたんじゃろう。

明治１４年かる往還工事が　ちっとずつ始められち本格的にゃ　１７年かる１９年に難工事が　各所じ進められちょつた。幅を広めたり岩を崩したり　橋も架けにゃならんふんと　大事ん工事じゃつたが殆どが出来上がっち　１８年の末にゃ竹田じ開通式があった。竹田⇨大分４４キロん熊本県道、熊本街道、いろいろん呼び方を迪っち　昭和６０年に国道４４２号線に。

はじめん頃は客馬車が行き来する　一日がかりん旅じゃった馬車は　荷物ドッサリ積むとハイ　ハイとまぁ勇ましいこと。野津原に本拠地ん馬車は最盛期にゃ　約３０台ぐりゃあったんじゃなかろうか。竹田かるん荷を野津原まじ帰っち　次ん朝に西大分港に向かう。粋な馬車引きんしが鳥打帽じ　乗りこむと遊び所んおしろい女ごしが　晩方ならいいになぇち　言いてぇ声もどうかすりゃ聞こえそうな。

温見、石合、矢の原、野津原、木の上、大道峠が休憩場所じ帰り道じ眠っちょつてん　馬がそこにゃちゃんと止まる。まぁ訓練せんでんゆうしたもん。親父より馬がなえふんと。

こぼればなし

そしち明治４０年にいよいよ　諏訪村と野津原村が合併になった。執念ぬ燃やした当時ん　三浦村長はそん後も３回も村長を務めち　おそらく歩いち役場に通うたじゃろう。大正２年に『法泉寺橋』を完成させたんも　『あげな貧乏村』ち言われとぅねぇ　威信もあったに相違ねぇ。そん頃ん銭じ２万円　金策かる工事ん進展なんかも　気くばり石工たちにも神経を使うたごたる。

見事な美しい橋にゃ見物するしも　多かったち言うき当時にゃ　目を見張るもんがあったじゃろう。白い組石ゃ大分港かんたんかる　運んだち言うき船じ運んだんじゃろう。馬車ん野津原ち言うくれー　野津原ん馬車が何台も連れのうち。大道峠、芹、木の上　やらもう珍しい物見たさじ　子守するしやら　年寄りん暇なしもタバコくわえち　ふんとなえ砂利道んガラガラ響くと　ほこりも舞い上がったに。。

そん頃ぁ『かんたん』ち言ゃ　遊郭んあった所でんあったき　港ん潮風と遊郭んオシロイん匂いも　混じっち田舎に入っち来たんじゃろう。人間の心ん中まじ和ませちくるる。馬車引く馬方ん馬子歌にゃ　あん五助さんがん声も　聞こゆるごたる。『今日もはりこみよるなぁ』『ひどかろう』『いんにゃ銭とりじゃきな』　顔なじみたちん交わす挨拶にゃ　もぅ人ん巡り合わせんごつ　美しい花も咲いたごたる。

２万円たぁ当時としちゃ大事じゃつた　けんど人の情熱はそれもやり遂げさするもん。上から見るだけじゃのうじ　下から見上げた景観は目を魅きつくる。ゆうまぁちタマガルしたちは　『美的感覚の先見の目があった』と　目頭を潤ませちょつた。そしち近時バイパス開通じ　忘れかけちょる。

広い往還街道にゃ人通りも賑やか

山坂越えち矢の原につくと　こんだ下り坂にほっと一息つくもん。橋ん側まじ来た所ぃ飴屋がある。糸じ上手に切ると板ん上じ器用に転がしち　真ん丸い飴が出来る。帰り道じっと見ちょると『一人か』　あっちこっち見回しち粉んちーた手じ　飴玉ぅ一つくれた。無造作に動く飴玉がまるで　手品んごつ人ん心かる心に伝わる。

ちっと下った場所に真新しい木の橋　往還が通って馬車が大手を振っち行き来するき　橋ん役割も大きゅうなった。熔岩がまるで屏風んごつ連なる　七瀬川ん支流は岩戸んごつもみゆる　表ん本流に比べち裏谷はコンメーき　小岩戸ち言う。そりー架かる橋にゃ　下り坂じゃきゆう川に飛びくうだ。じゃき護り仏を奉り無事通行を念じた。

★　母は達者が小岩戸橋を　越ゆりゃ背の子も荷も軽い
ハ　七瀬のせせらぎ　子鮎がスイスイ　ホイ　ホイ　ホイ。

真冬ん寒い頃ん若嫁ごしにゃ　洗たくが一番苦になる仕事じゃがここん洗い場は　冬は生温いき手がココエンジ楽な洗たくが出来ち『洗たく学校』ち　言いよった。こぼくれになった洗たく石けんぬ　大事コウジに使う若い嫁たちも　水が温いんにゃもう助かる。こげじゃき　ヒヨイトスリャゆうべ楽しゅうだ続きが思い出されたんか　一人笑いするぬ見ち年寄りが　『仲いいなぁ』ちつけ笑いする。

『すすいじゃろうな』　気を効かせち差し出す手　若さん象徴ん指先もやっぱ　荒れちょるぬみると　自分どうん嫁に来たころう思いでーた。『辛抱しなぁえ』　つい口にでる心からん慰め言葉。じゃき世の中うまく　流ররんじゃろぅ。

草が長ぅじ姿が見えん

青年団の若いしたちが　朝間仕事に牛馬ん草きりがある。辻に集まると寝坊したのも　目を赤ぅ腫らしち断り下手に『牛んやつが』ち言い訳する。連れのぅち鶴山に行くと　それぞれに別れち草きりが始まる。研鎌んサクサクする音は　朝露まじも飛ばしち時の間に上荷まじ出来た。

なんさま草が大きいもんじゃき　どこにおるんか解らんごつなった。『もう出来たか　いぬるシコしゅうや』　リーダーん声に帰り支度がはじまるが　妙に気になる二人ん姿……

★　草が大きゅうて姿が見えぬ　積み荷出来たかあん二人
ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ
ホイ　ホイ　ホイ。

まぁ何があったか知らんが　上荷まじ積んじ出たぬ見りゃ草きりしたな間違いねぇ。こげーしち夢が湧いたり　縁が結ぶ事さえある夏ん風物詩。帰ると年寄りは孫ん世話　親は食うごつすりゃ今日ん仕事ん段取り　若いしたちぁそれん脇役としち一日が始まる。

農協があった原村にゃ戦中ん早ぅかる　防犯塔がつけられちょつた。組合の放送も効果があっち　電話んとりつぎ　バスがくる連絡放送。１１時に時を知らせるアイデア。てきぱきした動きと農家と連携した　経営は模範でんあった。大分合同新聞が疎開したのん戦運が　険しゅなった頃じゃつた。

大分市が危険極まりないじ　全てが疎開移動しち印刷まじここじすると大分まで自転車じ移送。一日たりとも休むこたぁ許されん　非常事態でんあった。地元ん人たちも協力した話題は　今も語り継がれちょる。

★★★　方言説明　★★★

１２Ｐ⇨もんじゃつた…ものでした。いのちき…生活。すりゃ…すれば。じゃが…ですが。鳥打帽…ハンチング。そうな…のようです。ちっとずつ…少しずつ。ふんと…ほんと。ぐりゃ…ぐらいは。いいになえち…よいのに。

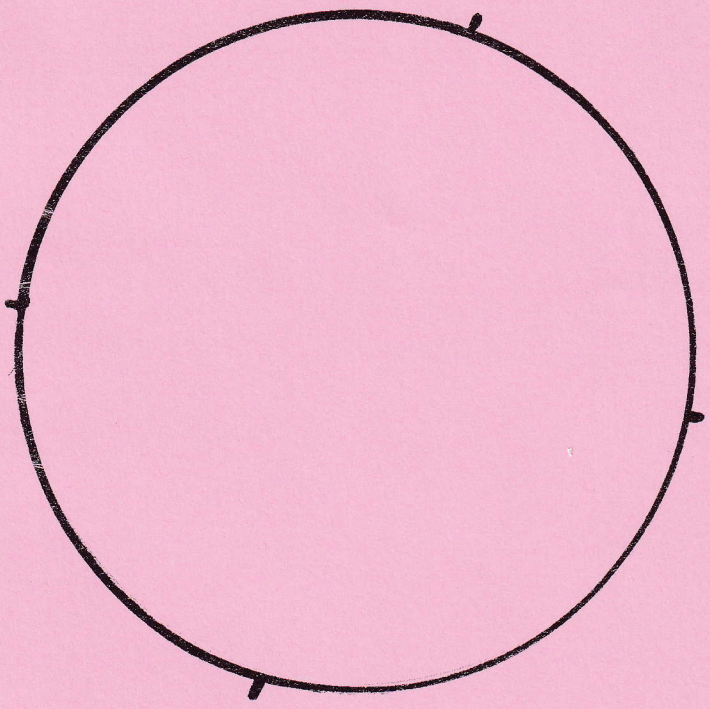
１３Ｐ⇨あげな…あんな。組石ゃ…石の組合せは。やらもう…なしどは。しやら…する人など。ふんと…ほんと。はりこみ…精出す。ひどかろう…大変でしょう。タマガル…びっくりする。

１４Ｐ⇨糸じ切る…柔い飴を絹糸で切る。コンメーき…小さいから。荷も軽い…みやげ荷物も軽く感じる。コゴエンジ…かじかまないで。こぼくれに…小さくなって。大事こうじ…本当に大切に。流るる…皆んなの支えで自然に。

農協が古くかるあったき　農村じゃ中核地帯でんあったきか　地域に防犯塔が設置されたり　農協ん放送塔が非常時じ　連絡役目も果たしよった。原村ん地域性がそげな交流　出会いの場にもなっちょつたごたる。新聞社が疎開したのん　こげん理想的な場はなかなか無かったごたる。じゃき地元んしたちも　真剣協力したき平和ん時代になっち　関係者は招待され本社見学かる　心くばりん歓待も受けたんじゃつた。

参勤交代道にも細道じつながり　縦横ん道が発展の要素にも　地域民の連帯感にも育つた。公民館活動青年団　婦人会活動も　発進基地としち。連載小説『青黒い夜のひとびと』にゃ　聖観寺ん和尚もモデルに　登場しての活躍に桃源郷んごたる　場面展開を読んじお興入れした　娘もあったのもロマンがあるなぁ。雨乞い祈願の紫煙が立ちのぼる　白山権現の念願が通ずると　西ん鶴山に雲がたっち間もねぇ　小粒大粒ん雨が降りでーえた。人ん心が信なら神も仏も手を　貸してもくるるんが現世のご利益か。

五行相



玉手箱　　『竜の恩返し』

水の少ねぇ暑い夏えーと湛った　水に安心しち夜半に引き上ぐると　次ん日にゃモゥ水がスッカラカン。不思議に思うちある晩寝ずん番ぬしたら　ナント子ども連れん大竜が　水飲み来ちょるじゃねぇな。ケタマガッチム村ん長老に　話すと『チョイト待つちみよ子持ちなら無理もねぇ』ち　助くる方法わち論されたき自分の子育てん頃に思いも馳せた。

手作りん酒を持っち行き　『稲を荒らさんごつ』ち畦に置くと帰った。そん年ぁ秋ん水不足でん　予想よりゃユウ出来た。次ん年ぁ干ばつじ長老に相談しち　『雨乞いするとスグ雲が湧き大粒ん雨』　そん時老人の耳に聞こえた声『あん時に助けちもろぅたお礼』ち　なんと優しい竜ん恩返し　じゃったんじゃろう。

それかるは水不足にゃ雨を降らせ　実りぅ豊かにしちくれ　出来もいいき経済もゆうなり　健康じ暮らき長生きも出来る。ごつなったき皆ンナズリ畦ん側に　祠を造っち竜神ぬ祭った。じゃきいか豊作、金運、延命と今もご加護されちょる。そげな古い関わりかる　苦労する時助けちモロウタ　恩返しゅしたち言う真心は　長ぅ続いたき『細くてん長く続く言葉にナドラエち　お供えにゃ『うどん』をするしきたり。

★　スッカラカン…少しもない様。ケタマガッチ…吃驚してしまい。皆んなずり…沢山の人たちが。ナドラエ…思い出になるように。ユウ…よく。

それが例えカクウん話しじあってん　人ん心ん中に仄かに夢ぅ持たせる　民話は素朴な人間の情愛が　あったからん事。そこに人間も生かされているが　一人では生きられん事の　如実に語る心理ん物語てせんあるのでは。だから人は生きられ　生かされてもおるのでは。

お伊勢ん松が知らせるもの

樫木山に約５００年の樹齢を　保つた古木の松があった。そん根元にゃ石ん祠があっち『お伊勢様』ち　呼びよったき伊勢に参れんしの為　分霊を勧請しちあったのじゃろう。そん頃にゃ野津原３名松ち言い　三国境と辻原にもあったよう。根を張り葉を繁らせた姿は　まさに天下逸品じゃつたじゃろう。

葉の下どま格好ん子どもん遊び場所じ　時にゃ学校に行かんじここじ遊び　弁当食うち晩方知らぬふりしち　帰りよったぬ叱られたんもおったとか。大人が５人じ手をつないじ　ええと抱えもうしたち言うぐれ大きかった。江戸時代んもんとも言うが　因縁話によると何か大事が　起こるまえにゃ枝が垂れさがっち　地につくと事変が起こりよった。じゃき根上りん松とも言う。

日清戦争、日露戦争、関東大震災、支那事変、大東亜戦争、そんたんび葉先が垂れ下がり　土に届いたきち思うと　起こったち言う。日ごろ見るのにゃ美人が　シナヤカに振る舞う姿か　艶かしいような格好にも見えたちも言う。そげんな繰り返しん中でんみんなが　大事にしたけんか長生きしよった。

そしちいよいよ戦争が激しゅなり　挙句にゃ松油を取るこちぃなった。盆の松明にゃ毎年いい具合に　使う思う会う気持ちが長生きさせたんじゃが　松油を取るこちなりゃもう　そこらそんげん優しい　気くばりゃ出来んごつなった。野焼きん火の不始末もあったが　あんまりにも勝手すぎた　人間の欲望がとうとう枯れの道に　誘う事になっちしもぅた。

同僚哀れむ合いとか言うが　同じ頃にほかん名木も枯れち運命共同体。もてはやされた名木も　こんような辿り道で閉幕となったそうな。

テマリ唄に肥後ん心

あんたかた　どこサ肥後サ　肥後どこサ熊本サ　熊本どこサ　せんばサ　せんば山には　狸がおってサ　それを猟師がアミチャで撃つてサ　煮てサ　焼いてサ　食うてサ　旨さのサ。童たちの唄いながら　つく手まりは　古くは空中に投げあげち　遊ぶもんかる始まったごたる。

真綿やら砂をつめたもん　音んするもんぬつめる　ゼンマイん綿毛を入るる　糸屑をつなぎこんだもん　時ん流れん中じ　娘たちん知能が生かされち　思いでん手作り毬に　発展したらしい。そこにゃまさに生活ん　知恵と生き方ん表情が　見え隠れしてんおる。

ゴム毬が出た事じそん利用価値は　急速に発展進歩しち　実用品になっち行く。江戸期間にゃ肥後文化と　周辺地域ん文化も入れ交じり　遊びん世界にも想像もつかん　遊び方と手まり唄が　いくつも出来ち子どもん　心に特に娘時代ん夢が　咲き開いち行くごたる。

肥後領地じゃつたこともあっち　唄ん歌詞にゃ肥後が出るが　憧れる思いが先進地とした　情愛と交差しち娘たちん成長過程にも大けな役割ぅ　果たしたようにも感じらるる。地名が熊本じゃき何か　都会かる覚えち来た優越感は　大人でん迷いそうな錯覚に誘われち。

三つ組した娘が髪の毛を揺らし　着物ん裾をちっと引き上げち　袂に隠す手まりん鮮やかさ。はんてんの裾に上手に入れ　ぐるっと回っちポット落とす。テズマんごたる仕種に一瞬目を疑う所作なんか　大人顔負けん業師んごたる。手毬がくるくる回っち　手と足が交互に毬は１３飛び回る。

肥後ん飛び地じゃつた野津原　領主もプライドがあったき　力ん入れ方もヤッパ違うたじゃろう。同じ遊びでん見た目にも上品に写る。娘ん裾かる白い足が遠慮のう　動き手鞠と交差しながら　まとわりつき　離れたち思うとポトっと落とす。

一番はじめは一の宮　二はまた日光東照宮　三また佐倉宗五郎　四は信濃の善光寺　五つ出雲の大社　六つ村村の天神様　七つ泣くやら弘法様　八つ八幡の八幡宮　九つ子どもの大社　十でとうとう成願し　あれほど心願かけたのに　波子の病はよくならず　ごーごーごーごー行く汽車は　波子と武雄の泣き別れ……。

懸命につく手鞠が　狂いものうじ動くもんじゃき　交替が出来ん。けんどそこはまた　ゆうしたもんじ途中じ　唄も理由不明じ終わりになっちょる。戦争に行く思う合う人と　出発の朝に見送れない　そんな実話もあったじゃろうが　時勢はそんな女々しい話　禁句でもあったき　例え話しに託した物語かん知れん。

いちれつらんぱん破裂しち　日露戦争はじまった。さっさと逃げるは敵の兵　死んで尽くすは日本の兵。五万の兵を引き連れて　六人残しち皆殺し　7月8日の戦いに　ハルピンまでも攻め落とし……こげか唄も手鞠唄に使う
戦争が身近ぅあったが　無心に遊び手鞠をつく　子どもたちん頃は優しゅうじ　目はキラキラ輝きよった。

十一一合のお豆いり　十に新田の義貞は
十三寒いは北海道　十四四国の金比羅さん
十五御殿の八重桜　十六ロシヤの大戦争。

故郷の手鞠唄

おしろのさん　おんさま在所が　イッチョゴデ　お籠で
イッチョサノサ　さしたかどん　しのぶかどん　ドンドン
鳴るのは　ドロガミさーまか　イッチョゴで　お籠でさし
たかどん。

しろきやの　おこまさん　さいださん　たばこの煙りで
１８歳。

この唄は　テマリ唄として古くから　主に肥後領地区域じ
唄われちょつたごたるが　たまたま　民謡発掘ぅしよった
　加藤正人さんの　調査した杵築市でん　あい通ずる唄
『テマリ唄』があったぬ　野津原でん調査ん時　お聞きし
たもん。杵築市じゃ　次んこつ唄いよったらしい。。

お城のさん　王様蛙が　イッチョゴで　おかごで　イッチ
ョサノサ　さしたかドン　しのぶかドン　ドンドと鳴るの
は　雷さまだ　城木屋の　お駒さん　たばこの煙りは　ヒ
ィフゥミーヨーイツムナナ　ヤーココントー。

　テマリ唄は室町時代かる　子どもん遊びにゃ欠かせんも
んじゃつたき　唄い継がれたんじゃろう。明治になっち
ゴムマリが入っちかるわ　外ん遊びにん　使われでーち
減ったけんど女ん子にゃ　離されん遊び道具じゃつた。唄
ん文句も伝え流れち　変わっちくるが　人ん心ん中にゃ
チョコント根づいちょるごたる。半纏ひらひらさせち　ゴ
ム毬ぅつく……思うたたげでんエエラシイ事。又どげな唄
にでん併せち　マリツキが
出来るき不思議でんある。
懐かしい遊びん物語かん。

方言説明

１７Ｐ⇨こつぅ…ことを。あるのん…あるのも。かるん…かるの。道草食う仕種…帰り道の狭い場所に　ある草には長い舌をペロリ出して　引き寄せて巧みに口に運び込む。

１８Ｐ⇨じゃろう…でしょう。抱えもうさん…抱いても届かぬくらいに。じゃき…ですから。松明タイマツ…松の根でも油分の多いものをコエマツと呼ぶ。盆の墓地で焚く事で長く消えずに　燃える先人の知恵の燃料。こんような…このような。

１９Ｐ⇨テズマ…手品。

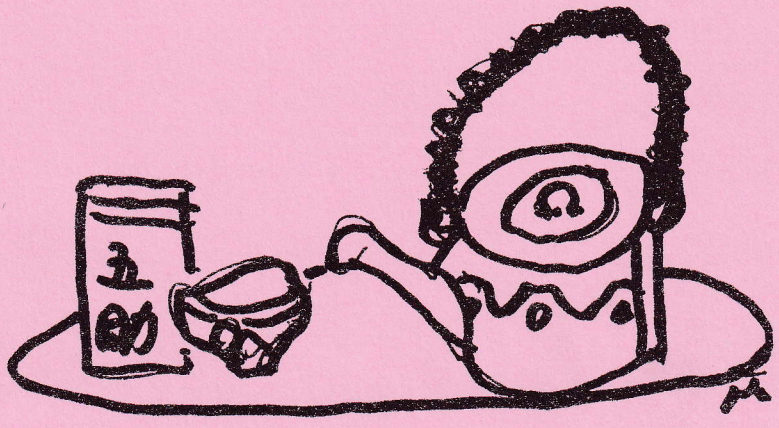
２０Ｐ⇨ヤッパ…やはり。いちれつらんぱん…順序よく並べた予定の資料に従って開く会議、話合い。

２１Ｐ⇨じゃろう…でしょう。チョコント…澄まし顔ですわっている有様。どげな…どんな。

忘れ去られそうな古い話題　初めて聞く古い物語　噂には聞いたが　詳しい事はしらなかった。など勿体ないような故郷の歴史が蘇り人の耳に仄かに　伝わるのも巡り会わせた宿命でこのまま　知られない忘れられたまま　永久に消え去る事の無念を　そっと開きました。調査している間に見たり、聞いたり教えられたりした　故郷の玉手箱の中の歴史です。

６０００年以上も昔から　人が営みを続けていたが　年月の流れの中で消えてしまった　そんな貴重な者も物も永久に記録に留める　責任も現世の人たちにはあるのです。方言にしても長い間　生活用語として使った言葉。今は使わなくても保存記録する　そこに価値観も生かされ　再度の出番だってあり得る大切な宝物と自負しています。

民話伝承



民話、伝承、故郷物語

1　瀬戸越えの難所

瀬戸越えするにゃ陽のあるうちに　そげぇ言いよったぐれの難所。夜ん瀬戸越えは命がけん　難渋ん場所でんあった。馬が道を踏みはずすと谷に落ち　上りつむると又下りち言う。古くかる諏訪と表に出る連絡道。ここを越えたら砂浦　柿の木　塩出野そしち土穴か　岩下に出らるる。

又土穴にゃ雨川かるん道と　一緒に長野に行かるるし　岩下かるわ河内　大野やら下詰　上詰さね上る表街道にもなる。

山ん寺がこん瀬戸に向いちょつたき　事故が多かったき祈願したら　『向きを変えるごつすれば』　ちことになっち変えたらそれかるは　大けな事故ものうなったとか。幾百年も過げちそん後は土取りん　高台も低ぅなったもんじゃき　表に出るにゃこっちを通るんが　多ぅなったのん便利じゃつたごたる。

諏訪かる土取り　雨川　土穴　長野ん道が磨けたごたる。裏谷に架けた橋ん本桁が座る　穴が一枚岩んごたる川底に　行儀ゆう残っちょるんが　当時ん歴史を語るごたる。こん穴に新しい桁を建てち真新しい橋が　そん橋をオズガリながら　手鞠を大事に抱えち渡る姿が川面に　波紋に映しだされよった。

瀬戸ん地蔵様がもっと詳しゅう　話しちくれたらなぁち　欲ばってん仕方ねえけんど　忘れ去られそうな当時ん　歴史が刻まれたあれこれが　仄かに浮き彫りされち　当時の人たちん心の優しさが　手に取るごつ解っち　嬉しゅなっち前のめりしとぅなる。そん谷川んあちこちに　今日もクルクル水車が周り物つく音と人間模様が　綾なしてもおった。

水車を利用して粉をひく日　こん秋にゃアルク娘が　喜びと不安な思いじ仕上がりを　待つ間のやるせなさ。天井に張った蜘蛛んエバが機械ん　振動じ揺れ動きよる。『今日は物つきかえ』　顔見知りん近所んオイサン。『ウン』　無造作に返事しち下ろす荷物ん手伝いをする。

『どげーか　嬉しいのぅ』『おおきに　長い事　お世話になりました』『いんにゃ　俺こすせわになったのぅ　あん怪我した時どまのゃ』　そこまじ言うと大声じ笑ぅた。場つなぎに気を利かせた感謝ん　言葉じゃろうがそれが　とてん嬉しい。心から喜んじくるる優しい　気くばりに目頭が熱ぅなった。

『おばんな元気がいい　近ごろ見らんけんど』『元気がよすげちもう　ねんじゅ怒られてんじょうじ』『なにか悪い事でんしたんじゃろう』『こいつ　おろいい事ぅゆうのぅ』　二人は大声じ笑うもんじゃき　蜘蛛がイサギュ奥に逃げくうだ。揺れるエバにコンメー虫が　かかったにタマガッタンカ。

★　辻の地蔵に何がんかけた　あん娘秋にはアルクのに
ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラ
サラサラ　ホイ　ホイ　ホイ。

雨川の拝殿に秋ん神楽ん奉納がある。近所ん人たちがガイト参っち　広い神社ん周りは　夜おそうまじ賑わいよった。田舎ん祭りにゃ呼ばんでん来るき　『呼ばんじ来るんが祭り客』ち悪口ん　代名詞じゃつた。それでん在所ん親になると　チット違うちくる。孫ん手を引いち高ぇな　解っよってん玩具ん一つも　財布が口ぅあけよる。

瀬戸ん通りが少のぅなってん　土取りかる雨川に抜くると一枚石ん川底が幅広ぅなっち　流れも穏やかになっちょる。・

人の情けはツツロク人生

冷たい手先に風が吹くと　体ん芯まじ冷えこんじくる。冬ん麦ん世話役は昼まじゃ　凍っちょをるき薪取りに山に入る。それほうが仕事ん能率もあがる。昼からは土も解けち鍬にゃ　済まんが仕事は出来る。田の中じハリコミよると　縁先かる何かオラビヨル。

腰ぅのしち顔ぅ向くると手招きしよる。鍬を田のグロに置いち溝を　うまい具合に歩いちツボ先に出た。『甘酒が出来たき飲みよ』『ちゃー済みません』　土ぼこりをウッパラウと　縁先ぇ腰ぅかけた。足先まじ冷えた今朝ん寒さは　当分続きそうな雲行き。

『どうなチッタ慣れたな　あんまり無理しなんな』『おおきに』『早ぅ飲みよ　あんばいはゆうねえが』『いいえなこと　いつも済みません』　心から嬉しい気持ちを言葉に出来ぬ　歯痒さがイライラする。こんな状況を母が見たら　どんくれ喜ぶか。達者じゃろうかもう　長ぅ行っちょらんが。

『在所んかあさん元気かえ』『おかげじ元気がいいごたるんで』　知らない事じゃが　そう言うのが一番都合よいち聞いちょるき素直にこう返事した若い嫁。『みんなそげぇ言うんで　けんど時にゃ行きたかろうに』『世話役が済んだら行きよち　言われちょるき』『そりゃー喜ぶで』。

すすった甘酒が全身をじわっと　流れち行くごたる。『いつも美味しい甘酒を　よばれち済みません』『いいんでウチドウも　あんたどうような頃は　みんなかるゆうヨバレタもんで』『ほんとぅ』『順おくりじゃき　遠慮せんでんいいで　そんかわり又アンタドウが　次にゃお接待しちアゲニャなぁ』『はい』

『あんたかたん義母さんな　口がちった悪いが本当は優しい人じゃきな』『……』『無理を言うごたるが　こりゃなあんたどうに　早ぅなんでん覚えちほしい　そげな気持ちじゃき　腹ぅ立てなんなぇ　じゃねぇと損するきな』『ウットウもそげー思います』　素直に話すこん嫁も心じゃ　解っちょるごたるき　安心した。

全く知らない家に嫁に入る　それは度胸のいる賭けでんある。が宿命がそうさせている社会。そこに人に習う機会を与えられた人間の試練の場。それをクリヤーする事で　人並みの勉強も出来　家庭では出来ない独特の人間性も　獲得でくるからでんある。

一人息子が食うくらいは　一年中蔵はあるもん。それを生かすか使うかは　人それぞれの考え方でんある。薬草ん知識を身につけちょきゃ　咄嗟ん時に未然に害を防ぐ事も出来る。知っちょつち悪いこたー一つもねぇ　それを旨く生かすかセンカんだけんこと。

『鍬ん土はゆう落としよえ』『こん前聞いたき実行しよったら　改良議員の人から　今時珍しいち　褒められました』『そりゃよかったなぁ　嬉しかったじゃろう』『はい』『私もそげー聞くと嬉しいわな』『ちゃーおおきに』　一杯の甘酒に人の情けがここでん　行き来しち和む心の花開く。・

誰か来たごたる足音　みると嫁ごん家んババサン。『ありゃ茶をよばれよったんな』『無理やり寄りよち言うちな』言い訳しちくれち『まぁ甘酒沸いちょるで　こっちかけよ』『おおきに　いんにゃ在所んお父さんが来たき』『あら済みません　何か用事でん』『近所に来たきチョイト寄ったんと　帰りゃいいわ』　嬉しそうな声が周囲まで広がった。

『ほんなやりかけん分まじ　済ませちち帰ります』『もう無理せんでんいいで　明日ち言う手をかけん日があるき』『そうしょ　いつも一生懸命するんじゃき』『じゃきこすやっぱせんと　悪いき』　ふんとまぁなしこげまじ　頑張る気持ちになるんか。いやさせるんか……おそらく周囲がみんなじささえちくれ　素直に言う事を聞く　そこに気持ちよい意欲が湧くからじゃろう。

残りしごとをバタバタ片ずける。鍬の土を落としち丁寧にお礼を言うと　小走りに家に引き上げた。のこったババさんも　『けっくやゆうスルンデ　勿体ねえごたるわな』『そりゃーヤウチが　みんな良いからで』『じゃろうか』『じゃがえー片手が悪いんなら　打ってんいい音はせん』

かしわ手も両方が具合よく　揃ってこすいい音がでる。言い方が悪くてん受取方がよけりゃ　結果もいいもんになる。喧嘩しても相手が歯向かわないなら　喧嘩にはならないし。またそれがいかに　つまらない結果が解ってくる。心が穏やかなら腹を立てても　馬鹿らしくつまらない物になる。心が和めば自然と周囲にも　感化して行くもの。

『ババさんも元気じゃなぁ』『おかげじなぁ　そりー孫がこんだ　あっ言うんじゃなかった』『りゃーそりゃー悪いで　ウットウカテ言わんなトゲなるで』『こりゃゴメンナンシイ』　ふたりは顔見合わせち　大声じ笑ぅた。若嫁も今頃ぁ久しぶりん　父親に再会しちとせんくれ　嬉しいことが。

皆んなが幸せなら自分どうも　幸せん和に入らるる。そしち幸せを別けちももらい出す。ウットウんコンメェ心でん　積み重ねちゆきゃ　皆んなの為にもなるんじゃろう。そりゃまぁコンメー事じゃけんど。

★★★　方言説明　★★★

２５Ｐ⇨ハリコム…精出す。オラビヨル…大声で叫んでいる。ウッパラウ…叩き落とす、追い散らす。世話やく…麦の手入れなどの農作業。ウチドウ…私たち。アンタドウ…あなたたち。アゲニャ…施しを。

２６Ｐ⇨センカ…しなさい。ちゃー…あらまぁ、びっくり。い。んにゃ…いや。

２７Ｐ⇨手をかけん日…使っていない日、時間。やっぱ…やはり。こげまじ…こんなにまでも。ヤウチガ…家族が。どげー…後味が悪い。ゴメンナンセイ…許してくださいな。

人の情けたぁ嬉しいもん。じゃが突然生まれ育つ　もんでんねぇ。日頃往生ち言うが　常に人に対しち優しい気持ち　思いやりがありゃこす　受けらるるもん。自分が困らんきち人ん難儀ゅ見てん知らんふりしちょりゃ　いつかそりゃ自分にも回っちくるかん知れんが　そん時なっち誰か助けち　くるりゃち待っちょつてん　そげは問屋がおろさんもん。

施しゃお返しゅ受くるんぬ　待つもんじゃねぇ。知らんなかめ世話になりよるが　気がつかんきち思うてん　人ん世話じこす生かされてんおるもん。じゃき自分が出来る時にゃ　骨身ぅ惜しまんじしちこすそれが　生きてんおるき何かん時　『あん人んごたるど』ち　どつかるでん手を差し出しちくるる。

そしちそりゃ見返りぅ受くる　そげな安物んじあっちゃならん　愛情ん表現でんある。誰かがどこかじ見守っちくるる世の中。じゃき誰にでん同じ目線じ　支えてあぐる気持ちが　自分も見守られ支えらるる宝物ぅ　もらい出すこちなるごたる。

人生の夢とロマン

お盆とはインド語で『ウランバナ』　逆さまにぶら下がると言う意味から　盂蘭盆ち言う。刑罰ん中じ一番ヒジイのは　逆さ吊りん極刑ち人間の　一番苦しい姿勢。これがお盆である。

自分の積んだ罰によっち　逆さ吊りされた先祖を供養し　慰め救う事で善根を積む　それが盆の行事でんある。日本の盆行事についちゃ　推古天皇ん１４年《６０６》頃かる．先祖に対する孝養行事としち　伝承されちも来た。先祖の供養は毎日するとか　時時節目にきちんとするとか　で答えが出るもんでんねぇ。孝養は多すぐるこたーねぇ　特に盆にゃ地獄ん蓋も開くもんじ　こん時期ん孝養は大切じゃろう。供養は先祖ん又先祖　そん奥ん先祖まじの供養でんある。先祖が成仏しち幸せじなからにゃ　子孫の幸せも又望めんし　自分も勿論でんある。

ヤセウマ⇨１６日ん送り火に送られち　先祖は霊界に帰るがそん折に　供えちあった心や物を　縛って下げるのに使うんが　ヤセウマじある。きな粉をつけち日を持たするごつ　丈夫に作ったヤセウマじ　しゃんと束ねた果物やダンゴ。そりゅ一つ、一つ食いながら帰るとか　盆に欠かせられん供物にゃ　それなりん意味が心が込められち　長い間そりゅう守っちきた　盆の素朴な風習かん知れん。

たった一度きりん人生に　自分じ出来るこつぅしち仏を迎え送る　盆の行事はやんがち自分が　子孫かるしちもらう事ぃなる。心を込めち供えるこたー何にも　勝る宝じゃろう。そりゅ見ち安心する先祖は又　あん世に引きあぐる。安心さする人間の務めそりゃ　やんがち自分が安堵する　現世の積み立てでんあろう。

力をもらった男

そん頃ん相撲取りじゃつた　宗方弾三は宇曾山の参道に仏像を　運ぶことによっち力を授かった。１丁ごとにあつた仏像は一体が　１０貫ぐれーじ一晩のうち　せっせと運びあぐることが出来た。はじめはちった心配もしたが　する以上は楽しゅち　おもしろ半分にセガワリヨッタ　人たちん顔ぅ横目にスタコラスタコラ。

本人な大真面目に運びでーたき　慌てち『もし力を授からにゃ　どげーしゅうか』ち　心配したんじゃが　運び終わった弾三は本殿前に　正座すると『これから大阪に行き相撲取りになります　力を与えちください』と　悲願するとそんまま　上坂した。

それかる数年過ぎた頃に　そん名声が伝わり　宗方弾三が出世したと言い出しち　当時そそのかし　囃し立てた人たちも　胸なでおろしち神力を　改めち知らされたち言う。そん地蔵像も戦後に廃棄問題があっち　そん犠牲になったり　無事に救いあげた仏像も　傷つけられたりした物も痛ましく見られた。現在数少ない仏像が数箇所　静かに人の無病息災と　道中安全を祈って念じているよう。

こんほかにも寄進による　丁目ごとん里程表石柱もあったが　これも数少なく見られるんは　オシナギー歴史ん語りべかん知れない。人の真心は通じたではあろうが　片やこのような理不尽な処理が　おなじ人間の手でされる。心の鬼と神が一体となる神域に　風の古松を靡かせる音だけが　今日も何もなかったように　鳴っちょる。

時代の流れに惑わさるるんも　悲しい時代の変貌なのかも知れないが。

秋葉山の力持ち

秋葉山の側に力持ちがおっち　近所んしたちに勧めにれち俵運びぅ　するこちなった。それも米俵１俵をかたげち　早さ競うんじゃが　そりゅ見よった力持ちに　勧められた力持ちも　やおら立ち上がると　まずハマ下駄履き　１俵ずつ前と後ろにサシじ担ぎ　秋葉山に向かぅち歩きはじめた。

タマガッタ近所んしたちぁ　見つめちょつたら　サッサと石段ぬ上りばじめた。アリャマァち見ちょるうち　山ん上まじ上りつくと大けな手をあげち　グレット裏を回るとこんだ下りはじめた。見惚れち声もでらんごたる　人たちん前まじ帰りつくと　又上りはじめた。

『ちゃありゃ　まぁ　又上りよるで』　声もでんごつ見つめちょるうち　上りつめたき『こんだ一服するんじゃねぇ』
皆んなもそげー思うよったら　なんとなんと　又グルリと裏に回り　こんだもサッサと下りでーた。呆気に取られた時目の前に　もうオレチキタ力持ちが　『こきー卸してんいいかえ』ち　ことわるとドッコイショち　俵２俵をそこに置いたき　もう皆んな『まいったまいった』

はま下駄履いち米２俵　なんとなんと力持ちでん　桁違いん力持ちに頭上がらんごたる。体格がゆうでん力んねぇしもある。体格じ人間な計り知れんが　同じ力持ちでんこげな力持ちは珍しいもんでんある。見物した人たちも思わぬ　目正月が出来たち喜びこん上ねぇ。

力を旨く生かした暮らしをすれば　有意義な人生にもなる事じゃろうが　食べ物も大変じゃろうし　日ごろん健康管理も大事じゃろうちも思うたが。元気でいて欲しいな。

★★★　方言説明　★★★

２９Ｐ⇨きちんと…もとのように　正しくする。もんでんねぇ…ものでもない。なからにゃ…ないようなら。ヤセウマ…小麦粉を適当な柔らしくこねて　少し寝かせて延ばしたものに　きな粉をまぶした食べ物。しゃんと…しっかりと。こつぅしちもらう…事をしていただく。

３０Ｐ⇨１０貫…約３７，５キロ。セガワレヨッタ…苛めたりおだてられたりしていた。スタコラスタコラ…軽快に動いて。どげしゅうか…どうしたものか。囃したてた…皆んなでおだて挙げて。オシナギー惜しい事で。

３１Ｐ⇨かたげち…担いで。ハマ下駄…はまのついた下駄、少し高さのある雨降りなどに使う。サシ…平均に。アリャマァ…びっくりしたような。グレット…くるり回って。でらんごたる…出られないよう。ちゃありゃ…予想せぬ場面に。よりよるで…よって行きますよ。でんごつ…出ないように。１服するんじゃ…休憩するのでは。こんだよ…今度も、今回も。オレチキタ…下りて来た。目正月…目を楽しませてくれるような。

言い伝えられた話しや　伝説としち残された故郷の　夢とロマンの話を掲載しました。実話もあれば創作もあるでしょうが　そのような話題として残るのも　心のなかで大事にしている　人間の優しい思い出があるから。そっと受け継いで行く時　教えられたり覚えたりする　生き方やお付き合いの基本も妙味も体得出来ます。そんな故郷に恵まれている幸せは　欲しくても物や金では買えない　宝物かも知れません。先人もきっとそう思って継承したのでしょう。

33の前

読み語り　小学上級生徒用資料　　野津原方言調査会構成

『七夕まつり』

旧暦７月７日は『七夕まつり』の日。奈良時代に中国から入って来た　『キコウデン』と言う星祭りが　始まりの行事です。

牽牛と言う牛を使ってよく　働く青年が仕事をしていると　近くから機を織るとても楽しそうな　音が聞こえてきました。ふと聞きとれていると　その織る娘《ショクジョ》も　気がついて久しぶりにみるような　青年に魅かれてしまいました。しばらく話している内に　いつしか仲良しになって　時々あうようになりそれは　楽しい似合いのカップルでした。

しかし会うことの楽しさに　つい気持ちが変わってしまい　それまでの働くと言う　自分たちの仕事が留守になって　しまいました。それを見てとても心配した　神様は『これは大変だ　このままでは　二人ともに不幸になってしまう』と　二人を呼んで話し論しました。

『このままでは　二人とも今まで　一生懸命に働いていたのに　駄目な人間になってしまう』と　厳しく話して聞かせました。もともと利口であった　二人ですから　話を聞いているうちに自分たちの気ままな　行いは　いけなかったと　気がつくと　その教えに従うことになりました。

しばらくは　七夕の日に『天の川で出会う事を許す』　ことを承知してからは　楽しい生活に戻ったと　言はれます。楽しい事は飽かなく　嬉しいばかりです。が苦労する事も　人間には絶対あってこそ　喜びも嬉しさも解るものです。それからの二人はとても幸せ多い　日々をすごしたと　言います。

さて　七夕まつりに昔はこんな　行事もありました。この日の朝早く『里芋の葉』に　溜まっている『銀色の露の玉』を　揺らしながら　そっと茶碗に受けて　その水を硯に取り墨でする。その墨を筆にしませて　短冊に『ねがいごと』を書いて　笹竹につけて　軒先に立てたものでした。

この硯の墨は　字が上手になると言われ　中国から入ったころも　これが躾の目的の一つでもあった　と言われています。

この日に切った竹は　洗濯物を干すのに　通す時には右からでも　左からでもよいと　されてもいます。またお墓の盆に立て変える花筒も　この日に切って　準備など竹時がよく一年使っても　虫食いの心配もなく　古くからの　先人の心がけ　知恵と言えるでしょう。

七夕祭りの話しにしても　もともとは　中国から入った言わば　人間の生き方の　教えをしつかり身につける　そんな意味も隠されているのでは　ないでしょうか。人間は『知らぬは一時の恥じですが　知ろうとする事を　しないのは一生の恥と思います。

本来なら今年の　８月１６日が七夕まつりの日です。でも暦の使い方が統一されて　現在は新暦ですから　実際の暑さはまだこれからです。暑さに気をつけて　病気、寝不足、にならないよう　水分補給と　勉強も忘れないようにしましょうね。でないと一年に一度の出会いはちっとムゲネーナエ。これは方言で『すこし可哀相ですね』と言う意味です。

また６年生なったらお会いしましょうね。おしまいです。

『海ん水は●なし辛ぇ』

昔　山ん奥に働き者ん　おじいさん　おばあさんが　住んじょつた。二人とも優しいき　皆んなかる大事にされ　また二人も　人ん為になるこたぁ　なんでん　しちあげよった。塩が欲しいち旅ん人かる　言われたき　『ちっとぐれなら』ち　竹んポッポに入れち　あげたんと。

そうするもんじゃき　次に来た時にゃ　都ん珍しい物なんかを　土産に持って来て　くれたそうな。

そげな話を聞いた　隣村ん　いじわる　じいさんが　聞いたんと。『あんたかた　ゆう塩があるが　どこじ作りよるんな』
あんまり聞くもんじゃき　『じつはなぁ』と　神様から塩を作る　臼を頂いた　話を　したそうな。それを聞いた　隣村ん
じいさんが　『しめしめ』……

いじわる　じいさんは　悪知恵ぅ考えました。夜になると
こそっと　忍び込むと　大事にしちょる　臼を抱きかかえち
そんまま　船に積むと　沖にでたんと。『あら作り道ぅ
聞かんじゃつた』と　気がつきました。『まぁいいか　何か
言うと　塩が出るじゃろう』　一人言を　言いながら　船を
止めて　『塩を出して　おくれ』☞あら　臼が回りました。

白い塩が少しずつ　出て見る見る　ゴザの上に　一杯に
なりました。ニッコリ笑った　いじわる　じいさん『しめ
しめ　もうよかろう』　と思うたら　真っ青になりました。
★　なしじゃろうか……★そうです　　止める方法が
解らないのです。臼を止める方法を　習わなかったのです。

止まらない臼から　白い塩が出て　船いっぱいになった。

困ってしまったが　もう　どうにもなりまらん。そして
とうとう船が　沈んでしまいました。いじわる　じいさんも
船といっしょに　沈んだんと。なえ　いじわるに天罰が
あったんじゃろう。そん船に乗せた　臼は今でん　海ん中じ
回りよるんじゃ　なかろうかなぇ。じゃき海の水は塩辛いん
じゃろうなぇ　そげー思う……。

これは昔話です。本当は地球は時々海の底から　爆発地震
なんかで盛り上がり　海の底が山になったりするのです。
そして太陽に照らされて　乾燥するとやがて雨の時に　流
れでて又海に帰るのです。そんな繰り返しで海の水は　塩
辛いのです。

高い山を掘って塩を取る場所も　世界各地にあります。こ
のように雨で流れこんだ　塩水は水分だけは蒸発し　塩分
だけが海に残ります。固まった塩を岩塩と言います。砂漠
地方は塩が大切な宝。戦国時代に塩のない長野県、山梨県
に　海岸のある新潟県から　戦争していても　塩を送った
と言う歴史物語りも　美談として残っています。

戦争していた日本も　外地にいる兵隊さんに　梅干しを
送って『塩不足』の　足しにした　そんな事もありました
。そんな事が解ると　意地悪じいさんの　気持ちもよく解
りますが　悪知恵はいけませんね。それに『止める方法が
解らない』☞想像しただけでも　面白く可哀相になります
ね。優しいおじいさん　おばあさんに　なりましょうね。

２年生になったら　また　面白い話をしましょうね。
お元気で　しっかり勉強してくださいね。このお話は方言
の調査を　している時に　聞いた話を小学生向きに　構成
したものです。

※※※　方言説明　※※※

３３Ｐ☞ギンイロノツユノタマ…揺らすと水銀のような露の玉が葉の上を転がる。澄み切った美しい玉は　この時期独特の涼しげな　魔法の玉のようにも見える。元から差す…元のほうから通すことで　もし竹のムクレがあっても　怪我せずに気がつく。当時は北向きには干さない。ムゲネェナエ…可哀相ですね。

３５Ｐ☞しちあげよった…してあげていた。ちっとぐれなら…少しぐらいなら。ポッポ…竹の筒で作った入れ物。もんじゃき…ものですから。どこじ…どこで。したそうな…話したようです。作り道ぅ…作った道を。なしじゃろうか…なででしょうか。

３６Ｐ☞なかろうかなえ…ないでしょうか。じゃき…ですから。じゃなぇ…でしょうな。そびー…側に。梅干し…梅を塩つけにした保存食の一つ。、

『正直がもらった　みやげ餅』

公平たちは元気者ばかりん　２年生んいたずら盛り。今日も学校かる帰りん田んぼ道じ　ドウクリながら帰りよった。ハズミじ押された公平が　そんまま畑に飛びくうじ　しもぅた。折角植えた畑ん畦に　そんまま座りくむと　目の前に可愛い苗が育っちょる。こんめー苗ん先にゃクルット　曲がっち出た芽が今にも　伸びだしそうにしちょる。

じっと見ちょつた公平は　あんまり可愛いいもんじゃき　そっと指先じ　あたっち見た。ら　音こす立てんがスルット

しもぅた　折れちしもぅた。『面白い』公平は　何を思うたんか　それが悪いことたぁ　考えんじ横の苗も触ると　ポキリ。モウ後先考えんじ　気がついたら何と　５本も折っていました。『しまった』公平はそこじ　えーと気がついたんじゃつた。

『どげしゅうか』　服ん土を払い落とすと　何食わぬ顔じ皆んながおる　道に出ました。待っちょつた皆んなは　それを見て　『公平しょわねえんか』『うん　しょわねぇ』そんまま　話しながら　帰りました。公平は家に帰ってん　なしか　あん苗の事が気になる。でも宿題の前に家の　仕事ん加勢があった。

そげな事じ気がまぎれち　うっかり忘れちしもぅた。『折れた苗はきっと　悲しゅ泣いちょるじゃろう』　こん日は終ったけんど　あん苗は枯れちしまぅじゃろう。

はじめんうちは　畑んオジさんも気がつかんじゃつた　がほかん苗が伸びよんに　なしアッコん苗は……ちじっと見た。『鳥が食うたんか』ちも　かんがえち　また出るじゃろうち　あきらめよった。そんうち伸びた苗は　大きな実をつけち　取り入れん時期を迎えました。公平がえーと気がついて　心配になりだしたのも　そん頃じゃつた。やっぱ『あん時悪い事したち　謝ればよかった』ち　悔やまれだしました。

学校帰りに公平たちは　畑ん横を通りかかった　そん時じゃつた。公平は皆んなに　あん日の事を話しました。『何かそうじゃつたんか』『何かおかしいち思いよった』『ここだけなし　苗がねぇかちのや』　皆んなの声が急に出だした
公平は　『ご免なさい　俺がだまっておったき』『公平よう話したのぅ　皆んなじ断り行こうじゃねぇか』

公平はタマガッタが　嬉しかった。友達たぁいいもんです。皆んなじそん家に行きました。おじさんな吃驚しち　『何事か』ち見回したが　どうやら意味が解ったごたる。『そうかそぅかゆう正直ぃ話しちくれた　おおきに』　ニコニコ顔じ話しゅ聞いた　おじさん。公平もホットした。『もしかすりゃち　思うたがいつかきっと　話すじゃろうち　信じちょつた』　皆んなも嬉しかった。もしここじ　叱られたりしたら　今まじ隠しちょつたことが　大変悪い事になるから。

『心配せんでんいいきの　多分そうじゃねぇかち　子どもん足跡　そりぃ子どもんワヤクち　すぐ解ったきぃ。じゃが悪かったち反省する　そん心が大事な事じゃ。俺も　もっと折られたかち毎日　ヒヤヒヤしよったんど』　皆んながドット笑うたき　とてん晴れ晴れしちきた。

『おばあさん　もう出来たんじゃねぇんな』『すぐ出来るで』奥から　おばあさんが　どうやら蒸した餅を　作っちょるよう。『正直んご褒美に　蒸し餅ぅあぎゅうな』『……』　人間は正直じねぇと損ぬすし　信用ものうなる。今まじいつも気に　なっちょつたじやねぇ　そん苦痛も大事じゃつたち思う。

これからは元気じ　正しい心じ　勉強も頑張っち　欲しいな。『これじ今度んこたー　おしまい帳消し』『おおきに。

★　方言説明　３７Ｐ☞ドウクル…騒ぎたてる。くうじしもぅたこんでしまった。スルット…急に。どげしゅうか…どうしょうか。しょわねぇか…大丈夫か。泣いちょる…泣いている。じゃつた…でした。アッコ…あすこ。なし…なで。
３９Ｐ☞タマガッチ…吃驚して。すりゃ…すれば。ねえかち…ないかと。ワヤク…いたずら。しよった…していた。ねぇんど…ないの。あぎゅう…あげる。

『迷子になったお姫さま』

暖かいお天気に誘わるるごつ　外に遊びに出たお姫さま。行くあてもねぇが　鳥ん声や風ん音を聞きながら　歩いているうちに目の前に　見たこともない細い紐。何の気もなしに拾うと　てくてく歩きょつた。そん紐を振り回すと　何かとてん楽しい気分久しぶりんいい気持ち。

しばらくして辻の道脇じ　草履の紐が切れたのか　困っちいろいろ考えよるごたる。つくろいをするのを　見たお姫様は『どうしたののですか』と　声をかけました。はっと手を止めると『草履の紐が切れち』　困ったような顔じ見上げる。じっと見ていたお姫様　『これよかったら　役にたちませんか』　さっき拾った紐を差し出しました。

タマガッタチそん人も　知らないしから　親切にしてもらうなんか　初めてじゃつたんじゃろう。『いいんでしょうか』　嬉しそうに紐を受け取ると　切れた紐と取り替えち　足に当ててみると『なんと履きよいことか』。目に涙浮かべち　『ありがとうございました』立ち上がると　丁寧にお礼を言い　頭をさげました。『よかった役にたって　きっと紐も喜びよるでしょう』　お姫様もニッコリ笑いました。

その時です　荷物の中から包んだ袋を出して　『これお礼に差し上げます　腹薬です。たくさん買ってきましたので　1つ差し上げます　ほんのお礼の印です』。お姫様も嬉しそうに受け取りました。歩くのに不自由なくなっ　その人も旅を続けち出かけました。なんとも言えん　微笑ましい事じゃつた。旅の途中じこげな目に合うと　慌ててしもうたり　困る事が多いもんじゃがこげな　人とん巡り合わせは　きっとどこかでいつか　人の為にした事が　思わぬ人に助けられた　事になったんじゃろうな。

お姫様も帰るにゃちっと早いき　そん人の歩いた方向にルンルン気分じ歩きました。小さい川端まで来ました。川を覗いち見るとメダカが　泳いで運動会をしよるごたる。そんすぐ後かる大きなフナも　追っかけしょるごたる。腰を下ろしち　じっと見つめた　水ん流れに自分が乗っちょるごたる。反対側に動いちょるき　あらっと思わず見回した。

『あら不思議』はっと自分にかえると　空には真っ白い雲が浮いていました。じっと見つめると　少しずつ流がれちいるんです。そしちまるで自分も動きよる　気持ちになっち行きました。『面白い』お姫様は　いろいろんこつぅ　知る事も出来ました。それに空や空気　水や川ん大事な事も　解ったようじゃった。

夕暮れ近くになっち　馬を引いた人が腹を押さえち　こちらに来ました。顔もしかめちヒドゥ苦しそう。お姫様の側まじ来た時じゃつた。痛みがひどうなったんか　馬を側ん木に繋ぐと　座り込んでしもぅた。『どしたんです』お姫様が尋ねた。『腹が急に痛ぅなっち』　よほど痛かったのを　我慢したんじゃろう　顔色も青ざめちょつた。

さっき貰った薬を思い出して　『あの　これ腹薬です』差し出したのを見た　そん人はすぐに飲むと　そこに横になっち休みました。暫くした頃に　どうやら薬が効いたのか　気分がラクになったよう。『あぁよかった　助かった　おおきに』『よくなった……よかった早くよくなって』　お姫様も喜びました。

もう夕暮れになりました　元気を取り戻した　そん人も帰り道の方なら送りましょうち　『お礼にオンボしてあげよう』と言うと　お姫様も甘えて　背中にオンボしました。

『たすかったなぁ』　馬を引いていたのは　きっと馬子さんでしょう。背中は広ぅじ　ほんとラクチンでした。『夕焼け　小焼けで　陽がくれて……』　疲れたのか　お姫様は馬子の背中で　気持ちよさそうに　子守歌に聞こえたのか。

拾った紐から　草履のツクロイ。薬をもらい　それが馬子の腹痛を助ける。人間の世界は　皆んなが助けあって　生きている。そんな夢を見ながら　お姫様は　どこに帰るのか　そして　どこから来たんじゃろうか……。

※※※　方言説明　※※※

４０Ｐ☞草履の紐…草履には３本の紐がついている。つくろい…修理。はっと…吃驚して。じゃつたんじゃろう…だったのでしょう。腹薬…胃腸の薬。

４１Ｐ☞自分も動きよる…自分も動いているように感じる。こっう…ことを。じゃつた…でした。ヒドゥ…大変。オンボ…背中におわれる。

★　故郷で語られていた　伝承ゃ民話　それに実際にあったお話から　構成したもので　世話になった事の　恩返しは知らぬまにも　している事が多い。それは常に人を大事にする　優しい気持ちがあるから。出来る事をいつでも　どこでも　誰にでもする　心くばりは　いつか　どこか　誰かに　してもらう。事にもなるのでしょう。施しから生まれた　報いのお話でした。

.43

故郷の味　『じり火焼き』

種油を鍋にポトリ落としち　煙てぇぬ目をシボメチ避けながら　ばばさんが『十八番』の　『じり火焼き』ぅ作るんじゃろう　近所を通るとすぐわかる。米は食い延ばしせにゃセッキまじ持たんかんしれん。小昼に食うちょきゃ　晩飯ゃもう定盤の　『だんご汁』じおしまいチャンチャン。

『マタやりよるな』　煙りぅちっと避けち目を　シバタカセながら　『まぁ寄らんな』『おおきに　帰り寄るわな　ガイト作っちょきなぁえ』　『わかっちょるき』　顔なじみん若いしが田回り行くんじゃろう　気さくに声をかけちくるる　田舎じゃ掛け替えのねぇ　お付き合いツツロク人生。

イットキしたらネジ鉢巻きした　若いしが戻っち来た。煙りが消えたごたるな　どうやら焼き終わったんじゃろう。香りだけが仄かに漂うき　一服しよるんか知れん。『寄るで』『まぁかけなぁ　水あんばいはどげーな』『うん　いい按配にタマッチョツタき』『そりゃよかった　陽年ゃ作はゆう出来るち言うが　そん代わりせわしいなぇ』

そうこうしよったら手しょ皿に　フトシコごと『じり火焼き』が　ここんバアサンの優しさと　一緒に運ばれち来た。『相変わらんサカシイなぁ』『おおきに　サカシイんが取りえじ　あたぁ何の役にもたたんが』『そげんこたぁねえで　留守番も　所帯ん加勢も　みんな喜びよるんで』『そうかえぇ　年寄りじもうツマリャせん』

家族がオリヨウチョルんも　年寄りん並みん仕事をチャンと　受け持っちするきこす　又皆んなもしてもらう気くばりが　明るい家庭環境にも　なっちょるんじゃろう。

作り方え　簡単なもんじ小麦粉に　チット塩を入れちユルゥ練る。ドロットしたぐれがいいかな　油をひいち流しこむ平とぅすりゃ　ケックシャゆう出来るんで。下べらが狐色になった頃に　黒砂糖を刻んじうっすら　表面に撒くと自然と溶くるき　そん時に二つ折でん　グルッと巻くのも好みじ。

そんまま引き上げるとハイ　出来たてにゃ黒砂糖が焼きつくき　用心せんとな。焼き立てがウマイケンド　包んじ置くと一時ぁホカホカ。適当に黒砂糖も溶けち　何とん言えん風味んするもん。昔は百姓は米ん食い延ばしに　真剣考えたあげくに　小麦粉ん使い道を考えたことかる　いろいろ食べ道う作りで一たごたる。

久しぶりに外に出たお姫様が　香りのよい『じり火焼き』ん　匂いに誘われち供のものが　せがまるるままに農家に立ち寄ったらその家の　老婆が内緒じお接待したらしい。そん時に初めち見たお姫様　タマガッチ『じるい焼き物』ち聞いたかる帰った後じ　『じるい焼き物とか　言いよったごたるなぁ』『いんにゃ　じり焼きもんち言いよったで』

あげくんはて　ほんな『じり火焼き』に　しちゃぁどげえな。じりーたぁ　柔らけぇ意味じゃろうき　ぴったりんごたるで　なんかいろいろ意見が出ち　しまたつかんごつなった。せっかくお姫様が食うたんじゃき　そん名前をつけちょきゃ　名物になるかん知れんで。

今でん所によっちゃ　『じり火焼き』とん『じり焼き』とん言うが　どっちしてん人間の生きち　行くためん食い物じゃき　大事に呼び名がおるんも　よかろうじゃねぇな。とまぁ決着したそうな　呼び方も自由に好きにしち。それがクジ言いごなしに…文句なしじゃろうなえ。舌焼かんごつな。

故郷の味　『やせうま』…『ひきまめし』

峠の茶屋じ馬を繋いじ　竹田かるん帰り道ん馬子ん五助さん　今日はチットダッタごたる。馬もヒズカッタジャロウき持っちょつた　ハミよりも別に粉米も入れち　『ちょいとヨコウキ　お前もゆっくり食えや』　優しい五助さんの言うそん言葉が解ったんじゃろう　一声高笑いした仕種。

馬が笑う時ぁ上向いち口ぅ開けち　真剣嬉しい表情を見する。行き来する人たち、荷物運ぶ馬方なんかも　ここまじ来ると脇ん木陰に馬を繋ぎ　ヒトヨコイする。出た汗んやつ吹く風が脇から入るき　ソリャモウ気持ちも落ち着く。『五助さんな　ヤセウマじいいな』『あぁ頼むで』

やせうま…こげな話がある。五助さんが引いちょる馬はまぁまあ見てんオカシュネエガ　中にゃ真剣働くきぃかチット　痩せちムゲネエヨウナんもおった。ここまじ上ったんもエートンごつ。そして舌をペロリ出した　そん舌が誠ちそん『やせうま』んごたる。

旅ん若者が急がしゅ来たち思うと　『痩せ馬ありますか』ち注文した。生憎用意した分がしまえち　いま茹でよったき『ちょいと待っちくれらるる』『よいですから』　そん時じゃつた　そん旅のひとが　『やせうまタァどけな食べ物じゃろうか』ち　隣に腰かけた人に聞いたら　丁度痩せギシン馬が　目の前に繋がれち舌を出しちょつた。そりゅ見るとすぐ　『ほらあん馬ん舌んゴタル物で』『……』

それかるは『やせうま』んこつ　こげな訳じ付けたち言う話もある。も一つは『たとえ細く痩せたように　見えても心は優しく太いリッパナ馬』の　意味があるとも言う。

出来るまじん時間に興味をもった　若い旅んしは釜屋をチョコット覗いた。『あんたも物好きじゃなぁ』『いえここのヤセウマとは　とても珍しい名前ですき』　今ん話しんごつ人と馬が助け合う　そげな気持ちが通い合うのでは。思わず勉強になったようです。

作り方は…質問が出たき　小麦粉に塩一つまみ入れち耳たぶくらいの太さにちぎり　少し寝かせて湯を沸かして　ダンゴ状の材料を引き延ばす。約３０センチぐれかな。順に湯にいれて浮き上がったら　編みかごですくいだしそのまま乾かして冷やす。この間にきな粉に砂糖を混ぜ合わせ　平鉢の中で冷えたヤセウマを　まぶしたら出来あがり。材料が細い短い　厚い薄い　太いなどあってもそれが口当たり　喉越しに微妙になって　美味しさを盛り上げ故郷の味を見せちくれるで。

感心した若者は　『こんなに自家製品を大切にして　食の文化に感謝できる食べ物は　珍しいです』と　感激していた。そこに顔をだした五助さん　『若い人に喜ばれてわしも嬉しいわな。もひとつアンタに　お土産に話しを。『こんヤセウマは盆に供えるが　先祖が天国に帰る時お供の食べ物果物を　まとめてクビル紐にするとされて　必ず供えるんで　もっともワシも大好きじゃが』『ですか私も大好きになりそうです。

そん時じゃつた　繋がれたうまが『ヒヒーン』　一声嘶いたもんじゃき　『こりゃどうもスモツクレンコツ言うち　コラエナァエ』　若い人もあんまりは意味が　解らんが何か通じ合うものを　感じると『おみやげに包んで』と竹の皮に包んでもらいよった。聞いた話も一緒にな。旅の途中じあれこれ話を盛り合わせち　みやげ話にするんか。

故郷の味　『つけ汁』

『お前どう早ぅ　これを踏みなぁ』　今日はお客さんが来るき　どうやら　ウドンぬ打つんじゃろう。『あい』心得たもんじ　風呂敷に包んだ　ウドンの元ん粉が　具合いゆうコネラレち　包んじある。小麦粉に適量ん塩　水じ上手にコヌルト　手じ触ると耳たぶほずん　柔らかさ。

これかるが　大けな大事な仕事　子どもん重さがチョウズいいぐれぇ。回りながら上手に踏み　おおかた飽いた頃がもぅ　いい按配になっちょる。『踏んだで』『そうな　おおきに』まるじ流れ作業んごたる　親子んコンビネーション。ほんな打つか　母親がうまい具合に　子ども使うんも　日頃かる躾ぅしちょりゃこすん話。そこにゃ愛情が　こまやかに結びついちよる。

子どもが踏みしめたんが　いい按配に練れちょるごたるき打ち板に粉をパラリ撒くと　真ん中に据えた。もうシコは上出来。長ぇ麺棒を上手に裁いち　広まった。『これじよかろう』今日ん出来がいいごたるなぁ　ニッコと笑顔がこぼれた。影かる見よった子どもたち　母親がどげするんかのぅ　『お前どぅゆう踏んじょたき　おおきに』　懐かる小銭を出すと『あい』二人に渡した。

顔見合わせた子どもたちは　何に使うんか知らんがよっぽず嬉しかったんか　手のひらじ見直しよった。

広げち四つ折すると包丁ん音が　コンコロモチイイ。真っ白いウドンが時の間に出来上がった。煙てぇクドにゃ大けな釜がもう　沸き上がった湯がタギリよる。サット入れたウドンの白さが黒い竈にゆう似合う。

ウドンをゆがいち出来た頃にゃ　イリコじ取った『だし汁』も　いい香りがしよるき　お客さんがいつ来てもいい。素朴なイリコだしにゃ　福よかな味が染み出る・取り合わせんゴマ、ネギ、を入れた『つけ汁』にゃ　白いウドンの本当ん味が　確かめらるるち言う。下手な小細工よりも後味が　何とも言えんきでんある。

釜上げウドン…釜でゆがいた後　そのまま丼に入れて　だし汁をかけ　薬味を乗せると　通ん人たちにゃタマラン味。
生しゅうゆ味…ゆがいた後のウドンに　醤油の生のままを少しかけて　まぶして食べるのも一興。

湯つけウドン…田舎で一般に食べる方法じ　大きな丼に湯を張り中にウドンを入れる。つけ汁に箸でとりあげて食べる。夏は冷たい井戸水が定評。

知らんじゃつた旅人が　接待にあずかりウドンが　運ばれたが　お客が遠慮してはと　『ゆっくりお召し上がりください』ち　奥に入った。お客はつけた湯まで　食べねば失礼ち思いみな飲んじしもうた。頃あいに『だし汁』の　お代わりと気をきかせ　『お代わりどうですか』と　聞いたもんじゃき　『もう腹一杯ですから』と　ゲップも出たち言う。
なんとゆう見ると　つけた湯まじ飲んでしまっちょつた。これは大変失礼とお接待が仇になったち　恐縮しちしもうた。ソバん場合は薬味に　ショウガ、ミョウガ、も加わることがある。素朴な味んツケ汁しせゃきこす　美味しさも醸しだすんかも　知れんがイリコが海から　ゴマが畑から　ネギが土ん中から　宇宙全体かるん　エネルギーを貰った物が　真っ白いウドンにお供しち食べるなんか　誠に夢とロマンが湧いちも来る。自然を大事にしちこす　人間は生きられ　幸せかん知れんな。

※※※　方言説明　※※※

４３Ｐ⇨シボメチ…細くして。食いのばし…食料を大事に使う。セッキ…年末。やりよる…焼いている。シバタカセ…目を開け閉じして。ガイト…沢山。ツツロク人生…真心が行き来する。按配…都合よく。タマッチョツタ…入っていた。陽年にゃ…日照りの多い年は。手しょう皿…小分けに使う皿。フトコシ…大変多く。サカシイ…元気で。取り得…しあわせ。ツマリャ…役立たぬが。オリヨウチョル…家族円満。

４４Ｐ⇨ドロット…ねばねばして。ケックシャ…結構。グルット…回りを。せがまるるままに…言われるままに。じるい…湿気が多くねばい。しまたつかん…解決できない。おるんも…守っているも。クジ…不平。舌焼かんごつ…熱いから気をつけて。

４５Ｐ⇨チットダッタ…少し疲れた。ヒズカッタジャロゥ…疲れたでしょう。ハミ…飼料。粉米…米粒の小さいもの。ヨコウキ…休みますから。ソリャモウ…それはもう。ネェカ…ないですか。ムゲネエヨゥナ…可哀相な。エートン…やっと。タァ…とは。やせぎしん…痩せている体格。ゴタル…ようで。

４６Ｐ⇨チョコット…少し。編みかご…水気を流し落とす籠。クビル…束ねる。スモツクレン…役にたたない。コラエナーエ…我慢しい許して。

４７Ｐ⇨コネラレ…混ぜて練る。チョウズイイ…都合よい程度。打ち板…うどんを切ったりする板。パラリ…平均に散布。シコ…準備。小銭…少額貨幣。よっぽず…よほどの。コンコロモチ…気持ちよく。

クド…竈。タギリよる…湯が煮立っている。

４８Ｐ⇨タマラン…我慢出来ない。生のまま…作ったそのまま。みな飲んじ…全部飲んでしまった。

『だし汁』の使い方は　きじそのもんの味も引き立てち　くるるき下手に新しいもんぬ　使わんほうが妙味もひきだす。そこに『かくし味』どま　チョコット入れちみりゃ　不思議な旨さも加わるもん。

山芋トロロ汁…いりこ出し汁じ　充分味が出ちくるるがゴマをすりこみ　薬味を加えち　挙句にチヨコット隠し味も『生醤油』を　ちっと垂らした奥の手じ　風味が加わるき『ありゃ』ち　考えちススリ込む。土ん味に大豆麹ん甘さがサツト　味をととのえちくれた。

自然の風味を生かすのん　生活ん知恵じゃき使う技法が料理人の腕ん見せ所。見た目　かぐ香り　音に聞く器ん感触なんか　一つん皿に茶碗に込められた　人の真心は瞬時に消えてん　心に残した余韻はいつまでん　消すこたぁ難しい問題でんあるごたる。

湯つけウドンを食べた　旅の人の心にも『知らなかったとは言え　教えなかった事の舌足らずが　あったにしてんその味は素朴だけに　いつまでん心ん奥に　しまっていたいような　気分にさせられるもん。

だし汁…たかがそん『汁』にも　人の尊い命のような誠情けが隠されていた。それを知った覚えた　解っただけでも得をした今日は。思わず儲けたんかん知れん。

土間のある話シリーズ

← 51

『冬期ん牛の漬け物』

こりゅうサイレージち言う　夏に栄養んある草やら　トウキビなんなを刻みくうじ　サイロ詰めしたん　そん審査会があっち　数が減っち大分市西部じ　ほん４０戸ほずが畜産に　執念ぬ燃やしよる。大分市に合併しち　第８回目《通算２５回》　野津原町ん頃にゃ畜産農家も　多かったが過疎や　若者流出なんかもあっち　高齢者が真剣『牛が好き』ち　取り組む姿はまこち　ええらしい。

審査は栄養価値　色や香り湿度なんか　多くの項目に審査員も専門的な見目かる集計　最優秀賞にゃ昨年に続き　秦さんが獲得。挑戦した人たちも　やっぱそん腰前が　他の審査員賞を獲得した。女性だけん団体　『畜産女性部』じゃき　開催までん前準備にゃ飛び回るが　そこまじ執念ぬ　かけらるりゃ牛ん　品位も自ずと高まるごたる。

農業経営にしてん耕地ん　条件も悪いし米ん収入だけじゃ　生活基盤の裏づけは至難。とナリャ畜産か　山林収入となるが　そん山林が芳しゅねぇ。養蚕、葉たばこ、チョマ、ミカン、ブドー、採算ベースに乗せにくい　棚田の草が生かせるはず、じゃがそれは素人話。肉牛となりゃもう　そげな遊びじゃ　不安が残る。

腰の曲がった老夫婦が　最後まで放さんじゃつた　畜産は手慣れたこともあっち　運動場ん確保が出来りゃ　小規模畜産な可能じゃが　飼料購入に予算がかかる。堆肥を田に回し　稲藁を牛に返す　高度経営が効く間はいいが　耕地の場所　家内組の問題がここに来ち　また難渋するありさま。

高級登録牛なら『せり市』で　高値が希望じゃが　算盤計算が上手じねぇと　さんにゅうがあわん。『ゆっくり旅行も出来んなえ』　たしかに寸暇を　惜しまんじ手入れすりゃ　答えちもくるるんじゃが　買値が問題。

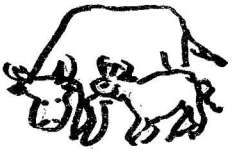
涙で送り出した仔牛　組合から受け取った　売値かる『セリ代』が　引かれ手元にゃ予定より目減り。『元気しちょりなぁえ』涙がまぁ　頬に跡形残しちょる。『じいちゃん　牛の仔売れたき１割』『もういいど　お前どもヒズカロウに』『いいえ　これからもお願いします』　そっと頬拭くと　『ばあちゃん　これあん欲しいち言いよったぬ　買うてな』　『ちゃら　いいんな　あんまり泣かんじじゃつた』　受け取った手が　小刻みに震えちょる。

農家ん暮らしは厳しい　じゃけんど土地がありゃ　何かせにゃならん。長年手がけた牛飼い　今手っとりばえーなそれが　一番じゃろうが。現実は潜りぬくるに　度胸と勇気がいるごたる。

会が終わって注文した　弁当が届いた。来賓も多かったが牛飼いする　したちん昔んごたる　歓喜は薄らいだんも　これかるん取り組が課題でんある。世話役ん人たちん　済んだ荷がおれた　次は何をするんが　皆んなん為に一番いいんか　喜ばれるごたる　奇抜なもんはねぇもんかな。戦後ん景気が懐かしゅう　脳裏をよぎる。

サイレージコンクールは　畜産婦人部が発展の基地としち　こげな行事することじか弾みが　かかった協議の場でんあった。じゃが時代ん変貌は容赦のう　片寄るごたる環境ん　変化について行けぬ状態になりつつあるごたる。高齢者社会ん広まりとともに。畜産農家ん果たす役割に　支援の方法はないもんか。

野津原町時代に　畜産農家が自主的に　組織して冬場の飼料確保目的に　サイロ詰めしたものの　内容向上と共通意識発展に　製品の審査と取り組みの　研修をかねてはじめたもの。平成１７年には大分市に合併して　それからも継承して　大分市西部と野津原が一体となっての開催だが　実質的には野津原地区の　生産者が主のようでもある。



『戦前の小学校　風情』

※　指が消しゴム…当時には『消しゴム』売られち　金持ち
　　ん子は買ぅちモライデータが庶民にゃ
まだまだん時勢じゃつた。色黒い西洋紙に鉛筆押しつけ
ち　書くもんじゃき書き損なうと　もうオオゴト　消し
ゴムがねぇ子は人差し指ぃ　ツヅつけちコスル。

ツヅじ湿った紙ん表面な　ザラザラと削られち　書き損
のうた字は消えたが　そんぶん紙ん表面な黒ずむ。そん
答えも本当は違うかん知れんが　解らんじゃつたり慌て
たりすりゃ　もうそげな方法じ誤魔化す。先生もちゃん
と解っちょるき　『ゆう考えたんじゃのぅ』『……』

帰って来た答案用紙は物の見事に　『お前どうは残れ』
それは放課後ん　時間に暗ぅなるまじでん　教えちくれ
よった。どうでん解らんなぁ『宿題』に　しち次ん朝に
早ぅ出させらるる。それでん先生も　アゴギノウ　教え
ちくれよった。

地理ん時間に関東地方ん５つん　主な線路ん名前があっ
ち　一人一人教員室じ言わする。どうでん解らん者は
残れになっち次席ん先生が　ガラス窓に白墨じ書いち
覚えられた。そんお陰じ地理が得意になったち　親子
が喜ぶのんあった。

『なにや８０点もくれたんか』『……』『先生が出
来ん悪いなぁ贔屓したんじゃなかろうのぅ』　嬉しい
声じ親が喜ぶと子も　日ごろぁ出来んでん　一緒にな
っち喜ぶのもいいもんじゃ。『今日も残るんかのぅ』
『先生もクタビレタど』　それでんゆう教えよった。

石板にもろうた　二重丸…１年生になったら　学校じゃ石板に石筆じ書いち　出来んいい時にゃ二重丸を　書いちくるるきソンママ　カバンに入れち持っち帰る。途中じ遊びながら帰るき　帰りついた時にゃもう　ナマカタ消えちょるが　やっぱ嬉しいもんじゃき　やうち皆んなに見せちそこじ消す。もうそん頃にゃ何が何か　あんまり解らんがそれでん　やっぱいい証でんある。

『お前　きにょうは二重丸貰ろうたち　言いよったの』『そうで見た』『いんにゃ見ランド　お前見せにコンジャツタじゃねえか』『そうかなぁ　ほんなコンダ見するき』『本当か　嘘ぅゆうなや』　大人がセガウモンジャキ　子どもはいちべ喜ぶ。

今日は祭日じゃき　袴をはいち行く日。女ん子はきちんとオサゲに髪を結び　袴がゆう似合い。皆んなじ歌う時にゃ　オルガンが前奏を弾きだすと　決まっち咳ぅする　声ツクロイをする。講堂が静まりかえると　おもむろに歌が始まる。

正月やら紀元節やらは　帰り道が霜溶けしちもう　泥はねが苦になり気になる。女の子はそこぁちゃんと　裾をからげあげち　グロん方を用心しち歩く。おテンバ娘デンやっぱ　こん日はおしとやかに　日ごろ雑なだけにキチンとすりゃ　初々しいき不思議でんある。

算盤ぬ習う頃になりゃ５つ玉　足す引くだけじゃねぇ一つじ割り掛けまじ出来るき　便利がいいな解っちょるが覚ゆるまじが大事。九九を使い玉を上手に弾くと　ぱっと答えが出ちくるるき　誠ち便利な計算機でんある。そげしち義務教育６年はアット　すぎちソロソロ声変わりも。

『八輪…はちりん』

コンロんこつぅ七輪ち言うち　料理、焼き物なんかに利用が広い。炭が身近にあることかる　ゆう使われよった。長い間ん時間ぬかけち煮るのにゃ　便利じあったきゆう使う。それに間をちっと開けち火熱ぅ　和らげち使う為に使うんが　八輪とん言うもんじゃつた。

七輪よりゃ一枚上ん手じゃき　一枚数ん増したんじゃろうが昔んしは　こげなコンメェこちでん　優しい心くばりしよったもんじゃ。なぇふんと『八輪』なんか　言われてんチョツケマッケヤ解らんがなぇ』　まぁこげんふうに生活に　密着した道具ん移り変わりが　食文化ん流れにもなっち　改善されたんが　手に取るごつゆう解る。

そげな生活用具みたいなもんに　『里程木』がある。道ん途中ん１里間隔ぐれーに　大けな木を植えち旅する人たちに　ゆう解るごつした知恵。時にゃ木陰じヨコイ　汗を拭いたり草鞋ぅ整えたりする。じゃき人は『００里塚』『００里脇』なんかつけち　馴染み深ぇ場所にもしよった。夏どまそこん影が昼先ん３時とか　ここまじ影が来たき　モウ５時なるでとか。

『あっこじ待っちょりゃいいわ　すぐ追いつくき』『わかった慌てんでんいいき　気をつけち来なぁえ』　待ち合わせん場にも使われ　長い間大事にしよった。たまたまそこが辻じゃつたりすると　そこはもう商魂逞しい。すぐ『峠ん茶店』が出来ち　白髪頭んバアサンが　ゆう似合う店番におったき　若いしどうが町に出かくる時　『すまんけんどチット銭貸しちくれんな』『又かえ　あんまり無駄銭使うこた　出来んで』『解っちよる』　帰りが遅い時にゃ　『ふんともう　あいつどう銭ぅ使い果たしたんじゃろぅ　もう』

★★★　方言説明　★★★

５１Ｐ⇨アタラン…あたらない。スルカチ…するよう。ジャキ…ですから。おくれ…ください。ダマシ…急に。ヒョイト…咄嗟に、もしかしたら。クレメーカ…いただけませんか。コンメーが…小さいが。イットキスリャ…少しすれば。乗りよ…案内しますから。

５２Ｐ…トット…まったく。笑いは一つ若返り　怒りは一つ年老いて行く。

５３Ｐ…モライデータ…もらいました。ツヅ…つばき。ザラザラ…手障りが。どう…たち。アコギノゥ…しっこい。クタビレタ…疲れてしまう。

５４Ｐ…石板…石板を字を書く道具に。石筆…石板に書く道具。ナマカタ…少しは、なんとか。コンジャツタ…来なかった。セガウモンジャキ…おだて透かし悪戯するものだから。そこぁちゃんと…さすがに結果は。九九…算盤用の計算技法の算法。ニイチテンサクノゴ…１０を２で割ると５になると言う算法。

５５Ｐ…コンメー…小さい。チョツケマッケ…急ぐ時は間に合わない。ヨコイ…休み。整えたり…紐をしめたり痛みすぎたら取り替えたり。じゃき…ですから。どま…など。モウ…やがて、遅れる時は恥ずかしいので店しまいした後に帰る。

人気者ん五助さんにゃいつも　多くん人たちが指導され力を貸しちもらい　お互いが楽しいイノチキが　出来るごつ骨オッチ付き合いしちもらう。困った時　心配な時　誰にでん話されん時でん　なしか五助さんにゃ話せるる。それだけ人ん心気持ちが解っち　くれよったんじゃろう。

今日も馬子歌唄ぅちどこまじ行ったんか　でん皆んながチーチヨルき。

雄鶏

57

女性の底力　　『戦中疎開ん苦痛』

戦いが激しゅなっち　昭和１９年にゃ沖縄かる　疎開受入れがあった。当時ん区長じゃつた後藤熊五郎は　男手ん少のぅなった区内を回っち　納屋や堂、お寺なんかに頭をさげち　１０所帯あまりを受け入れた。厳しい供出時代でんあったが　食量はまぁまぁ恵まれちいたほう。働いた事のねぇ女子どもも　それなりに自分の出来るこたぁ　働いち地区民に溶けこむ　努力をしよったごたる。

順番に苦役も回っちくるき　それも出来んままでん出る。誠ち厳しい疎開生活が明け暮れた。食べ物でん潤沢にゃねぇきちった覚悟しち持参したもんでん　いつんなかめぇか食い物に変わる。幼な子どもたちも贅沢は言えない　そげなムゲネェ心は時として　予期せぬ事にでん走りがち。

ひくぅシャント身かしめちょつた　後藤区長ん才覚は立派なもんじゃつた。よそにも年寄りだけん者もおる。そげなしにもきちんと差別んねぇ　取扱いがされよったき　苦しいなりにでん皆んなが　それなら我慢するのが　銃後ん日本人の務めち歯を食いしばっちょつた。

国債ん割り当てもある　『どけしたもんかのぅ』　区の役員が集まるたんびにゃ悩みが募る。じっと聞いちょつた子どもが『あげー区長さんが困るに　何とかならないんかえ』　母親をせき立てるが親ももう限界　『僕の服いらんき金に変えて』いじらしい話しに区長も　目頭ぅ熱くぅしちすぐそん子に『心配せんでんいいき　お前たちはシャント勉強しち早ぅ大きゅうなっち　戦争に勝たにゃのぅ』『……』　本当は子どもん服でん　売るるならお菓子ん一つも　食わせてぇが。子どもが菓子になんか今は　夢のまた夢でんあった。

ここん区は４５戸ぐれの　田舎じゃコッポリした集落じゃき　まとまりもいいし何ちゅうてん　区長ん才覚が戦時下でん　皆んなの気持ちが統一され　苦情もなかったんが力量でん　あったんじゃあるめーか。沖縄はじめ各地かる疎開しちそれじ　のうでん世話が難しい時　引き受けたなぁ誰でん出来るもんじゃあるめぇ。

統制配給　灯火管制　区役動員　国債引き受け　どん一つ取っても苦渋ん選択も　許されん下達命令じあった。畑に家を準備しち受け入れる　食べ物も分け合う　子どもも公平に取り扱う。結婚が決まっちやっと晴姿ち　思う間もねぇ入隊しち戦地に。まさに銃後ん嫁になった。学校に行きたいが父の　遺骨が帰るからと泣き泣き　欠席届をする子どもん心境。

男もおらん老人子どもん地域　それじゃきこす皆んなんまとまりが気揃いがゆうなった。学徒動員じ松根堀りする防空壕堀に行く生徒。炭焼きじ真っ黒になった　顔ん汗がなしこげえ戦争せにゃならんの。モンペが流行しち仕事着にゃピッタリ　東北ん人たちが仕事着物としち　使いよったんが全国に広がったそうな。

食い物が乏しゅなっち　大けなトーキビ青野菜が雑炊にコカスが火焼きになっち　あっちこっちじ食われるる有様。盆踊りん楽しい夜に　人気者んトシちゃんが　あぞけねぇ姿に輪になった人たちん　心慰め和ませちもくれた。人ん心ん中にゃもう運命共同体としち　ここじゃ慣れ親しむ日々になった。何はなくてん心が豊か　じゅやつたきじゃろう。

悪夢ん戦争も負けて残ったもんは　悲哀と山河荒れた故郷ばかり。疎開者もだんだん元に場所に帰る。農家の復旧には時間もかかるが　これも宿命でんあったごたる。

沖縄ほかん疎開しち世話になった　そげな人たちも離れがたいじゃつた。でん生まれ故郷にゃまた　それぞれん生活が始まる。じゃがここじ共に苦痛を乗り越えた　人間体験はここじゃきこす出来たち　便りに書いちゃつた。生死極限にある時ん女性ん心は　まさに鬼神も岩を貫く心境んよう。

トシちゃんの盆踊り　雑炊を美味しく食べた夕時。いつまでも寝つけぬ大分空襲ん日。学徒が動員先から帰らない日その度に区長と作戦を練り　常に先頭きって率先遂行した故郷ん女性たちの　強引な実行力。それらが相乗効果となった　あの日あの時あの仕事。

土地の荒れた農地に米の量産が　要求され責任が果たせないため　強権発動もあった。昭和２２年の事だが食料さえも　ままならぬ農家が更に苦渋の選択。悪夢がくり返されたが　３４年には電話の施設が広がった。３６年には故郷からん大蔵大臣の誕生じ　公営バスの運行も実現した。

常に底流に女性の力があり　戦時下でも苦難を乗り越え戦後復興も早かったのは　時時のリーダーがあり　繊細な心が通じ合い施政が住民を　心配させない暖かな取り組み　常に敷かれているから　安堵感もにじみ出ているのであろう。川の美しさも共同で河川を　汚さん崇高な心構えが　そうさせるからか。

突然ウナギが居なくなって慌てたが　川の汚染が原因とすぐ解決に努力　名誉挽回も事なきを得た。逞しい女性揃いでも優しくしとやか。女子消防団さえ構成した兵たち　区長の人となりが強調する　優れた理解挙力精神は　これからも迎えるであろう　難関にも立ち向かう強靱な　底力は常に温存されているように　頼もしい存在でもある。

『竜馬が通った肥後街道』

平成２２年《２０１０、明治１４３年》にゃＮＨＫ大河ドラマ『竜馬伝』が放送されち　２０年かる本格的に『肥後街道を　踏破する道開けに商工会青年部が　取り組んだそん道が脚光も浴びた年　でんあり来客の『おもてなし』に　繊細な才覚を生かした女性部　『野ざくら舎』ん宿場料理も　見直されて人気が爆発　みやげ品の開発にも発展した。

『アオょ勇めよ　宿場はそこじゃ　あれが街道ん石だたみハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ』

馬子ん五助さんが今朝も　早ぅかる竹田に荷運びちゅうち早たち　ほれぼれするごたる　馬子歌が山肌に流るる。

『おもてなし宿場料理』は　なんとかせにゃち前々かる言いよったんじゃが　踏切りがでけんのんも　距離が長ぇ道に宿場が２つあるき　そくぅウマイグワイに結ぶこちあった。とにかく江戸期間の宿場じ　どげな料理があったんか。謎めいたもんぬ復活するにゃ　根気のいる仕事じゃが　そげんこつぅ言いよったんじゃ　前にゃ進まんしソレカチ　後戻りじゃ何の事か解らんき　行きしこやりしこになった。

地元ん材料を使うこたぁ違わんき　山芋、シイタケ、こりゃ欠かされんもん。そん頃今市じヨコイよった　行列は岡藩の『お接待じソバ』を　よばれよった。それも参考にしち女性部は『おもてなし料理』の　メニューを完成させた。山芋は年中まにあう。シイタケも保存が効く。黒米も取っちょきゃサァチュウ時にある。ソバも香り付けする野菜も　時期活用じ献立も整ぅた。関かる塩つけしち運んだアジ　こりゃ今は鮮魚じ充分まに合う　これも自信がちいた。

ドラマが人気を爆発させち　野ざくら舎んメンバーも気もそぞろ。『こりやどげーな』　味見しちゃぁ首ぅカタン向けち　『まチットドゲー』　なかなか『よかろうにならんが』　家の仕事もそこのけじ　親父もご機嫌斜め。じゃがやりかけち　こんまめするんェ　あんたでん途中じ　やめタンジャ後味が悪かろう。

思考錯誤ん繰り返しに　『こりゃドゲエナ』　大きな声が炊事場じ交錯した途端　笑顔が爆発したごたる。山芋ん落とし汁《ジネンジョイモとも言う》が　鶏肉とゴホーんだし汁に　そっと落とした山芋ダンゴ。ソバ粉だけじ作ったソバに　イリコダシんだし汁。薬味は時期によっちコトナルが　ネギ、ミョウガ、シソ、ミツバ、ショウガ、何かん素朴な付け合せ。コンニャクん刺身。黒米飯。竹の皮に乗せた関のアジ利用ん『のつはるすし』。香物《漬け物》は季節ん田舎漬け。黒米ちゅうてん炊くと　アズキ色ん目に優しい碗になる。

これじ満足した訳じゃねぇが　とにかくここまじ　漕ぎつけち振り返ると　よそでん苦労苦難ぬ乗り越えたきこす　今があるち言う。まだ宿題も多いけんど　ここまじ辿りちいち努力はもう　称賛に値するち会じゃ手褒め。それじこすいいんじ自分が自信がねえと　不安ぬ抱えたままじゃあんまり　ムゲネぇゴタル。

青年部も夏に入る前にゃ　日頃ぁ通行ん少ねぇ山ん中の街道整備に　汗を流しながら『なし俺どうが』ち　思うだろうがそん苦労があっち　やがて『ご苦労さま』ち誰かが言う。それを聞いただけでん　生きていた証が残せた　んじゃあるめーか。誰かがする宿命をした　みんなそげな思いじ世の中は　巡り合わせの人生でんある。

佐賀関ん徳応寺にある『日本人物誌』１８０７⇨１８８１》によると．勝海舟に同伴した坂本竜馬たちは　佐賀関に上陸したあと　鶴崎経由の野津原⇨今市⇨久住⇨熊本に向かった。

元治元年《１８６４》２月１７日　野津原さくら屋に一泊この宿でもおそらく　野ざくら舎の献立した　宿場料理に舌鼓を打ったのでは。関のアジをすぐ塩処理しち　野津原まで早馬じ運んだじゃろうが　野津原すしとしち　付け合せは地元ん鮎ん『塩焼き』『セゴシ刺身』『ウナギん蒲焼』も　あったことじゃろう。海と山とん境目じゃき　山海ん珍味ち言うじゃろうが　役目が大役じゃき　ソゲンコトドコロじゃなかろぅ　かんしれん。

前ん高札にゃこげなくわしい事は　何も書いちなかったち言うのん　蜜命ん旅でんあったき　そこはそれじ暗号でんあったんじゃろう。

『土産包んだ竹の皮受けりゃ人の情けが行き来する
　　ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎がスイスイ　ホイホイホイ』

野津原をでち赤坂石だたみ　青年部が汗した街道の　山の中木陰に新風を抱いた二人の　心の中は険しい思いに波うっちょったじゃろう。旅の人たちとすれ違う道中でん　ここはふっと心も休まる場所でんあったじゃろう。女性部んしもコゲナ話しゅ聞くと　遥か昔に思い馳せち　『昔も今も変わらん人ん情けが　行き来しながら世の中が　回りよるんじゃろう』　ち納得もしたごたる。

今苦労しながら『おもてなし』をする　こげな巡り会わせん人生も　考えようじゃ得じゃつたかな。顔見合わせち笑顔がなんと可愛いいことか。じゃき出来たんかもなぇ。

弾みがつくとそん進み方は早ぇ　『宿場まんじゅう』『石畳もち』　何かん石畳の足音が聞こゆる　土産物が考案されち軌道に乗りくうだき野津原宿場　今市宿場にゃそろそろ息吹きが　勢いついち苦労したこん１０年余り。心血注いじ来た報いがえーと　本物になるごたる夢ん実現。女性ん底力ん輝き。

１８６４年2月１７日に　野津原宿じ一泊した時ぃ　旨かった宿場料理ん数々が　素朴なだけにいつまでん心に　残っちおるんも人ん情けが入っちょるきか。

『宿場料理に心を魅かれ　雨でありたい人ごころ
　ハ　七瀬のせせらぎ　サクラもチラホラ　ホイホイホイ』

帰りの道は４月９日の早着になった。伊塚峠かるん眺望ん中ぇ野津原宿場町が　手に届くごたるんもホットした証。こいさん食事がナニンカニン楽しみ。旅する人の責任も果たした時ん　偽りんねぇ心境かん知れん。赤坂石だたみはヒトクダリ。
★　宿場料理にゃ気くばり心くばりが　チリバメチャル。

山芋ツキアゲ。カマスカほぐしにニンニク、ノビル味噌。胡麻豆腐。鮎んユズ酢あえ。卵と三つ葉吸い物。大根の粕漬。ごぼう、しいたけ、里芋ん煮しめ。ヤセエマ。餅キビ入り飯。フツ餅。が行儀ゆう並べられちょつた。

関東ん春んごたるち日記にあったが　季節ん温きい以上に心ん　人情ん温もりが嬉しかったんか知れん。

『あん娘年頃姉さんかぶり　いつか覚えた馬子歌を
　ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎がスイスイ　ホイホイホイ』

いつでん女性ん底力があっちこす　里は栄えもするごたる。

※※※　方言説明　※※※

５７Ｐ⇨供出…強制的に米を買い上げる。苦役…奉仕作業に。ムゲネェ…可愛相。ひくう…低く。シャント…しっかりと。身かしめ…自分の品位。だけん…だけの。銃後…戦時中の内地の事。国債…強制的に買わされる。いらんき…不要。

５８Ｐ⇨コッポリ…旨く。疎開しち…無理やりに他所で生活。統制配給…決まった方法で分ける。遺骨が帰る…家族の遺骨が帰国。松根堀…松から油を取るため。炭焼き…代用燃料に。トーキビ…どもろこし。コカス…小麦のすりかす。してやったき…変わってしてあげた。

５９Ｐ⇨じゃきこす…ですから。兵たち…強靱な人たち。

６０Ｐ⇨でんあり…でもあり。ソレカチ…だからといって。ゆきしこやりしこ…出来る限りに。今市…他の領地であったので☞岡領地。サァチュウトキ…いざと言う時。

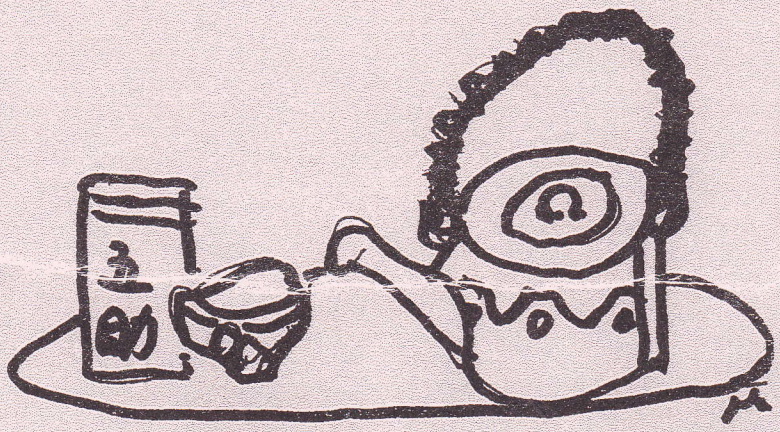
６１Ｐ…どげーな…どうですか。スタ向け…かしげて。まチットドゲー…も少しどぅ。ちいた…着いた。

６２Ｐ…ソゲンコト…そんな事を。高札場…役所の掲示板で野津原の場合は８掛けと言う大きさだった。周知板。

６３Ｐ…えーと…やっと。あるんも…あるのも。雨でありたい…雨なら休めるのに。こいさ…今晩。ナニンカニン…予想以上に。

※　商工会女性部の『野ざくら舎』の　メンバーの底力は繊細で　知的才能も加味した挑戦だった。指導する人たちと心が一致した　効果だと思われます。青年部も汗と害虫悩みながら　苦難の取り組みだったが　女性部の逞しいあり方に刺激され　人間哲学の片鱗にも触れた思い。野ざくら舎の残した故郷振興は　ますます広がると信じている。史跡を辿って歩く時そこには　先人の囁きが聞かれるよう。

民話伝承



民話、伝承。『ご褒美の花嫁衣装』

ここは山深い里ん貧しい農家ん庭先　疲れ果てたごたる旅ん物貰いん人。空腹ぅこらえち『さ湯』を　所望したいち言う。留守番の娘も昼時前じゃき　何かお接待したいが　貧しい農家にしちみりゃそれも　出来ない心苦しさじゃが　さ湯ん準備は出来た。

そん動作が両手を合わせち　祈る思いん所作はきっと空腹ぅさげてん　旅じゃろう。『お安い事です　お疲れでしょうから　おかけください　すぐ準備します』　娘は奥に入ると旅の人は甘えち腰をおろした。娘にしてみれば昼の食べ物を　差し上げたい……でも家族の分だけしかない　今の生活ん苦しさ。

せめて『さ湯だけでも』と　準備しておると父親が　帰って来た。『何かご用で』『これはこれは　軒先をお邪魔しています　娘さんに　さ湯を所望しまして』『そうでしたか　すぐ持って来ます……おみつ…』『はーい　ただいま』。奥から娘がさ湯を準備しち　運んじ来た。

父親とすれ違う時　何か差し上げたいが　それが出来ないと　言葉に出せない胸の内。父親も悔しさがこみあげて来る。『旅の方が　さ湯を所望されましたき』『そうか』

親子は顔見合わせち　『雑炊の一杯でん差し上げたい』と心が通じ合うんか娘が　父親に耳打ちしち　近所ん友達ん家に無理な　お願いに駆け出すこちなった。『話しよって　すぐ帰っちくるわ』『そうか　ほんな頼むど』　間を取り持つ父親が『さ湯』を盆に乗せち　『お疲れになったでしょう』

『ちょつと待っちょくれ　娘が今なにか準備しよるき』

『そんなに迷惑かけては　申し訳ない事です』『そげな心配はいりません　少し休んでゆっくりして　旅も大変でしょう』『恥ずかしい事です　人の世話になりながら　生きている私など人の　厄介者です』『とんでもないみんなお互いが　支えあってこそ　生きられるのです　それに貴方は今は旅の人ですが　皆んなの為になっていた　そんな時もあったのです　心配は無用です。

『そんなに言ってくださると　生きがいにもなります。ここに寄せてもらったのも　なにかの巡り合わせでしょう　ありがたい事です』

旅人は両手を合わせて心から　感謝していました。母親も少し遅れて帰ってきましたが　大事そうに抱えているんは　娘と途中じ打合せしち　隣んしに無理強いした物を。父親が目ざとく見ながら　中身はなにか少し不安にもなった。『もし何もなかったんか』　そげな動きに旅の人も　予感がするのん申し訳ない　気持ちが交差しちょつた。

『オカチャン』　そん声は何とか準備の出来た声　ほっとする親たちの動きが笑顔に変わった。娘が駆け込んだ家じ　いい按配に火焼き餅づくり『こげな訳じ』　『いいで早ぅ持っち帰りよ　心配いらんき』『おおきに』　日頃ん付き合いがこげな時にゃ　まさに天の助けにもなる。

『これ食べちもろうて』『そぅじゃなぁ　よかったよかったな』　親子も嬉しかったが　友だちん心くばりが　どんくれ嬉しかったか。巡り会わせた人に接待する　嬉しさもあった。
盆に乗せて出された『火焼き餅』　『田舎餅ですが　一つどうどオツマミください　お口にあうかどうか』　吃驚した旅の人の目には　熱いものがにじみ出ておったごたる。

『お茶入れちくるわ』『りゃーゆう気がきくなぁ』『そりゃオカチャンの子じゃこと』　親子はどっと笑うもんじゃき旅人も　タマガッチシモゥタ。『何の話でしょう』『あらぁすみませんな　いえヤウチじな　タヘラク話を言いよったんです』　『娘があんまり気が効くち　褒めたら　それは母親の子じゃきち　親にそれを譲ったからです』

聞いていてそん人も　『本当に羨ましいお話です　何と言っても親がよければ　子はそれを見て育つものです』『ほらな』　娘がスカサンジすぐ　言うたもんじゃき　又ドットワライ声が渦巻いた。火焼き餅を口にした　旅の人も餅の美味しさは勿論じゃが　微笑ましい家族の愛情が　それにもまして嬉しかった。

『申し訳もないのですが　皆そんの食事にまで　私がせりこんで』『そげな心配せんじょくれ　どうか元気に旅を続けち　きっと又いい事もありますから　病気せんごつしち目的を叶えて　おくれな』『有り難うございますご恩は生涯忘れません　今日はお礼も出来ませんが　きっといつかご恩に報いたいと　心に書留ました　ありがとうございました』

母親が気をきかせて包んだ　残りの火焼き餅を娘が差し出すと　『貴女は本当に優しい娘さんですね　きっと幸せな将来がまっています　いつまでも　ご両親を大事にしてあげてくださいね。それからこれ　お古ですがよかったら　野仕事にでも使ってください』　差し出された手拭いを　受け取った娘は　押し頂くと全身がぽっと　温かくなるような感じがしました。

引き止めてもとその人に　『気をつけて無理をなさらないよう。こちらに来た時は　お立ち寄りください』と。

昼がさがったが親子は　朝の残り雑炊を分けて　隣りんババさんの心尽くしん『火焼き餅』も　ゴッソンナリマス。束ん間の出来ごとじゃつたが　思いでん余韻がナシカいつまでん　残ったぬ親も子も　いつまでん気持ちに仄かな夢の　花を咲かせたような日でんあった。

それから５年ほど過ぎた　秋の季節花が咲き乱れる頃あん娘も　隣村にアルクコチなった。愛想いい器量よしじ評判もいいき　風ん便りにそげな話は広がるもん。あん日世話になった旅の人　実は修行に行く途中の人。京に上る日が近くなっち『お接待のお礼がそのまま』と　遥々とこの村を尋ねち来ちょつた。

『あの節は心のこもったお接待』と　恭しくお礼を述べて『娘さんに一言お礼とお祝を』と。見違えたごたる旅人ん立派な姿。無事修行もすんで京に帰る　途中ながらお礼にと立ち寄ったもん。お祝の包みを差し出すと　『どうか幸せになって長い人生を　有意義にお過し念じています』と　喜びのご挨拶に親も子も　驚きの眼に嬉しい涙。

開けて吃驚花嫁姿にふさわしい　京の花嫁道中着。真心の接待が思わぬ場面の　ご褒美になったのも　優しい心くばりの人間社会で撒いた種が　花を咲かせたきじゃろう。人は見かけにゃよらんもん　相手ん苦労にゃ支えもする人に世話になる事も多い人生　自分が偉いち思ってん人にゃ　そうは写らんもん。偉さ強さは人が決めるもんじ自惚れ評価は価値もねぇ。

あん娘さんも
今頃ぁもう赤ちゃんオンボ　おかちゃんぶりもユウナッタカ。お坊様も人の道を説いち　あん日の話もしよるかん。

民話、伝承物語　『よこどう…横道』

湛水ぅ過ぎち櫨山まじは　西に眺めんいい横道《ヨコドウ》は　アンゲコンゲ曲がっち　自然石ん道が続いちょる。ところところにゃ鉄平石もあるが　地層ん変化がそうさせたんか　ん知れん。そん途中にユウシタモンじ　数箇所清水が岩ん割れ目かる　流れ出よるんも有難ぇこと。

カンカラん葉っぱをウマイコト曲げち　巧みに水を貯むるとゴクン　喉に流しこむ様は　見ちょつてん『うまかろう』ち誘われるるんが人情じゃろう。喉を唄うち通るち聞くと　皆んナン前じゃ真似出来んでん　人ん通らんときどまチョイト真似しち見ろうかちなる。

暑さに木陰じ吹く風が汗を　ソックリソンママ取っちくるる時ぃ　イッショに持っち行っちくるるな　極楽極楽でんある。水も誠ち美しいもんじゃき　なおさらウメーン　じゃろうが。『まぁ一服しゅうか』　一本松ん影ん石ぃ腰かけち　タバコ吹かせよると　上がっち来たしたちもて　立ち止まっち一服する。『暑かったじゃろう　コカー涼しいで』『おおきに暑い時ぁこかぁ　天国じゃなえ　眺めもいいし』『どこまじ行くんな』『久住まじ帰りよるんで』『そうな　ホンナあと　ちっとじゃな』『あんたどき行くんな』『わしゃ　野津原まじジャケンド儲け仕事なら　府内でん行きヨスルで』

仕事話しになると　チョイト目の色が変わっち　腰前も変ルき不思議なもんじゃ。仕事じゃねえけんど　『変わった話も聞きてぇなえ』『それなら五助さんが　ヤンガチ帰っちくるき　ここじ聞くこちすりゃもぅ　面白い話でん泣きてぇ話しでん』『泣くな困るが面白いのやら　尾も黒いんヤラナラいいなぁ』『ほら見よそぅ　噂をすればタァユウ　言うたもんじゃ』

『何かオトロシュ賑やけぇな』　五助さんが帰り荷もねぇごたるき　セキもせんのじゃろう　いつもヨコウ場所に来ると馬が止まった。『待っちょつたんで　面白い話しゆ聞こかち』『またアゲンコツ言う』　髭面ぅナデアグルトと　馬を側ん松の木にツナイじ話ん輪に入った。・

『そん前にひと節なぇ　皆んないいじゃろぅ』　覚悟はしちょつたが仕方ねぇなぁ　そげな素振りぅすると　唄いでぇた。『水ん流れが涙じ曇る　工藤三助忍ばれち　ハ　七瀬の
せせらぎ　小鮎がスイ　スイ　ホイ　ホイ　ホイ』

『いつ聞いてん惚れ惚れするなぁ』『木戸銭ないらんで』『話しゅう聞かせちくんなぁ』『じゃなぁ…蚕とタンノンバックン　ち言うぬしゅうな　お前どうはセワシュはねえん帰りヨセン割木じ　ウッタタカルルんじゃなかろうな』　話ん前狂言なもう玄人はだし。

もう１０年以上も蚕ぅ飼いよったんと　でんユウ出来たこたぁ全く無かったき　セツゥジコタエン。上がるチット前になるとドッカラトン　晩にバツクンが来ち　パクパク食いかけたもんなら　ヒヨゥシネェ１００匹ぐれは　時の間に食うちしまう。何してんハガイイキ　来たタンビ捕まえちゃ下ん道ぃ　ホタリステヨッタけんど　それでん来るシマツ。

一緒んバックンカ確かめち見ろうち　バックンの足にヒムゥ縛りつけち　向ん山にホタリウッセタ。これじもう世話ぁなかろう　呑気構えちょつたら４日ぶり　又やっち来ち食いよるじゃねぇな。見りゃヒムーひこじっちょる。たまがっちしもぅたし　反対にムゲノゥモなった。『済まんじゃつたのぅ』　断り言うとヒムー取っちゃつた。けろっとしたバックン　じっと見らるるとムゲノーモナッタ。

『ゆう覚えちょけや　又来ちコゲンワヤクすりゃ　こんだチシコロス』ち　言うちゃつた。バックンも性があるんか知らんが　それかるはコンごつなった。今んうちーハリクウジ蚕飼わにゃ。

『七瀬七谷朝日を受けち　アオょ勇めよ馬子の唄
ハ　七瀬の里には　朝日がキラキラ　ホイホイホイ』

『そげん事もあるなえ　百姓はいつも賭けじゃきなぇ』　でん『精だしゃ凍る間もねぇ水車』　とん言うき　張りくうじ働きよりゃ　いつかお天トゥ様はちゃんと　見ちょつちくれよるきぃな』『こげな話もあるが　こりゃ又こん次しゅうなぇ』そげー言わるりゃイチベ　聞きとうなるんが人情。五助さんも横目じ馬を見ると　『話しゃいいわ　今日はせきもせんき』一声いなないたき　『いいじゃねぇな　出し惜しみしなんな』『それとん　本当はもうネーンジャロゥ』　ココマジ皮肉じゃねぇが　期待されちょると　風も涼しい人数もいい按配　勿体ねぇ巡り合わせん　ヨコドウ座席じゃつた。

得しち失う……毎年ちっとんずつ畦ぅ　削っち自分方ん田を５寸ほず広めち　澄まし顔じ働きよった。隣んしも『マァイイか　そんうち損ぬするじゃろう』ち　まめしちょつた。１０年もすりゃもう５尺　誰が見てん競り込んだち　聞かせちくるるしもあったがマメーしちょつた。

ある年んこと滅多に病気せん　そんしが風邪じ寝こんじ田仕事ぅ　よそんしに頼んでシヨッタ。殆ど済んで畦際をスキカヤスごちなった。頼まれたそんしも　念入りにせにゃち　畦元はキチンと　馬を進めち行くうち　石に当たったんか鋤先が折れち　タマガッタ拍子に馬が暴れでーた。

そんはずじゃ元の堺石があったぬ　深く起こしたけん……

馬ん暴れでーたな近所じ　仕事ぅしよったしがトラマエち何とか　大けな事故にゃならんが　怪我したり鋤ども折れちひとめん。近所んシドウガ集まっち　ゆう見たら昔ん堺石が並ぅじょる。そしち今ん畦は５尺ぐれ　へネチ作っちゃる。『こん石ぁ元ん堺石じゃねぇ』『そうじゃわな　じゃきそくぅ見事掘りあげたんじゃ　ロクナコターねえわな。

評判なあっちゅまに広まっち　風邪じ寝ちょつたしも決まりが　悪ぅなったんかコソコソ　仲裁を頼んじ断りぅ言う有様。『これが堺石じゃな　間違いねぇな』『もっともじ』仲裁かる詫び状を貰ぅたき　まぁ元通りする事じ納まった。それにしてん１０年もなぇ　こげなこたぁままあるが　それに甘えたり知らんふりしてん　どこかじ損をするんが　世の中ん掟でんあろう。馬も駄使いも怪我　鋤はパーになる。人ん信用はもう当分な戻りこは　ねえじゃろうきタヘラクも効き目がのうなったごたる。

こげな話しゅ聞くとチョイト　皆んなシュンとなったが『あいつんヤリソウナ事じゃ』ち　予測はもう立てちょつたごたるんが　世の中ん倫理でんあろう。『そこまじしち欲ぅはっちや　行く時ぁ裸じ行くにのや』『そうど信用んノウナッタ　提灯な明りいごたんてん　足元もシカト見えんのど』

民話、伝承にゃ人に言えん　悲しゆぅ切ないもんが多い。じゃが誰かが受け継いじ　知らせち真似んごつ教ゆるんも世の中ん道理でんある。文字も読めんごたる　時代でん心ん文字は何となく解るき　不思議でんあり　じゃき誤魔化しん罪は重い。シイタケ泥棒ん罪は７倍ち言う　そんくれぇ苦を見ち作ったきか。そげまじしち儲けたち　思うてんゆう考えち見りゃ　それ以上ん損ぬしちょる。コチモナリャなえ。『若い時ん苦労は買うちでんしよ』　伊達じゃねえ教訓』

※※※　方言説明　※※※

６５Ｐ⇨さ湯…お湯。さげてん…辛抱して。こちなった…頼り。ほんな…それなら。しよるき…してます。

６６Ｐ⇨なかったんか…ないのか。オカチャン…母親。火焼き餅…小麦粉で作り焼いた餅。オツマミ…勧める。

６７Ｐ⇨りゃー…それは。タヘラク…自惚れ。せらな…でしょう。スカサンジ…間をおかず。せりくうだ…入れてしまう。

６８Ｐ⇨ゴッソンナリマス…ご馳走になります。ナシカ…なでか。アルクコチ…嫁入り。来ちょつた…来ていた。じゃろぅ…でしょう。よらんもん…別である。オンボ…背負われる。ユウナッタ…よくなった。

６９Ｐ⇨アンゲコンゲ…あっちこっち。ユウシタモン…よくしたもの。カンカラ葉…サルトリイバラの葉。唄ぅち…調子よく。ウメーン…美味しい。コカー…ここは。ジャケンシド…ですが。ヤンガチ…やがて。ヤラナラ…黒いものまで。

７０Ｐ⇨オトロシュ…大変に。ナデアグルト…下から上に撫ぜ。ツナイジ…ついでに。ウッタタカルル…ひどく叩く。セツジコタエン…悲しくて。ハガイイキ…悔しくて。バックン…蛙。ヒムー…紐を。

７１Ｐ⇨チシコロス…ひどい目に合わせて殺す。天トゥ様…太陽。イチベ…なおさら。ネーンジャロウ…ないでしょう。ココマジ…ここまで。マメー…気ままに。シヨッタ…していた。スキカヤス…耕起する。キチント…正確に。

７２Ｐ⇨トラマエタ…捕まえた。シドウガ…人たちが。ヘネチ…曲がって。ロクナコタァ…人並みでない。タヘラク…自惚れ。ヤリソウナ…しでかす。シカト…なかなか。そげまじ…そんなにまで。コチモナリャ…そんなことに。

『朝日を待つ　農家ん人たち』

『こいさ地主さんが　集まっちょくれと』『そうかヤッパコイサご馳走しち　くるるんか　済まんことじゃのや』　もう心は浮き浮き　これじ今年も節期ん　事終わりじゃろう。毎年ん終わりに地主さんが　小作しちょるしたちゅ　招いち一年間ゆぅ田畑を作っちくれた　お礼んお招きでんあった。

小作人ち言や地主が『小作』を取っち　作らせち貰うんが理屈じゃが　随分昔に地主ん主が大病を患った。どうしてん治らんきある参り所に　祈願しちもろうた。『あんまり小作人の取扱いが』ち　言われた時に自分にも心当たりが。取りあぐる《小作料を貰うは当然だが》だけじ　作っちくるる心に感謝したか。作る人がおるからこす　田畑も荒れずに収穫が出来る。そこに人間としてん管理に　感謝ん気持ちが抜けちゃおらんか。と論されたそうな。よくよく考えちみるとまさしくそん通りじある。

土地は自分の物にゃ相違ねぇが　もともとは神仏か自然が作ったもん。それを今は物持ちじゃき　便宜上名義じ管理しちょるだけん話。とナリャ作る人こす自分で　収穫した分かる　生活用具や日当を引いた残りが　本当ん使用料デンある訳。それが『小作料ち決められち』　納める事の不合理さもあった。

もしかすりゃもう息が絶ゆるかん　そん刹那に本当ん人間の生き方を　悟らせられたち思い当たったごたる。『わしの考え方は幼稚すぎちょる　親代々ん因習を受け継ぎ　そん上座るんが当たり前ち思う　心ん貧しさは悔い改めにゃ　こん先まだまだ迷い苦しむじゃろう。ハット光明が指したようなと　今までん苦痛な病気が　払拭された気分になった。

ソレカラチいうもんな　小作人と向き合うような　仲になっち毎年作ってもらう　作らせてもらう　そげな人としてん情愛があるき　毎年ん恒例行事んごたる　『おもてなし無礼講』ん夜にもなっちょつた。ゆう出来た年にゃ『こん分は』ち　貯くわえに預かる。不作ん年にゃチット負けちもくれた。

じゃき熱心に作るき『出来もいい』　手入れもゆうするき草もガイトは出来ん繰り返しが　全てよしに結びつきよる。畦ん分やら脇を使う出来は　そんまま自分がんにする。それも許されちょるき　田畑ん回りもソコラジュウが　もう美しいなんのゾウキンガケしたごたる。

『皆んな来ちくれたんな　今年もおおきに　お陰じゆう出来たち　他所んしたちが羨ましがるき　私も鼻が高ぅじ嬉しい』挨拶も簡単じすぐ　慰労ん宴になっち　コイサは無礼講。好きなしゃ真剣飲むのも楽しみ　食べるのん珍しい物が　並うじ目を楽しませちくるる。

『小作料ん滞りもねぇき　もうあとは皆さんの元気だけが何よりん頼り』　チット顔が赤ぅなった　地主さんも機嫌のいい年の暮れ。ヨバレタしたちも気持ちが　和み帰りにゃヤウチに　土産まじ心くばりしちくるるに　家族もこん時ばっかりゃ　遅うまじ寝らんじ待っちょる。

適当な時間になると長老が　『あんまり遅ぅなってん　地主さんも忙しかろうき　ここらへんじお開きさせち貰うかな』鶴の一声んごつ『そうじゃなぇ』『気のぞくな事じゃが』　それぞれ調子ゆう　お礼ん挨拶いいながら帰り支度。と　女中さんが上がり口に帰りん　『土産』ん包みを並べちゃつた。もう気持ちゃ家族が待つ　わが家ん素朴な年末ん　暮らしに華を添ちくくるごたる　お土産ん数々が渡さるる。

以前は朝まじオッチ飲み食い　じゃがそれも改革しち家じ　待つ家族とん楽しい夕食　語らいがよかろうになっち早めに　引き上げさせちもらう甘え。それも解ってん話じ『太陽を待つ』そん行事も　家で家族が一緒にするんがいぎもあるじ変わっち行く　新しい家庭生活でんある。

提灯の灯がチラリ見えた　『帰っちきよるど』『どきえありゃフント』　辻んワカサレは賑やかな事。貰った土産ぅダイジコウジ抱え　千鳥足もありゃ凧足もある。隣同志もありゃ一軒家もあるが　元を尋ねりゃ皆一緒。月も美しい年の暮れ　今年もどうやら無事に終わるごたる。

家族が開いた土産の包み　そこにゃ餅、正月飾り、子どもの喜ぶ正月遊びおもちゃ。年寄りにゃ真綿ん肩掛けまじ　至れり尽せりんご褒美じゃつた。嬉しい夜は更けち夢もヤツパ　いい夢じゃろうなぁ。これも人の心が相手に届くごつ　尽くすこちよっち咲いち　実ったからじゃろう。

★★★　方言説明　★★★

７４Ｐ⇨こいさ…今晩。どうしてん…どうしても。ナリャすれば。デン…でも。

７５Ｐ⇨ソレカラチ…それからは。こん分は…備蓄に。ソコラジュウ…回り一面。ヤウチ…家族。

７６Ｐ⇨オッチ…いて。太陽を待つ…太陽に感謝する祭りの意味。『お日待ち祭り』で座前の家に集まり神事による祭典。太陽の上る時に皆んなで拝み感謝する農村の風習。ワカサレ…分岐点の辻の道。

ちょつと一服　『こげな話　あんな話題』

★　厄年に帯を買う　娘１９は厄年と言って　そろそろ年頃ともあって親も　奮発したいのが人情。でんキンチャクとん相談もある。厄よけとなるとソンママ知らぬふりじゃ可愛相。帯が無理ならせめても腰紐でも。とりあえずキチンとした　身じまいはするのが親ん務め。

『ほら厄よけん腰紐ど』　親から言われて予期せん品物ぴんとコンジャツタンカ　『そうな　おおきに』　怪訝なままについ忙しいき　そんまま押しやっち影にナオシタ。前もって解っちょりゃ心待ちした　でんウブな娘にしちみりゃ　パットせん小物じゃき尚更　気にもせんじゃつたんじゃろう。

そん時じゃつた　軒端に立ち寄った旅ん人が　困った様子じ履いちょつた草鞋を　脱いじツクロウンカ　手不調法に始めちょつた。娘は『どうしたんですか』　『済みません軒端にお邪魔して　草履ん鼻緒が切れち　ちょつとご免なさいここじ　ツクロワセチください』

見ていた娘が『切れたんなら　代わりん紐をあげましょうちょつと待って』　見回したが　『そぅじゃ』と　さつき父親がくれた腰紐んこと。箱をこじ開けち無造作に　中から引きだすとピリピリと　引き裂いた。それを見ていた旅ん人は　吃驚『まぁそれは　腰紐でしょう　勿体ない　新しいのじゃありませんか』『いいのよ　役立つなら使ってください』もう　感激したその人は　どうしたらよいのか　思案していますが　もう引き裂いた腰紐。それに娘の心情も役立つならと　差し出した腰紐です。このまま『そうですか』と　元には戻さない　気持ちには変わりないでしょう。

無事に草履の修復が出来た　この人は『今日はこのままに失礼しますが　後日お礼にお伺い申します』　丁寧にお礼を言うと先を急いだ。目的地でこの話をしたら　たぶんあの娘だろうと　いろんな噂話が花を咲かせ　『きっと厄よけの腰紐だったのか』と　女の感として察しがつ.

これも『私が厄よけしてもらったのか　知れない』と　喜んでその時は帰りつきました。家で話すと『それはよい人に巡り会わせたものだ』と　家でもよろこび　早速お礼と代わりの腰紐と別に　お礼の気持ちもこめて　花嫁の時に利用して欲しいと　添え書きした『長襦袢』を　合わせて送りました。

なんとそのお礼の 長襦袢 が着いた日　めでたい話の申し込みがあったと　後で聞いて『よい意味の厄よけ』になり嬉しいと　巡り会った幸せも　かみ締めました。親たちも娘の咄嗟の機転が　思いもよらぬ好転になって　『お前はよくよく運がいいのぅ』ち　笑顔が満開しました。

『トッタンがくれたき　役立ったんじゃこと』『お前　もぅ　そげまじ言わるりゃ顔が赤ぅなるのぅ』　『赤いんが元気ゆうじ　ゆう似合うなぁ』『そうか』　家族も嬉しい日に結びちーた娘ん　機転に『こりゃ幸先がいいかんのや』　になったそうな。

たとえ腰紐じあってん　親ん気持ちが込められちょりゃ厄も避けちくるるんじゃろう。それに相手んしも　困っちょった時だけに嬉しさも　多かったんじゃろう。『のや　やっぱ気を効かせちゃりゃのう』　父親も親らしい事は　出来んじゃつたが何か特別　嬉しい厄よけになったごたる。

『地から生まれた宇曾山』

その昔ん地震の後じ　山揺れがあったかち思うと　突然ニョキニョキと地面がせり上がり　アリュミヨありゅ見ょち　見るまに丘が出けた。周りんしたちゃ　不思議ん有様ぇタマガッタがそれが　毎日んごつセリアガッチ　1月ぐれんなかめ姿んいい山が出来あがった。

ウドウムドウしよるうち　出来たもんじゃき　誰かが言うと『ウドウさんか』ち　言うもんじゃき　宇曾山になったんと。そん先端な塚野かる　吉熊谷まじ続いち　台地も出来た。隆起した砂礫岩の層があっち　特色ん砂礫石がこん　二つん谷ん間だけにあるのん　そん説もどうやら頷けるる。

盛り上がった山ん下ん土は　そこだけ穴があいちょるんじゃアルメーナェち　心配するシモアルガ　心配ねぇんと。そこに入った水は温められち　別府に出ちょるんと。こげなふうじ谷ん塚野でん吉熊でん　磨けたような石が　あるのん『じゃな』ち　納得が出来そうじゃが。

『なし別府に出るんかぇ』『お前ぁ知らんのか　鶴見山がどぅでん宇曾山ぬ　嫁に欲しいち　話があったんと』『そげん話聞いた事があるのぉ』　『じゃけんどドシテン悪いち　こちなったもんじゃき　あんまりムゲネェキ　そん代わり入湯に行く時　お土産持っち行くきな』ち　上品に断わったんと。『へーそれがどげしたん』

悔し涙かそれとん　せめて地の中じ湧いた温泉ぬ　コソット送りよるんか　別府にゃ温泉が今でんあるに　宇曾山にゃ温泉出らんのと』『そげんことか　ドウリじ塚野にゃ　冷泉な出るにのや』

町づくりん人たち

城下町かね宿場町に発展した　野津原にゃ明治になっち急に人が　集まっち来た。そん中にゃ大工、鍛冶屋、下駄屋、染物屋、なんか　多種多様になっち来た。江戸期かる続いた食生活に　結びちいた店が宿屋と共に　広がり生活にも事欠かんごつなり　府内に出るにしてん　客馬車も走りよった。

歩いち三里はカタ昼仕事じ　こげな便利んいい所じゃき　店が並び他所かる入った人たちが　競りオウチ栄えたんじゃろう。人が住み着き神仏とん関わり　そげな広まりによっち　医者も定着　街づくりにゃ更に　寺小屋、勉学所、やんがち明治になっち　小学校も開設するこちぃなった。

江戸期肥後藩時代ん郷士ん力は　以来強靭な人造りから故郷発展に　かけた情熱は計り知れんもんも　あったかるこそ今ん野津原が　あるちも思われる。任地ん交替に惚れこんだ野津原からん　離任を断り土着した多くん　人たちん繊細博学ん才覚が　根強く残され育てられた　郷土愛の根源にもなっちょる。

かっては府内ん小京都とん　褒め讃えられた野津原は　戦時中にも供出完遂の責任を。頑張ったと語る先人たちの苦労は　並大抵じゃなかったはず。それにも甘んじた故郷堅持の　痛ましい成果は時として　犠牲にもなったのだろうが　それも過去の夢物語と格納したようじゃ。

農業大学の夢　大分バス修理工場誘致、電鉄の敷設問題などんロマンも雲隠れした　県都に至近距離の野津原。硬軟入れ混じった情報も。新聞印刷発行も戦時中に　疎開して継続　大分まで自転車で運ぶ軽業操業だった。それによる４万号も　この年《２０１０年７月２０日》の壮挙。

ちょいと　ションベンカグ貸して』『せんちんな　こっちで』奥に行うかち　思いよったら　上品な老婆が　『お不浄でしたら　お上がりください』　『あら　済まんですな』　『いいえ　宅はカミチョウズ場ですき』　他所かる来た人ぁ　『トイレん事じゃねぇの』　『違うで　便所じやこと』　さて　あん場所も『いろいろ　呼び方も　アルモンジャナァ』

時代が急展開しち　明治頃かる戦前まじ　おなじ『お手洗い』でん　こげな呼び方も　ありよった。

同じ野津原ん昭和２１年頃　町筋商店街をの覗いち見た。１９４６年じゃつたき　昔ん面影も残っちょつた。戦後すぐじゃつたこちなるが　だっと店屋が　こげなふうにある。

安宿、機械じ作るウドン屋、ブリキ屋、馬車鍛冶、散髪屋、提灯屋、魚屋、豆腐屋、酒屋、綿打ち屋、医院、歯科医院、宿屋、下駄屋、駄菓子屋、傘屋、新聞屋、学校、幼稚園、飲食店、バス車庫、醤油屋、たばこ屋、薬屋、よろず屋、小物屋、肉屋、。かじ屋、桶屋、蹄鉄屋、種物屋、雑貨屋、油屋、針灸院、自転車屋、コンニャク屋、ラジオ屋、大工職、左官職、馬車運送、本屋、郵便局、こげな店がズラリット　並んじょつち　おおかたん物ぁ整いよった。

それが昭和５０年頃になったら《１９７５》　これかる消えた.もんな　機械打ちウドン屋、ブリキ屋、下駄屋、傘屋、醤油屋、なんかが　のうなった。じゃが増えたんもあっち　写真屋、ブロック製造工場、回転焼き屋、パチンコ店、パン屋、薪炭屋、ガソリンスタンド、デンキ店、ミニスーパー店、診療所、小物店、美容院、電子部品工場、料亭、食堂、喫茶店。こげな　ふうに入れ変わったんも　時代ん移り変わりじゃろう。

銀行代理店、米屋、建築業、自動車修理工場、バイク店、保育所、茶屋、理容院、クリニング店、野菜店、牛乳店、ガス屋、寿司屋……こげな様変わりん中、都市にゃ一極集中んムードが広がり　若者の流出が目だって　多くなっち行く。

ちょいと中央ん動きを見ると　こん年にゃ新幹線が岡山かる博多まじが開通。東京ましつながった。別府じ第１回極東南太平洋身障者スポーツ大会が開催。杵原ん後藤家住宅が　国指定重要文化財に指定された。翌年に野津原保育所、しあわせの丘んオープンもあった。

野津原にゃ水に関わる謎が多い。権現に流れち来る水路があるが　そん上線は山懐ぅまこち　巧みにくり抜いち出ちょるが　それこす明かり窓がソッココに　ある程度じアタァ全くんごつ　ヌキんじょうじ流れよる。そりぃ誰がいつ掘ったんか　カイモク解らんそうな。人間がエート腰ぅがかめち潜る　そんくれしかねぇコンメー穴。ゆうまぁ掘ったもんじゃち　今でん謎になっちょるごたる。

野野台は江戸期ん『狼煙台』ん　あった場所じ当時は役人も　１６人が常駐しち戸数も　多かったそうな。それにしてん飲み水が沸きでち　皆んなん生活まじ賄いよった。大きな水溜まり井もあり　残り水は水田まじ潤いよった。大けな山がある訳でんねえに　こげな水がどこかる来たか水脈は　領主ん加藤清正公ん　先見の目があったきかな。神社、寺院、役所、狼煙台、眺望ん効く高台ん暮らしにゃ　大けな夢とロマンも咲いた事じゃろう。

今市もあん高ぇ場所に水あり　醸造酒屋もあったらしい。

“““ 方言説明 “““

７７Ｐ⇨きキンチャクトン…財布とも。コンジャツタンカ…解らないまま。パット…気に止めず。ツクロワセチ…修理して。

７８Ｐ⇨トッタン…父親。そげまじ…そんなにまでも。

７９Ｐ⇨アリュミヨ…そら見なさい。ウドウムドウ…大変な様子で。アルメーナェ…ないでしょうね。シモアルガ…する人も。じゃな…なるほど。ドシテン…どうしても。コソット…ないしょで。

８０Ｐ⇨カタ昼…午前か午後の時間。やんがち…やがて。郷士…故郷でも力量指導力などに長けている人。電鉄敷設…電車の誘致。

８１Ｐ⇨ションベンタゴ…トイレ。カミチョウズバ…家の中に付属しているトイレ。ノウナッチ…なくなって。

８２Ｐ⇨保育所…平成２３年から『子ども園』に。ソッココ…ところどころ。ヌキ…トンネル。

五助さんの頓知と物知りにゃ　右に出るしゃオルメーち言うと　『そうで　そん代わりぃ左出るしゃアルモンジャ。五助さんがなし　そげー人気がゆうじ　物知りち思うかえ』『そりゃお前　馬子じゃきドコデンここでん　行ったり来たりするきがいと人に出会うじゃろう。そうすりゃ話しゅう聞く　見るもんじゃ自然と物知りなるんじゃ。

『そりしてん　あん年じゆうなえ』『やっな幾つち思うんかゃ』『６０は過げたんかな』『ばこ言うたもんじゃ　もう９０になるんど』『そりゃフントな』『ちった掛け目があるがの』『じゃろう　ソゲーハならんじゃろう』『中ぅとっち７５はどげーな』『何か　せり市んごたるのぅ』　五助さんなニャリ。

『そりーの物事ぃクヨクヨせん。気にセンジ若者ぅ見る』『え　若者ぬ見る　なしじゃろうか』『ツマリャの　若い人ん動き　考えをいつも見ち　そりゅう手本にもしよる』『ふぅん』『あ　そうじゃも一つ　肝心なこつ　若いもんでん特に女んなを見る』『じゃろうそう　ヤリソウナ』『お前どう勘違いすんなや　色気もあろうが　女を見ることじ振る舞い　かる身嗜みまじが　汲み取れるるきの』『ははぁ　やっぱ目の付けどころが　ちがうのぅ』　『じゃろう　やんならすぐ尻ん方を見るんじゃねぇ』

こげな考エジ出会ったしを　見る　話し方もゆう聞く自分な平口でん聞いちょくと　相手によっちゃ話し方も　違うきのぅ。それが若がえりん秘訣じ　おまけに心が豊かじゃき皆んなに信用されち　それが人気ん元かん知れのぅ。五助さんじっと聞きよったが　図星しゅ刺されたごたる。苦笑いしよった。

『出針ゃ禁物』ちゅうの　知っちょるか』『何な　そん出針た』『他所に行く時ぃなっち　袖口がホコロビちょる。ちょいとツマンジ　針じモヤモヤとまぁ　ツクロイは出来た。が　もし間違うちそんソン針ぅウッカリ袖口に残ったら…。考えただけでん　オジイド。自分にならトモカク　相手に針ん過ちども作り立つると……。

そんくれ常日頃かる　準備万端しちおく事が人間。それが心豊かじアリャコス　そんくれん心ん余裕　咄嗟の際ん準備する気構え。火事ん時慌てち枕抱えち　ウオサオゥする姿。様にならんけんど　慌てたときにゃ人間皆　オアイコじゃろぅ。

『やっぱ俺どう方ん五助さんな　違うのぅ　じゃき好きじ好きじのや』　『あんまりオダテテン　調子にゃ乗らんど』

五助さんが今日は何か　いいことあったんか笑顔がいい。『いんにゃ　三ヶ田町じの　祝言買い物んシタシに会うち』そん頃ん祝言ち言うと　大けな買い物なもう　こん辺まじ来ち買うんが決まり。それも買い物役まじあっち　それがまた好きじ親戚んしかる　頼まるるしもあった。

『こんだ買い物に加勢しちくれんな』『何え　でんわしじいんな』　内心な嬉しいき　前もつち店屋に『いつ何時頃に何人行くき』ち　連絡しちょきゃそん日は　もう昼飯かる晩飯　みやげまじ整えちょりよった。そんくれん実入りじゃき　店屋も逃すはざーねぇ。

そん日に着くと『はい、マァお茶でん』かる　下にもおかん扱いぶり。並べられた品物ぬ　店んしが説明しち値決めになりゃ　役職が出番じそん『駆け引き』が　『そりゃ高えなぁ　あっこじゃコレコレじゃつたに』　『なにえ　へぇ調べちょつたんな　仕方ねぇはもう　あんたに免じち　仕方ねぇな　負けたじゃ縁起が悪いき　ご祝儀じゃな』　さるもん。

『これじ全部そろぅたな』『ほんな皆んなじ手締めじゃ』しゃししゃんしゃん　賑やかな買いこみ売り出しが終わった。『まぁ早ぇき奥じ　お茶をあげてぇき』　案内されち奥に行くと『高膳拵え料理満開』　ニタリ果たしてドッチに軍配あがったか。

嫁入りするんを『アルク』とん言う。がそれまじゃ苦労もあったもんじゃ。子守り奉公に出た娘もあっち　子は泣くしなかなか忙しいき　取っちくれる晩方どま　山ぉ眺めちゃ里ぅ思いだしよった。母親を思いだすと涙が　ポロリ一筋頬に伝わっち流るる。すぐ夕暮れになるにふんと…
寝ぐらに帰るんか　一声鳴いたんは巣の子に。

母は達者か　歩きゃ三里
じゃまな　あん山な
影を落とした　七瀬川

子守あやしち　水車ん脇じ
こなされ　泣いた
日暮れ悲しゃ　七瀬川

夜風が肌を　心を責める
櫛け　したてん
恨む思いの　七瀬川

過ぎたあん瀬も　情けん淵も
花　せせらぎに
抱いちくれそな　七瀬川

昔しゃ文房具でん呼びかた
が違いよった。そん幾つか
を…

ほんの歩きゃ三里ん道
じゃが　あん山が奉公
ちゆう　境を造っちょ
る。川を眺めち顔がそ
こに　もの悲しく写る
んを見りゃ　喧嘩しち
今日は勝ったが　何か
寂しい気持ちになる。

夜が更けちヌルーナッ
タ　湯に入ると外かる
父親が　見ちょるごた
る。貧乏じゃきち涙顔
に『すまん』　ち言い
よるごたる声がナシカ
耳ん　奥深ぅ聞こえよ
るのん　親子なりゃこ
すか……。

イロチョウグ…くれおん。エンペツ…鉛筆。ガイテイ…画びょう。コガタナ…ないふ。トグ…削る。キナ…黄色。バフンシ…粗雑な材料での用紙。チョーメン…のーと。カッカタガミ…習字用紙。セイヨウシ…白紙。ヅガガミ…画用紙。カンバサミ…ファイル。カッポリ…えんぴつのキャップ。イケ…硯。インキ…いんく。

五助さんなナシ涙流しよんのかな　『りゃふんと　昔ぅ思いでーたんじゃなかろうか』『なんさま昔生まれじゃきのや』９０にもなりゃチッタ　思い出かあったんじゃろう。そりぃしてんゆう覚えちょんな　昔級長しよったち言うきのや。

野津原方言單語

野津原で古くから使われた　生活用語の方言は続編１１号からここまで　１１６５語が入りました。引き続き今回もその続き『きーセ』から　入りますので若い人たちには　馴染みが薄いかも知れませんが　お国の手形と言われるように優しく人情味も加わっています。のでお読みください。

き　キセソコノータ　着せるのをうっかりして。
　　キセテン　着せても　沢山着せたのに。
　　キセメト　着せまいと　着せなくても。
　　キゼワシ　気持ちが忙しく　慌ただしくて。
　　キセチャリャ　着せてやれば　着せることで。
　　キゾマジャ　木戸までは　家のすぐ側までは。
　　キゾグチャエーチョル　木戸は開いていますよ。
　　キゾカルヘーレ　木戸から入って　勝手に入ったら。
　　キゾァシノビグチ　木戸は内緒で来る所　こっそりと。
　　キゾグレシメチョケ　木戸は締めておかないと。
　　キゾントハオトガ　木戸は音がするので 忍びも苦労。
　　キゾッテンシレチョル 威張ったところでも。
　　キゾッチョル　威張っているか　信用問題。
　　キゾローチ　気持ちがまとまって　協力して。
　　キタマクラ　枕を北の方向にして　死者の寝姿。
　　キタキタ　来たようだよ　やっと来たらしい。
　　キタベラ　北側の　寒さのひどい方　日陰。
　　キタニノヤ　折角きたのに わざわざ来たのに
　　キタテンオラン　来たけれど不在 来たのも無駄に。
　　キタオトジャノゥ　来た足音がする　足音がそうだ。

キタトキンクチブエ　来たら口笛ん合図　逢い引きの。
キタカリャオモテ　来たいなら表から　玄関から来て。
キタソベオヤジガ　来たのはよいが側に親がいた。
キタミチスモドレ　来た道をすぐ帰りなさい。
キザミクウジ　刻んで中に入れる 刻み入れて。
キタクレジ　来たばかりで　ついでに来たので。
キタナイイガ　来たのはよかったが 当て外れの。
キタテン　来たところで　来ても意味がなく。
キタカロウジ　来たのはやまやまなのに 真剣来たく。
キタホウガ　来たのがよかったのでは。
キチットシヨル　律義にしっかりとして　礼儀正しい。
キチキチ　きちんと決まりがよい　ぴっしゃり。
キチーケン　すこしきついから 厳しい状態。
キチョキャマニアウ　来ていれば咄嗟に間に合う。
キチョルキ　来ていますから　着ているから。
キチナリャヤミ　辛いならやめたら　無理なら中止。
キチョツタナナイショ　来たのは内緒にして　着たのは。
キチミテバッカリ　着てみたいばかりに 来たいばかり。
キチンキチン　決まりのよい　しっかりした性格。
キチミリャ　来てみれば 着て見れば納得。
キチョクリ　着てください 来てくれるなら。
ギチギチ　粘り強くて　粘りが強すぎて。
キチョカニャ　来ていなてと 着ておれば安心。
キチョツテン　着ていても　来ておれば間に合う。
キチクレナァ　来てください　着ておくれ。
キチョキャコス　着ていればこそ 来ていれば安心。

き　キツカリャ…疲れたんなら安みなさい、疲労には休養。
キッテン……切っても、切手も、切られても大丈夫。
キツナッタンカ…疲れたのですか、疲れたら交替して。
キッカキン……話の切り出しになる、運よく助かった。
キッチョキャ……切っておけば役立つ、準備も必要。
キツナリャ……疲れたならば、中休みで能率が上がる。
キツノゥデン…辛くなくても休憩しましょう、中休み。
キツカッタ…辛く疲れたような、休憩しながらが得策。
ギッチョ…左きき、技能者が多い。左手がすごい技を。
キテンイイド……来てもよいですよ、まっているので。
キテケンドコレン……来たいけれど忙しくて、次回に。
キテナラマエクチ…来るなら前もって、予告してから。
キテトンマテ……来たいだろうが忙しいので、次回に。
キテノンワカル……来たいのもわかるが次の機会に。
キテンオラニャ……来ても留守しているから、次に。
キテゴタリャ…来たいのなら迎えに行く、待っている。
キテカロウ……来たいだろうから、迎えに行くから。
キトカロウ……来たいだろうなら迎えに、いいよ。
キトカリャ……来たいならよいから、待っているから。
キトデンコレン……来たくてもこられないの、迎えに。
キドッチフウミヨ…みせみせの格好で、ふう変わりの。
キドリャメニツク…派手好みでもみなみんな好きとは。
キドンコゼマチ……側の小さな田んぼ、小さくても畑。
キドリュシタカ……材料取りはしたの、準備は早めに。
キドグチャ……木戸の勝手口、気軽な出入り口。
キドウジョル……刻んでいる、刻むのも方法。
キドンナイイガ……気どっても風袋は知れている。
キドセンニャ…木戸の心づけ忘れないよう、常識大事。
キドロウチ……気持ちが勢揃いして、意見が揃うと。
キドマヤレヤ……性交で情愛の受け渡し、極限の喜び。
キドキャトッチョケ……時期のよい材料は早めに確保。

き　キドリヤン…外面ぁいいが、すこし威張りたい性格だが。
キトナリャ……来たくなったら、来たいようなら。
キナクセー…焦げるようなにおいが、何か燃えてないか。
キナゴージ……気が長いので困る、話だしたら長話しで。
キナレン…あまり着たことがない、来たことがないので。
キナシン…来たばかりの人に、来たとおもったら用事が。
キナマジバケスル……バッタまでがとびかかって。
キナマグセー…焦げたにおいがするような、燃えてない。
ギナギナ……うるさいような話し方、取り留めの無い話。
キナガシャ…着たままでなりふり構わない、帯もしめず。
ギニャギニャ…訳のわからない話題が、とりとめのない。
キニイリメート…気に入らなくても、勝手に決めてから。
キニムカニャ……気にいらないようなら、気が進まねば。。
キニャツト…キヤットする、突然痛みが走ってびっくり。
キニナリャ……気になるようなら、気がすすまないなら。
キニャセンクシ…気にしない性格なのに、妙にこざわる。
キニシチ…妙に気にして、よほど気になるのか。神経質。
キニシニオウチ……来たばかりに合う、急に再会した。
キニムキャモドル……気にいったなら帰る、気がすめば。
キニャナッチ……気にはなっていたが、心配していたが。
キニョウマジャ……昨日までは、つい先日までは。
キニョウカル……昨日からは、つい先日からは。
キネコユゥ……細い甲高い声が、独特な甲高い声が。
キネェナァ……黄色ですね。黄色のうつくしいこと。
キネモチャウメー…杵でついた餅は美味しい、独特な味。
キネグレガイイ……黄色くらいがよい、黄色の色が好き。
キネツキヤ……杵でついたなら、杵でつく音には哀愁が。
キノネェヘンジ……乗り気のしない返事、生返事に不快。
キノンコトカ……昨日の事ですか、先日のことでしょう。
キノリャセン……あまり気が進まぬが、考えて見ます。
キノミキノマメ……着たままの格好で、ふだん着のまま。

き　キノデンイイ…昨日でもよい、昨日でもよかったのに。
キノウハ……昨日は、前の日は、昨日の事で。
キノドカマサカリ……木の毒がつくと錆が出る注意。
キノンコタァ……昨日の事は、昨日の事の念押し。
キバレルリャ……頑張れるならば、元気出せるなら。
キバユースリャ……気早くすれば、急いでするならば。
キバエヤツ…気の早い人、すぐ実行しないと、即実行。
キバリャコス……頑張れるならば、努力すれば。
キバッチョケ…頑張っておけばよい裂いも、精出せば。
キバルリャ……頑張れるなら、〝精出せばよい事も。

キバミュツキ……黄色味をつけたら、黄色が目立って。
キバエーノ…忙しく早い性格、実行が早い、すぐ完成。
キバルカ…頑張りますか、精出せば凍る間もない水車。
キビッチョケ……束ねておく、束ねて保存する、束ね。
キビガワリー……気持ちが悪い、恐怖心になる心境。
キビランデン……束ねなくても、そのままでも。
キブンナドゲーナ…気持ちは落ち着いた、落ち着いた。
キビルリャ……束ねられるなら、束ねておけれるなら。
キブンユーミヨ……楽しく見れば、ゆったりして見る。
キブンヤジャキ……お天気者だから、移り気の早い人。

キブクリュ……たくさん着こんで、重ね着しすぎて。
キブンナ…気持ちは、愉快でそう快に、楽しい気持ち。
キベラシャ……着物を減らして、雑に着替えている。
キベタジノゥ……着物の着こなしが悪い、着方が品担。
キボネガ……心配が多すぎる、気を使いすぎて。
キボケチ……着物ばかり着て偏屈に、風変わりな着方。
キボニュ……心配症状、苦労性、異常に心配して。
キボネン……苦労が多すぎて、予想外な心配が。
キマラジャアルメー……性器が固すぎて怖さも。

き　キマリキッチョル……決まりをきちんとしてある、正確。
キマラン……なかなか決まらない、決定に手間どる。
キマメ…きままに、自由に、想い通りに、気任せにして。
キマリャコス……決まれば、早く決まれば一段落。
キマッチョル……決まっている、決定したよう。正確に。
キマランカン…決まらないかも、決定が難しい、難問題。
キマリソコネチ……話が決裂して、こじれた話合い。
キマカシ……気ままに、自由におまかせして、おまかせ。
キマンナハエー…決定は早い、話は即決、物分かりよし。
キミズガ……胃液が上がって、胃液が逆上する。

キミガワリィ…気持ちが悪くて、恐怖心が、おそろしく。
キミュウトン……決めますか、決めてもよいですか。
キミジコウジ…短気な性格、物分かりが早い、即決性格。
キミワルガル……こわがり、物怖じする性格、恐怖心。
キムリャコス……決まればこそ、決まったのなら。
キムツカシュ……気分屋、難し者、相手をするのに大変。
キムーチオムウ……決めようかと思う、決めたいと思う。
キムンナラ……決めるなら、早く決める藻得策。
キムルカ……決めますか、決めたらどうでしょう。
キムヒヤス……吃驚して、冷やっとする、咄嗟の激動に。

キメンジ…決めなくて、決めたらどうか、決めるの止め。
キメチョキャ……決めておいたら、決めたがよいのでは。
キメタカ……決めましたか、きめたらどうですか。
キメチョリャ……決めておけばなんとか、きめたがどう。
キメルリャ……決められるなら、きめられたらよいが。
キメルルヤ……決められるのなら、決める殊にしよう。
キメデーチカル…決めようと思っていたら突然。反対が。
キメチョイテン……決めていても反対になったり。否決。
キメチカル…決めてから、成立してから、決定したのに。

き　キメトーデン……決めたくても、決めたいのだがた。、
キメルルキ……決められます、決める覚悟で。即決する。
キメレメ……決められないだろう、決め切らないのでは。
キメタント……決めたようです。決めたと聞きました。
キモモヤス……心配をかけて、冷や冷やして、心配で。
キモリャカミサマ……やはり神様のご加護、山の神様で。
キモンガ……よくない方向、方位、避けたがよい方向。
キモイリャ……世話役の連絡係、万事に通じる世話役。
キモイッタ……胸に支えて、慌てて食べて器官に支障。
キモイイキ……思い切りがよくて、竹を割ったような。

キモンテニアウ…よくない方向に出会う、避けたがよい。
キモッタモウ……度胸者の泣き所、吃驚して慌てる。
キヤガリ……興奮して有頂天に、あまり突然なので興奮。
ギヤーギヤー……うるさく騒ぎまわる、賑やかすぎて。
キヤットスル……びくっとして体調に異常が、筋がつる。
キヤシナケ……気安い相手に、くったくない仲間。、
キャキャイウ……煩く騒ぎまくる、賑やかすぎに困惑。
キャクキヨリャ……客がきているよう、招かぬ客もある。
キヤロウガ……来ているいるだろうが、きたら来たらで。
キャリット……きちんと折り目正しく、真面目の原形。

ギュギュ……寿司詰め状態、満員になって、もう腹一杯。
ギュツトシミ…しっかり閉めて、解けないように閉める。
キュウニノヤ……急に言われて戸惑う、予告なしで困る。
キュウデンイイ……急に言われてもよいから、即告承知。
キュウクツン……窮屈で混迷、すし詰めに困り果てる。
キュウマジ……今日までに、急ぐから今日までに。
ギユウラシイ……煩く賑やかすぎる、騒がしい有様で。
キコドチ……聞きたいと詰めかけて、聞きたい事が多い。
キユリャ…消えたなら、消えるまで確認を、消えたよう。

き　キョロキョロ……落ち着きがない、当たりを見回して。
キヨルンカ……来ていますか、きているようです、来ます。
キョウクリャ……今日くれば、今日来たがつごうよいが。
キョトントシチ…吃驚したような、狐につままれたような。
キヨランゴタル……来ていない、来ないのかな、来たらず。
キヨッタニ……来ていたのに、来るはずなのに、来ますよ。
キヨルンカ…来ていますか、来るようです、来るはずなの。
キヨリャイイ……来ていればようが、来るはずですから。
キョツト……吃驚して、身の引き締まる思いになって。
キワキワン……ぎりぎり一杯の、寸分の隙もないようで。

キワイイキ……気持ちとはいいのだが、性格がよいから。
キワンシニ……側周りの人たちに、近所の人たちに。
キワタシカド……正気のままである、しっかりした認識で。
キワチュウテン……ぎりぎりの所と言っても、余裕のない。
キワカテレン……気分だけでは勝負にならぬ、勝負の多難。
ギワジ……ぎりぎりの所で、切羽つまった場所で、接点。
ギワンジョウ……はずれの場所で、周囲の片隅で、周辺。
ギワギワジャノゥ……ぎりぎりの場所で、接点の周囲で。
ギンギラショル……派手に輝いているが、見かけと本当は。
キンチャカァ……財布は、金入れは、買い物には必要な。

キンタモ……睾丸、男性の性器、性器をあんまり。
キンシャンオビュ…上等の帯を、厄年に娘に買ってあげる。
キンカンモウシチ……恐れ入って、かしこまる、緊張して。
キンノワラジュ……金を出しても捜せ、良縁のたとえ。
キンドマナオセ……性器などは隠せ、身なりはきちんと。
キンキンナリヨル……騒がしい金属音、鉄鋼場の周辺か。
キンナラネウチモン……本当ならよいが、騙されては元も。
キンマメナカヨシュ…性器は仲良しでこそ平和、融合の哲。
キンデン……金でも持ち方では鉄の価値、反対の意味も。

き　キラン…切らない、着らない、着ると困る、切らないが可。
キラワリャ……嫌われると、嫌われても、難し者と非難。
キランジ……切らないで、切られると困る、着らないで。
キクサゴチソウ……山菜のご馳走を接待される、自然食。
キラルリャ……切られるのなら、着られますか、来られる。
キランナラン…切らないと困る、着ることになった、絶縁。
ギラギラ……輝いて眩しい、予想以上に光る、着飾って。
キラレメー…切られないの、着られますか、切るのは無理。
キラスブゲン……おからの副食で富豊に、辛抱節約の戒め。
キラレンゴツ……切られないよう、着られては損するから。

キラレン…切られない、着るのは無理なよう、切ると困る。
キリハテン…着るのに不自由ない、切っても使い果てない。
キリギリジ……いっぱいの有様で、これ以上は無理と思う。
ギリギリモウチ……忙しく回って騒ぐ、回転競技に挑戦。
ギリット……一回り回転する。周辺を残らず回ってくる。
キリガ……決まりが、結末が、終わりの時が、まとまりが。
キリブゲン…桐を植えて栄えるたとえ、決まりのよい性格。
ギリモハリモ……お構いなしの世間知らず、自己主義な。
ギリガトウジ……几帳面で、性格無比、物固い性格。
キリガネエ……決まりが悪い、最後が決まらず、どこまで。

キリクウジ……間違えて他所の土地に、別の畝に入って。
キリサゲーチ……乱雑に切りまわして、見られない始末に。
キルルンナ…切れますか、切れないのでは、少し無理では。
ギルギルマワル……乱暴に回っている、無造作に回るが。
キルソベ……切っている側で、着ている脇で羨ましそうに。
キルリャイイ……切れるならよい、着ていられるならよい。
キルルンカ……切れるのですか、着れますか一人でも。
キルンナ……切る、着れますか加勢しょうか、切れるかな。

き　キルルゴタリャ…切れるなら、着ても似合うなら、着ても。
キル…食べキル、食いキル、打ちキル、思いキル。などに。、
キルグレ…切るぐれなら、着るくらいなら、切つてもよい。
キレッパシ……木切れ、細工の残り木、紙くず、裁断の屑。
キレンゴツ…切れないように、来ないように、危険だから。
キレチコス……切れるからこそ、切れないなら意味がない。
キレテン…切れても、切れなくても使い道が、使いようで。
キレドマ……布端、布端しなどは、はっきり言わないと。
キレタチ……切れたようで、無事に出来たよう、遮断した。
キレチョキャ…切れたので、切れさえすれば、切れて完成。

キレチョリャ……切れていれば、きれたなら大丈夫。
ギロギロミチ……怪訝な目で見つめる、怖い見方に驚異。
キロゥチョツテン…嫌っていても、嫌いはカムフラァジュ。
キロウジャ……切りましょう、切ったが、切ることに決定。
キロウドチ……切りますから、切ってもよいでしょう。
ギロット……怖い目で見つめる、驚異の眼は恐ろしい。
キロウチ……嫌って、嫌っているよう、反対意見のよう。
キワダッチ……格別に差がついて、はっきり見違えるよう。
キワチーチョリャ…特別に差がついて、色が変わっている。
キワンシニ……側の人たちに、近所の人たちにも、周辺の。

く　クアニャ……食わないと、食うからいきられる、食う大事。
クアンデン…食わなくても、食わないでも、くうのを我慢。
クアルリャ……食われるのなら、食われれば、食う魅力。
クアン……食わない、絶食、拒否食、食べないで過ごす。
クアリュウカ……食われますか、食事が可能か、食べても。
クアレメー…食われない、食べても大丈夫か、食事可能か。
クアアロタカ……鍬を洗ったですか、道具は後始末が肝心。

く　クイサゲーチ……乱雑に食べていて、食べた後始末が雑に。
クイシコ……食べれるだけ食べて、欲と駆け競べの食事。
クイバシ……食べている箸であちこち、食べ箸で物取りを。
クイチュウブ…食べる本能の病気、食べることだけに執念。
クイクイ……食べながら、食べてすぐに移動する。、
クイオーチ…食べる競争をするような、同じものを食べる。
クイチータカ……食いついて被害、毒虫に刺されて。
クイキル……食いついて切って、食いつき噛み切。
クイッパナシ……食べたままに失礼する、礼儀のない食事。
クイヨセン……食べてかぐ移動する、落ち着いて食べたら。

クイイジュ……食い物には執着する、食い物の罪は大きい。
クイバナ……食べてすぐに用事が始まる、多様な食後。
クイチギル……食いついて切り取ってしまう、被害甚大。
クイソコノーチ……食べ損なって大損、遅れた損な会食。
クイチイチ……食いついて被害が、意地悪く食いついて。
クイダオリュ…食べられるのに倒れている人、意外な結末。
クイツキャ……食いついたら、離さない執念の事もある。
クウタカシレン……食べたのかも、食べられたのか。
クウテン……食べてもまだ欲求不満、食べたはずが不足か。
クウチョンニ……食べているのに、欲しがる欲深い食通。

クウタミジャ……食べるための便法、食べる約束で働く。
クウタヌ……食べた物を、食べた分の負担を、会費を約束。
クウチョキャ……食べておけば元気でもある、腹八分に。
クウカルコス……食べるからこそ、たべれる内は元気な証。
クウタンビ……食べる度に感謝を、食べられる幸せ。
クウソベ……食べる側に来て、食べたいのか、欲しかろう。
クウナリ……食べるなりに、食べてすぐに、食後は休息を。
クウタモンノ……食べたものの、食べたと言っても粗食。

く　グウタロ…無精者、役に不足な性格者、咄嗟に間に合わず。
クエチコス…壊れてこそ、崖の重要さが解る、日頃の整備。
クエクエ……食べなさいよと強いる、壊れて不安になる。、
クエダシャ…壊れだすと、大事に発展する要素、事前用心。
クエカカル……壊れかかって不安が、予告なしもあるので。
クエタロウ……壊れたでしょう、そんな予感がしていた崖。
クエルリャ……食べられるのなら、食べておけば元気にも。
クエトウ……壊れた現場、壊れた後の惨状、壊れた異物。
クエレメー……食べられないのでは、無理に食べなくても。
クエンゴタリャ……食べれないのなら、食べたいもので。

クエヨリャ……食べられていれば、口から入るものが効果。
クエタリャ…食べれたのなら、食べ口がつくと元気になる。
クエソーン…食べれそうになった、食べ口がつけば大丈夫。
クエンゴツ……食べれないようでは、たべれる方法を考え。
クエタリコ……壊れたりなんか、壊れないから大丈夫。
クエンチュウテン……食べれないと言うても、少しでも。
クエタナ……壊れたのは修理すればよい、早めの修復。
クエチミヨ……壊れたら堪えないから、保安万全だから。

※　方言単語のひろがり⇨続編№１０号《平成２０年》から
毎回『方言単語のちらばり』として　綴って今回で１６号
《続編１６号》　あ⇨ア　から　き⇨エまで１１７３８語
が　散らばって掲載されています。同じ読みでも意味が
異なるなどと使い勝手がよく　まさに生活用語であった。

遠い昔は文字もままならぬ時代でも　言葉は通じ合う至便
さがこんなに　発達ひろまったのでしょう。複雑に絡まる
ようでも　内に秘められた人間の優しい　情愛はそんな難
解も即座に　顔色で理解できるまでに　進化もして来たの
です。次号まで。

あとがき

機器が新しいまではないけれど　物を大切にする崇高な心の方が　便宜して送ってくださったので　素人集団も活気を取り戻した思いです。五助街道物語『表往還街道№１』は　柿野坂から参勤交代道を離れて　現在の国道４４２号線を　旅の人と悲喜こもごもの滑稽な話題を　交えて江戸期から戦中時代までの　あんな話こげな話題を織り交ぜ　案外知らなかった輝き星ゃ　まさかの面白い話などを　入れました。

前回までは文字が不鮮明で　読みにくい場面も我慢してくださった　お詫びに野津原の『表幹線』を　これから５回に分けて温見まで　五助さんが旅人とアンゲサネこんげむき　歩きますので道ぅ間違えた時は　怒っちください。根は正直なんじゃがどうも　ちっと『お人好し』んふうじゃき。

『子どもん世界』は小学校で　毎月『読み語り』に利用します　野津原の民話、伝承から取り出したものを　子ども向きに構成したもので　最近は子どもも方言に興味をもって　嬉しい思いです。２０１０年は『竜馬伝』が　ＴＶ放送でも反響を呼びましたので　平成２１年《続編№１１号》からは　参勤交代道を野津原の一の瀬から　今市の小無田まで５回に分割して旅道中でしたが今回からは　表往還街道の旅日記になりました。

会員も皆様の温かいご支援によって　今だから残せる方言の記録に挑戦。将来の研究資料に役立てば　何より幸せと念じています。方言集の性格上もしかすれば　方言でないものや卑下した言葉　つかってはいけない言葉　なども入っていると思いますが　何とどご了承ください。皆様方のご健勝をご祈念申しあげています。又来年のお会いの節まで　ご自愛の程を。

会員一同

伝言板

№１７号

続編№１７号《通算２７号》

ご愛読を誠にありがとうございました。厚くお礼を申しあげます。平成１１年に続いて今回からは『表往還街道』を　五助さんが旅人と　野津原から温見まで　５回に別けて道連れの珍道中　あげな話こげん話題なんかを　広げさげーち歩きます。

このほか　野津原の伝承、民話。故郷の宝物。女性の底力。あげな話こげな話題。方言子どもん世界。故郷の味。逸話。ちょつと一服。表往還街道旅日記。なんかも……。

厳しい世相の流れの中で　人の幸せとは何か　心が貧しくなって行くような　懸念もあって　一日も早く世界が　人類が心豊かに過ごせる事が　何よりの願いです。古い昔から使って来た　生活用語の方言　聞くと荒むたい感触でも　心情は優しく思いやりの気持ちが　込められている　それが方言と思います。

ご愛読の　皆様方のご健勝をお祈り申しています。お元気で有意義な日々を　ご自愛の程を。

平成２５年５月吉日

〒８７０⇨１２１１　大分市野津原竹矢
野津原方言調査会　☎５８８⇨０５７２
事務局☎５８８⇨００９２

心に残る言葉

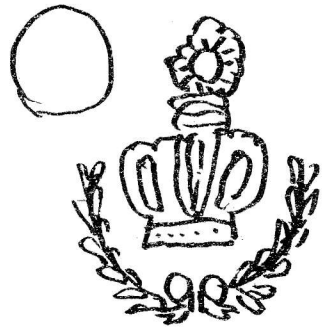
20題

表彰状　　野津原方言調査会殿

あなた方は永年にわたり　公共
生活の進展に奉仕し明るい社会
環境づくりに尽くされました。
よってその行為を称え善行盾を
贈り表彰します。

平成２４年１１月１７日

社団法人　日本善行会
会長　藤田耕三



彰

平成２４年度
秋季　善行表彰
野津原方言調査会殿

社団法人日本善行会

ご支援ご愛読の皆様に　厚くお礼を申し上げます。

平成４年に物好きな同志が　取り組みを始めまして　２０年目の平成２４年《２０１２年》　ご愛読者の方の推薦を頂きまして　この『野津原方言集』が　『公共生活への貢献』で　全国善行章受賞を　受けることが出来て　１１月１７日明治神宮での受賞。苦労が報いられる壮挙に感激いたしました。通算３５冊になりますがこの間　影からご支援いただきました　表紙画、題字などの素晴らしい作者をご紹介させて頂きます。

表紙画…松本英明様　酒井治郎様　寺司勝次郎様　後藤ヨカ様
後藤政治様　佐藤憲博様　さとうまや様　松本智裕様
はたのしょういち様　畜産構成友人団体様
題字……加茂佳代様　田口　勲様　岡本政雄様　姫野順子様
カット…中部小学校カット集団様　東部小学校カット会様
江戸文字…那須貴光様
プリンター…宮本武子様　松尾涼子様　小出登美子様
特別支援…第百生命保険株式会社様　日本財団様　ベスト電気様
野津原町社会教育委員会様　野津原町中央公民館様
取材協力…鶴崎老人クラブ様　佐賀関老人クラブ様
久住老人クラブ様　在京野津原会様　野津原文化協会様
資料支援…別府市☞松岡実様　大分市☞橋本寛治様　足立勇様

このほかにも多くの　ご愛読の皆様には発行の度に　ご愛読とご意見などもお寄せ頂き　今日まで留まる事なく　継続できたのも皆様方の影の　ご指導ご支援があったからで　切れ間なく発行はご愛読の　皆様方が発行していた　そんな思いに感謝申してこれからも続く限り　お粗末な冊子ですが　継続してまいりますので　今後ともにご支援ご愛読のほど　よろしくお願い申し上げます。

平成２４年１１月吉日
野津原方言調査会

晴舞台の東京明治神宮での　１１月１７日の表彰式には　生憎会員はそれぞれの仕事や　勤務や行事イベントがあって　出席は不可能でしたが　それだけ社会での活動場所が　期待されていたわけでした。主催者には大変ご迷惑と　存じましたが　社会の片隅でも世の中の　『お役に立つ人生』と　改めて感謝申し上げます。

ご推薦くださったご愛読者の　心くばりに感謝申して　これからいつまで続くかわ　未知数ですが継続出来る限り　初期の目的に向かって　進む事を申し合わせています。

今だから残さないと　消えて失われてしまう　宿命になった里の生活用語でもあった　方言は長い間先人たちが　生きて行く為にも優しい　気持ちを交えながら　使って来た生活文化財でもあったと思います。取り組み苦労もあったが　多くの皆様に支えられ　ご愛読も頂いてその調査の　収拾の輪も広がりました。

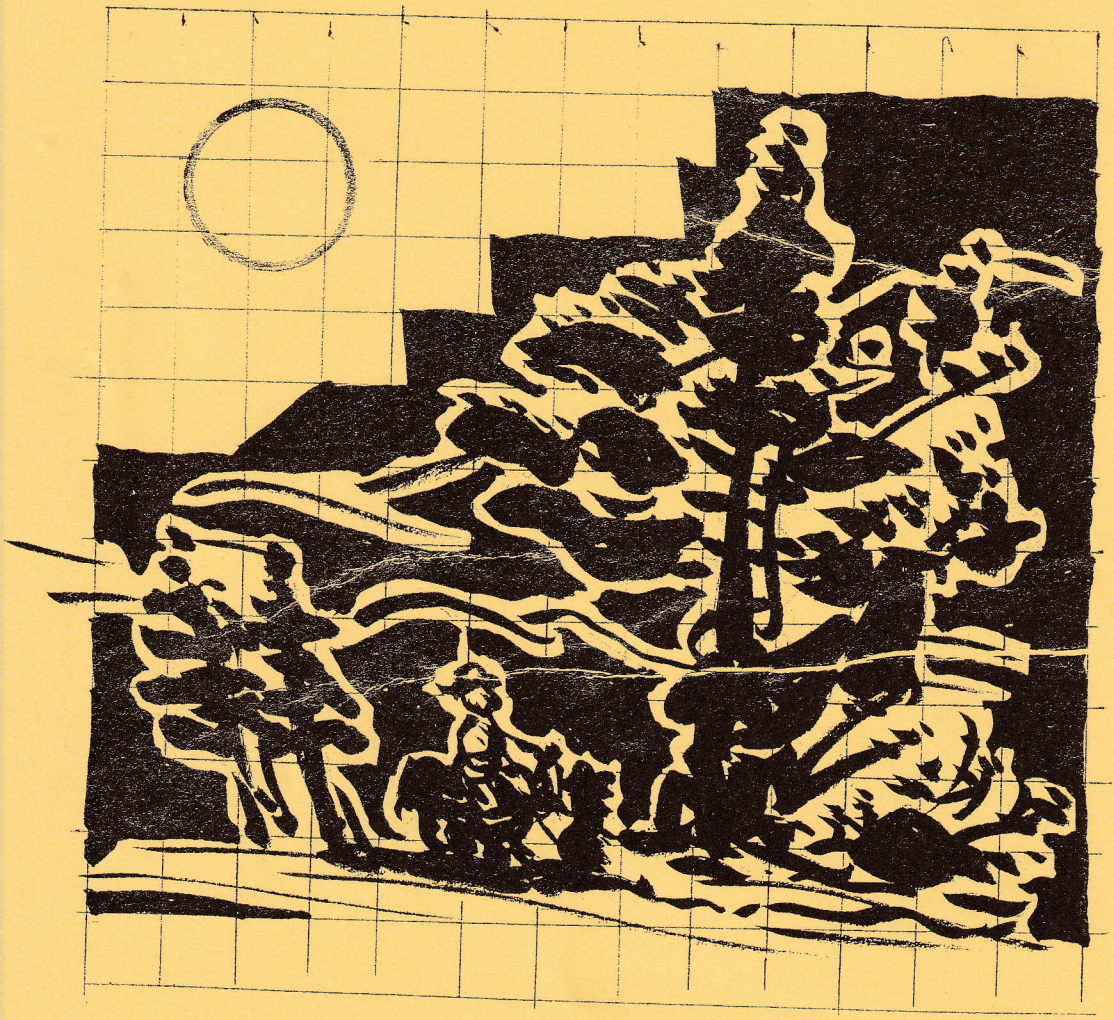
発足から共に頑張った　同志の中には途中で　悔しい惜別の人も今回の　ご褒美にきっと喜んで　くださっていると思います。『よだきいなぁ』　口癖にもなっていた　当初の数年間だったが『もうやるしかなかろうなぇ』に　なった頃からは　意欲も研鑽も積み重なって　ここまで辿りつきました。

本当に皆さんが影から　『やりよえ』と励まして　一緒に発行したようなものです。今回は記録に文字にするまでですが　次の研究勉強される　皆様のお役にたつなら　どんなに嬉しい事か。それを期待し信じてもいます。本当にありがとうございました。心が青春に甦り活力が　漲ってまいります。

続きに簡単な会の流れと　過去の資料などを添付申しました。これらも全て　ご支援の皆様　ご愛読の皆様の賜物です。

会員一同

五助街道物語



← 5

ご支援くださる皆様　ご愛読いただける皆様　多くの皆様に励まされて　よくもまぁ続いたと　感謝と感激も致しています。

そんな時期に　ご愛読の方と『六の渡し』の　詳しい事がどうしてでも知りたい　とお願いしましたら　『いいよ都合のよい日に　ご案内しましょう』　歴史にも地域にも詳しい　その社会福祉に精魂傾ける　そんな人間性は　過去に長くご指導も　願っていました。その人だったのです。

人の巡り合わせとは不思議なもの　他の方との好誼の　絆が回り回ってその方にも　続いていた意外な現実。話はトントンと進んで取材　収拾に駆け回ったあの日。思わぬ資料が集まり　現地探索は実入りも倍加。馬子歌の一つも出る　雰囲気になったのです。街道に馬子の鈴の音響くように。

博学なこの方は　その時に『こりゃぁ全国善行会』の　推薦をと燃え立ったようです。透かすように聞きただすので　資料まとめて送ったのです。会員は余暇に活動して　２０年辿りつくと　愛読者の希望の『年２回』の　実現に踏み出したいと。多様な会長もその　意気込みに合点がついたよう。

平成２４年の『２０周年』に　挑戦しょうと決める。腹案を暖めていたＩ＜Ａさん　すでに『推薦状発送したき』　まさかの快挙がこんなに早くとは……『よだきーなえ』『しかたねぇけんど』が　口癖のようだった頃から　無心に頑張ったその気持ちがここに来て　実現したのです。

『決まったから　東京で受賞式』　夢が輝くような苦節の２０年に仄かな灯りがともされたのです。ご愛読者の推薦でご褒美を受ける　取り組んだ最高の幸せです。この１年余りを振り返って　忙しさで状況は無理でも　受賞に報いたい思いは変わらなく　続いて行きます。

継続２０年周年『全国善行章受賞』を　記念して事務局に方言調査会の　表札を題字に毎回支援して　筆を運んでくださる　Ｊ＜Ｈ様が記入して頂きました。自分の勉強にもなると　謙遜される筆の跡は　調査会に刺激も与えてくれ　年は考えずにこれからも　故郷の生活用語文化の　継承に頑張る覚悟です。ご協力厚くお礼を申し上げます。

取り組み２０周年これも　ご支援くださる皆様　ご愛読の皆様のご協力によって　継続出来ているものです。今だから残せる　残さないと消え去り　失われてしまいそうです。

そんな調査をする宿命　巡り合わせになっていたと　自負もしています。

どこまで続くかは未知数ですが　継続せよと励まされてここまで辿り着きました今　これからも頑張ります。ご支援よろしくお願い申しあげます。

「野津原方言」との関連を求めて

〝関街道〟沿線で聞き取り調査

【野津原町】町方言調査会（早斐英行会長・八人）はこのほど、かつて肥後領の東玄関だった鶴崎と佐賀関を結ぶ〝関街道〟を訪ね、方言の聞き取り調査をして、現在、方言が微妙に変化している「ことが、浮き彫りになっている」と感想を語っていた。

鶴崎の「法心寺」を訪れた会員

会が調査、分類をしている「野津原方言」とのかかわりなどを調べた。

会員五人が参加。まず鶴崎の加藤清正公ゆかりの寺「法心寺」を訪ね、同寺に集まったお年寄りたちと歓談しながら、地元に残る方言に触れた。会員たちは「年配者の間に方言が根強く残っている平面、若い人たちとの交流によって、方言の姿」

佐賀関では、企業に勤める若い人たちと、昔から漁業を営むお年寄りたちと交流を持ったが、〝近代語〟があふれる町と、方言が根強く生きている海辺とのコントラストが大変ユニークだった。

同調査会では、これまでに野津原方言の約二千六百語の分類を終えており、来年三月までには、その集大成ともいえる「方言集」を出す予定。

（野津原町方言調査会員の那須政子さん提供）

▼会合

【大分郡】◇野津原町方言調査会（甲斐英行会長）の平成7年度第1回打ち合わせ会…19日午後5時からしあわせの丘で。「野津原方言」前編に引き続いて平成10年3月刊行予定の後編についての取り組みなどの協議。

丹生山地区は今市とともに旧岡領であり、明治になって直入郡から大野郡、そして合併してからは大分郡となった地域。那須さんは古い話、面白い話題、楽しかった時代などについて方言を使って話した。

◇野津原町方言調査会の聞き取り調査…このほど、町内丹生山の那須量さん（70）を訪ね、直入地方から入った方言や風習などについて聞いた。（写真下）

「方言集」の内容話し合う

野津原町の調査会 発行に向け準備着々

野津原町の方言調査会（甲斐英行会長・八人）はこのほど、町中央公民館で会合を開き、昨年五月から発行の準備をしている「方言集・前編」の内容などについて話し合った。

野津原町は江戸時代、肥後領「岡領」、天領などに分かれていたほか、隣接の府内や大野、直入の文化も混入。参勤交代の街道筋にあたっていたため、京・大阪の文化も交じって外から見ると、人情味のある温かい心や言葉（方言）が息づいているといわれる。こうした言葉を含めに収集、記録しようと、年五月から聞き取り調どで方言を収集。こに三千六百語を集め葬祭や食料など、分野十八に分類した。

前編は平成七年三百行する予定。方言をピックアップしてそれ説明。単語にまつわぼれ話、方言かるた番付などで構成する。は平成十年の発行を予農作業に関係する方言シーズンごとに会話形表現するほか民話、口唄なども載せることいる。

前編は冠婚葬祭など18分野で構成

上浦町の"仲間"と交流
野津原町の方言調査会

野津原町方言調査会（甲斐英行会長・八人）のメンバーがこのほど、上浦町を訪れたのは甲斐会長ら四人。町長室で松本町長から上浦町内のグループの活動ぶりなどを聞き、町内の福祉施設などを見学。この後、町内の民宿パンプキンで、調査会のメンバーと松本町長、それに上浦生活史編さん委員の吉岡穂朋さんが加わって、方言のよさや魅力などについて話し合った。

同調査会は最近「野津原方言・前編」を出しており、今は後編の刊行準備中。この資料集めのため、今後も各地のグループや方言に詳しい人などを訪ねることにしている。

調査会は町内の方言の記録作業を進めている。上浦町にも地元の歴史などの研究グループがあり、訪問はふるさとを愛するグループ同士が触れ合って今後の活動に生かしていこうという狙い。松本英明上浦町長と調査会員の一人が知り合いだったことから、松本町長の招待を受ける形で実現した。

訪ねて地元の人たちと交流した。

方言っていいものですネ

▼会合プレー女

【大分郡】野津原町の方言調査会の打ち合わせ研修会…このほど町内の食堂であり、会員ら8人が出席。県内の方言に詳しい大分市の菊屋奈良義さんを迎えて、「方言と生活のリズム」「保存したい方言のぬくもり」などについて意見を交換。（写真）

同方言調査会は町制施行40周年の節目に合わせて1998（平成10）年に「ふるさとの無形文化財・野津原方言」の後編（約300町を訪ねて同町内に残っている方言について研修した。

☆催し

平成7年度生涯学習団体助成金贈呈式

▼第百生命フレンドシップ財団（東京都調布市、春田博理事長）の平成7年度生涯学習団体助成金贈呈式＝写真＝が7月20日、第百生命大分支社で行われた。

応募のあった県内各地域の草の根団体から選ばれた5団体に助成金（各20万円）が贈られた。全国で490件の応募（150件に助成）があり、県内では9団体から応募があった。県内分の助成団体は次の通り。▽地域リハビリネットワークの会（中津市・浜崎満治世話人）▽大分県生涯教育学会（別府市・志賀義勇会長）▽豊の国はがき道クラブ（大分市・安部千子主宰）▽臼杵自然をまもる会（臼杵市・浪瀬弘道会長）▽野津原方言調査会（野津原町・甲斐英行会長）

編集方針を話し合う会員ら

野津原方言調査会の打ち合わせ会

野津原町の野津原方言調査会（甲斐英行会長・八人）の打ち合わせ会がこのほど、町内の食堂で開かれた。

同会は一九九二（平成四）年から地元に伝わる方言の収集、研究を続けている。このうち単語だけを集めた「ふるさとの無形文化財・野津原方言前編」（B6判、七十二ページ）を九五年に刊行。その後も単語以外の方言資料を収集。相当量が集まったため「後編」を刊行することになり、その編集方針を話し合った。

「後編」は、農作業をはじめ日常生活、子供の遊びの世界、民話などを方言を使って物語風にまとめる。

このほか町に関係の口説き唄、新しい歌い地名、「方言カルタ」なども収録する。

後編は町制施行四十の九八年に合わせて刊行する予定。会員たちは自の手作りだが、これを門的に調査する人たち考になれば…」と話している。

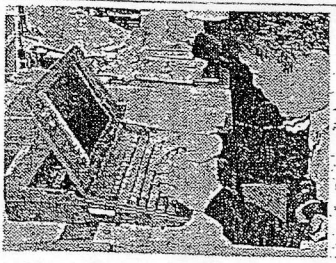
日本財団が助成金

野津原町方言調査会がワープロ購入

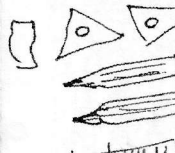
野津原町方言調査会（甲斐英行会長・八人）にこのほど、日本財団から助成金三十七万円が贈られ、同会はワープロ一台と付属品を購入した。

方言調査会は町内に残っている方言を記録して残す活動をしており、メンバーは一般町民の有志。方言集の前編を既に刊行、後編の作業に取り組んでいる。

メンバーは「ワープロが入ったことで、作業にはずみがついた」と喜んでいる。



作業にはずみ

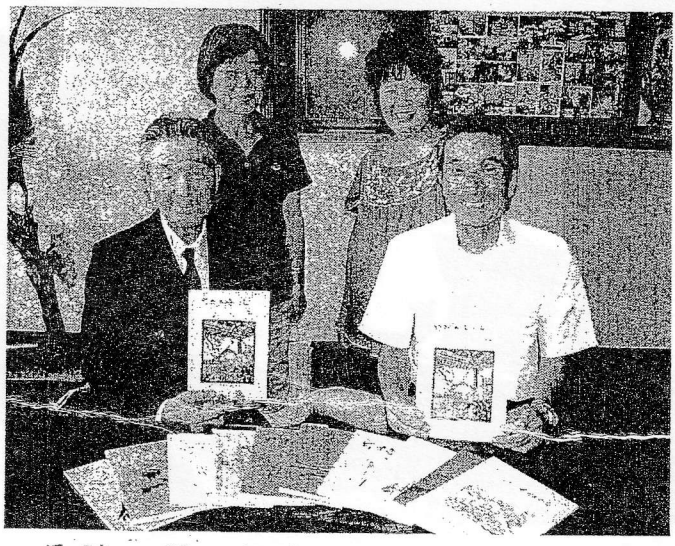


平成23年9月8日 佐賀新聞（夕刊）

"野津原弁"後世に

方言調査会が活動20年目

古里の言葉を後世に伝えようと記録を続けている野津原方言調査会が、活動20年目を迎えた。8月には「野津原方言集・続No.13」と、20年を記念した冊子「民話、伝承50編」が完成。「いつでも多くの言葉を記録として残したい」と気持ちを新たに張り切っている。



メンバーの（前列左から）佐藤さん、小野さん（後列左から）赤星さん、那須さん

1万7千語 冊子は通算23冊に

日常会話から地道に収集

同会は1992年に発足。現在のメンバーは、いずれも野津原地区に住む小野寿祐会長(68)＝竹矢、佐藤源治さん(87)＝野津原、赤星ヨシミさん(63)＝同、那須政子さん(64)＝今市＝の4人。これまで収集した方言は約1万7千語、手掛けた冊子は通算23冊に上る。

それぞれが、集会やゲートボール場などで、何げない日常会話の中から言葉を収集。方言集には、民話や伝承を収録した「方言子どもの世界」5編や、野津原に伝わる文化財を紹介した「宝の玉手箱」8編など全38話を盛り込んだ。

佐藤さんは、メモ帳を片時も離さず情報収集に努める。「江戸時代に肥後領だった野津原の方言は、京都の"おおきに"といった言葉の名残が伝わっていが特徴です」。那須さん「自分の気持ちを的確現できるのが方言の生まれも育ちも野津原星さんは「温かみのある言を子どもたちにも使ほしい」と話す。

編集から製本まで全作り。「野津原方言集執筆は現在No.19まで進おり、「来年はもう少ッチを上げて発刊でら」とメンバー。小野は「地域の歴史や文化る上で貴重な資料。楽ことをモットーに、今続けたい」と話した。

方言集は100冊、話、伝承50編」は20冊発県立図書館で貸し出か、大分市役所や野津所などでも閲覧できる。

発足当時メンバー

野津原町方言調査会のみなさん

ひたすら経験↓

菊屋奈良義先生との方言談義

〝野津原語〟の調査会が出版

大分市野津原の方言を調査、記録している野津原方言調査会（小野寿祐会長）は10月、通算35冊目の「野津原方言集15」を出版した。小野会長(69)は「発刊を重ねるごとにジャンルやシリーズも広がった。これからもたくさんの〝野津原〟の文化や暮らしを掘り起こします」と意欲的だ。

1992年に発足。「郷土の方言を記録に残そう」と方言集や単語集、子ども向けの方言歴史ガイドなどを編さん

秋季善行表彰を受ける野津原方言調査会のメンバー。前列左から小野会長、佐藤さん、後列左から那須さん、赤星さん

今後も意欲的に掘り起こし

あふれる郷土愛 方言集35冊目

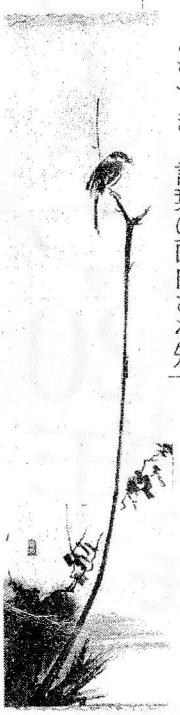
してきた。固定読者やネットで方言集のことを知った県外からの申し込みもあるなどファンも多いという。今回は「ふるさとん味」や「街道物語」、「女性の底力」など八つのテーマが方言でまとめられており、方言単語の解説もある。会は長年の活動が認められ、日本善行会から今年の秋季善行表彰（17日・東京）を受ける。

方言は現在4人の会員が日常会話の中などから収集し、整理。竹田市荻町から嫁いだ那須政子さん(65)は「地域で方言が全然違っていた。会員になって新しい方言を知ることもでき、言葉の面白さを知った」、野津原出身の赤星ヨシミさん(64)は「子どものころから使っていた言葉だけれど発見もたくさんあります」と笑顔。

最高齢の佐藤源治さん(88)は「小学校で読み聞かせをすると、子どもが興味を持って聞いてくれるのがうれしい。本を通じ、郷土を愛する気持ちを深めてほしい」と話した。

方言集は1冊700円だが送料290円が別途必要。県立図書館で貸し出しもしている。問い合わせは会事務局（☎097・588・0092）へ。

（釘宮美由紀）



24 11.10

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	③ 10
4	5	6	7	8	9	17
11	12	13	14	15	16	24
18	19	20	21	22	㉓	
25	26	27	28	29	30	

野津原方言集

こつこつ20年

高齢者の会話、聞き耳立てメモ

最新刊を持つ会員ら＝大分市野津原

大分市野津原地区の有志でつくる「野津原方言集」の版が、今年で20周年を迎えた。消えゆく地元らしさを字で残そうと、1992年に8人が「野津原方言調査」を結成。仕事の合間をぬって取材・出版を続けてきた。高齢で亡くなった人もおり現会員は4人だが「体が動く限り続けたい」と、次号の準備に意気盛んだ。

大分 住民有志が手作りの出版活動

最新刊の通算23号は、青い画用紙の表紙に同市の版画家・寺司勝次郎さんの版画で作った。中身は、コピー用紙を半分に折って両面にした全くの手作りだ。

全編、ほぼ方言ばかり。

「いやんばいに　早ぅ消防も来たき　鎮火したもんじゃき　嫁も気合が抜けち　そきーへニャへ、ニャ座りくうだ」（いい案配に早く消防も来たし鎮火したから、嫁も気合が抜けてそこへへなへな座りこんだ）などと懐かしい表現が満載。子供向けの民話や伝承、大人向けのよもやま話、方言による街道物語の連載のほか、食べ物や実在の人物が登場する笑い話などを収録。難しい方言の解説も、各話の終わりに添えられている。

50音順の「方言単語集」も不定期で掲載。最年長で事務局長の佐藤源治さん（88）は「野津原の言葉は怒ってるような口調が特徴だけど、根本にあるやさしい気持ちを知ってほしい」と語る。

野津原方言とはいえ、周辺地域の言葉が多く混じっていることも長年の調査でわかった。会長で元小学校長の小野寿祐さん（68）は「大分県以外の人が読んだらちんぷんかんぷんかもしれん」と笑う。

取材は、地元のお年寄りが集う井戸端会議やゲートボールに混じり、聞き耳を立ててひたすらメモする手法だ。メンバーの赤星ヨシミさん（64）は「活字に出ないイントネーションの表現に苦労するけど、本当に楽しい。足腰鍛えて続けたい」。那須政子さん（65）は「シビアな話し合いの場さえ和ませる方言は、生活必需品。大切に次世代に伝えたい」と話す。

印刷は小学校や公民館の印刷機、製本は手作業で毎回限定100部という素朴な本だ。大分市と合併する前の旧野津原町の町政40周年記念や小学校の教材用としての発行や、看護の場でお年寄りとの会話に役立てたいという希望で県立看護科学大に単語集を寄贈したこともある。

次号の通算24号は今月中旬に発行予定だが、メンバーは7年後の19年度までの原稿をすでに用意している。新しく入った話を差し替えながら、末永く出版を続ける計画だ。過去の発行分は大分市の県立図書館で読むことができる。問い合わせは事務局（097・588・0092）へ。

（原篤司）

2012年（平成24年）
4月6日
金曜日